

東方影対録 ～Memory of the Opposite Story

zakky

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前作

東方零無対 ｓ All Dimension of Opposite

の続編です

※注意※

東方Projectの二次創作及び一部三次創作です

自己解釈、原作と異なるキャラ設定

主人公がオリジナル、など色々な要素を含みます

作者の自己満足、深夜のテンションゆえ

後先考えないので本文がしょっちゅう修正されます

それでもいいって方のみどうぞお読みください

―前作―

東方零無対 ｓ All Dimension of Opposite

リンク：<https://syosetu.org/novel/164946/>

目次

第1章 月への侵略計画と喧嘩仲裁

第1話 宣戦布告 | 1

第2話 ゲスの極み | 5

第3話 対永琳その1 | 10

第4話 対永琳その2 | 14

第5話 帰宅 | 22

第6話 1日目 | 26

第7話 2日目 | 31

最終話 3日目 | 37

第2章 陰陽と厚み無き境界線

第1話 闇夜の閃光 | Quartet Side | 44

第1話 闇夜の閃光 | Mirror Side | 49

第1話 闇夜の閃光 | Phantasm Side | 56

第2話 談話 | 61

第3話 元凶命名会 | 65

第4話 注文 | 70

第5話 異変の始まり | 74

第6話 手がかかり | 80

第7話 注文品 | 85

第8話 隠し事 | 89

第9話 強化カプセル | 94

第10話 潜伏行動 | 99

第11話 紅魔館裏の戦い | 104

第12話 手がかかりその2 | 112

第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話	第3章 精霊大戦争		最終話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	
フラッシュバック	精霊討伐 終了	精霊討伐	精霊討伐	精霊討伐	精霊討伐	精霊討伐	精霊討伐	精霊討伐	精霊討伐	能力解放	恐怖光景	復帰	永昼と永夜	精霊の復活	大精霊の復活			双援軍	全ての影である者(仮)	裏方	発狂	理不尽な力の暴力	変異	自分の影	戦闘開始	
		8	7	6	5	4	3	2	1																	
227	223	218	212	207	202	197	193	189	185	180	175	171	167	163	159			153	149	145	140	133	127	123	119	

最終話 少女休憩中…

第4章 陰と陽

第1話 補給

第2話 侵食の闇

第3話 対面

第4話 光と闇の正面衝突

第5話 妖怪の反撃

第6話 幻想の崩壊

第7話 神合戦

第8話 妖精錬成

第9話 精霊たちに闇を込めて

第10話 神合戦終結

第11話 回帰？

第12話 回帰

第13話 チェックメイト

第14話 慢心注意

第15話 反復横跳び

第16話 異空

第17話 異空2

第18話 回帰

第19話 プラン変更

第20話 式神妖怪

第5章 夢中崩壊異変

第1話 異変

第2話 夢の事は夢に

322

238

242

246

250

254

258

262

266

270

276

280

285

290

294

298

302

306

310

314

319

323

328

最終話	異常歴史の焼却	437
第26話	精霊時代の魔素	433
第25話	カウントダウン	428
第24話	対ルーミア・ルミエル	422
第23話	目からウロコ	417
第22話	飛べぬ鳥に落とされる	413
第21話	分岐	409
第20話	対ルナク戦4	405
第19話	対ルナク戦3	401
第18話	対ルナク戦2	397
第17話	対ルナク戦1	393
第16話	元凶	388
第15話	自機経験者2	384
第14話	自機経験者	380
第13話	飛べない元魔女2	376
第12話	飛べない元魔女	372
第11話	ひっくり返って	368
第10話	輝針城	364
第9話	加勢	360
第8話	凍結	356
第7話	冷氣	351
第6話	特攻	346
第5話	ルーミアの家	340
第4話	歴史の穴	336
第3話	偽物	332

第1章	月への侵略計画と喧嘩仲裁	第2ルート
第8話	3日目	441
第2章	陰陽と厚み無き境界線	第2ルート
第1話	闇夜の閃光—Quartet Side—	448
第1話	闇夜の閃光—Mirror Side—	453
第1話	闇夜の閃光—Phantasm Side—	457
第2話	談話	461
第3話	元凶命名会	465
第4話	再び2度目の誕生	469
第5話	超高速の妖怪拐いと月兎	474
第6話	地獄鴉	481
最終話	絶望／回帰	487
終章	宵闇の閃光は虚影に隠された	
平和な春の日		491

第1章 月への侵略計画と喧嘩仲裁

第1話 宣戦布告

終焉異変から2ヶ月が過ぎ

徐々に暑さがましてきた文月の頃

月の裏にある月の都で、騒動が起きようとしていた

―「月の裏」月の都／月の勢力本部―

「モブ玉兎A」

「依姫様！」

豊かの海にこんな物が」

依姫の前に差し出されたのは穢れの無い白い箱だった

開けて中を除くとメモの様なものと手紙が入っていた

「友達の手紙を同封したので呼んどいて

八意XXより

追伸―私と姫と鈴仙は無関係よ」

「依姫」

「ありがとうね、わざわざ

戻っていいわよ」

「モブ玉兎A」

「いえいえ！仕事ですから」

そう言うくと玉兎は見張りに戻って行った

「依姫」

「さて、同封の手紙は…。」

依姫は手紙を開いた

「こんにちは、新たに幻想郷の妖怪賢者となった

人妖のルナク・トワイダウンと言うものです

どうかお見知り置きを

さて、今回はご挨拶に伺いたく

手紙をお送りした次第でございます

一週間後の正午に豊かの海に行きますので

よろしく致します」

「依姫」

「随分と礼儀正しそうな奴だな・

手紙が穢れていないのもこちらへの配慮か…

特に警戒する事は無さそうだな」

依姫は手紙に視線を戻した

「追伸―手を離れた方がいいで？」

突然手紙が穢れだした

「依姫」

「うわ！」

床に落ちた手紙は炎が広がってゆく様に穢れてゆく

「依姫」

「宣戦布告って事で良いのかしら…」

―「幻想郷」迷いの竹林／永遠亭付近―

「妹紅」

「寂しいよ、今日でお前の顔も見納めになると思うと」

「輝夜」

「あら、あんたが死ぬってことかしら？」

「妹紅」

「お前が死ぬんだよ!!」

「輝夜」

「あらあらあら？…この前も同じ事言ってたわよ？」

迷いの竹林では輝夜と妹紅が喧嘩していた

「輝夜」

スペルカード

難題「蓬萊の弾の枝 ―虹色の弾幕―」

「妹紅」

スペルカード

蓬萊「凱風快晴 ―フジヤマヴォルケイノ―」

お互いの技が激しくぶつかり合う

―永遠亭―

「てゐ」

「まーた始まったよ」

「鈴仙」

「毎日毎日飽きないのかしらね」

「永琳」

「今日は仲介役を用意したから早く終わるわよ？」

かの有名なあの終焉異変の元凶に」

―迷いの竹林／永遠亭付近―

「妹紅」

「そんな威力じゃ私を殺せないぜ!!」

「輝夜」

「あんたも同じような物よ!!」

「輝夜&妹紅」

スペルカード

「??」

「はいストロップ」

2人の中に1人の人物が現れた

「輝夜」

「誰よあんた」

「妹紅」

「邪魔すんな」

「??」

「おお…怖い怖い…」

俺はルナク・トワイダウン

八意XXに頼まれて仲裁に来た」

「妹紅」

「誰だその… 八意… 何とかって奴

まさか永琳か？」

「ルナク」

「失敬… 月語で喋ってた

さて、このけんか、どうすりや収まる？」

「輝夜&妹紅」

「此奴を完膚無きまでにボッコボコにして殺る」

「妹紅&輝夜」

「は？何言ってるの？そうなるのはあんただ!!」

「ルナク」

「OK」

ルナクは腕のリボンをとっぱらった

すると、影と覇気が薄くなり存在感が薄くなった

「ルナク」

「双方の願いを今叶えてやろう」

「輝夜&妹紅」

「ひ… ひいー」

— 永遠亭 —

誰かの悲鳴が何処からか響いてきた

「永琳」

「まさか本気出すなんてね…」

第2話 ゲスの極み

—永遠亭—

「てゐ」

「あ！帰ってきた」

ルナクが血の滴るダンボール箱を持って帰ってきた

「永琳」

「いくらなんでもやり過ぎじゃない？」

「ルナク」

「だって」

此奴を完膚無きまでにボツコボコにして殺^やれ
つて言うんだもんでそうしただけ

まあ、確かにやり過ぎた」

てゐがダンボールの蓋を開けた

「てゐ」

「うえ…」

「ルナク」

「開けない方がいいぞ」

「てゐ」

「挽肉じゃん」

「永琳」

「この2人なら元に戻るでしょ
さて、今晚はハンバーグね」

「鈴仙」

「え？」

うどんげが青ざめた

「永琳」

「これは使わないわよ」

どうせ姫様食べれないから貴方も食べてきなさい」

「ルナク」

「じゃあ3．1人前お願いします」

「てる」

「3・1?」

—その夜—

「てる」

「そういうね」

「うつつ」

「どうも、ルナクの式神の夜羽うつつです」

「正邪」

「居候の鬼人正邪です」

「針妙丸」

「正邪の友達の針妙丸です」

「ルナク」

「妖怪賢者のルナク・トワイダウンです」

「永琳」

「全員知ってるわよ…」

「早く上がりなさい」

「正邪&針妙丸&ルナク&うつつ」

「ですよー」

—少女&何かしら食事中—

正邪とうどんげ、針妙丸がダンボール箱を

覗いた以外は特に何事も無かった

「針妙丸」

「ごちそうさま」

小さなハンバーグがお皿に残っていた

「ルナク」

「食べないのか?」

「鈴仙」

「あれを見てからよく食べれますね」

鈴仙もハンバーグを残していた

「永琳」

「あの調子だと今晚にはゾンビレベルね」

「てる」

「何いつの間に見たの？」

「永琳」

「料理中にね」

「てるの分のお肉が足りなかったから」

「てるが青ざめて倒れた」

「永琳」

「冗談よ」

「単なる経過の確認」

その夜、ルナク達は反転郷の永遠亭に泊まった

——「反転郷」 永遠亭／永琳の部屋——

「永琳」

「本当に左右反対ね… 違和感しかないわ」

「ルナク」

「ココは科学的な実験施設として使わせて貰ってる

「これは開発品の霊力飴だ」

「永琳は飴を舐めた」

「永琳」

「確かに霊力がみなぎってくる…」

「ルナク」

「さて、手紙は届けてくれたか？」

「永琳」

「ええ、届けたわ」

「相当警戒してるみたいだけどいいのかしら？」

「ルナク」

「狙い通りだ」

「永琳」

「何で月と戦いたいのかわからないけど」
ルナクが割り込んだ

「ルナク」

「暇だから」

「永琳」

「戦闘狂ね」

「うつつ」

「あの… 鏡の外からゾンビの悲鳴が」

鏡の前に居たうつつが心配そうに言った

「ルナク」

「気にすんな」

「うつつ」

(あ、察し)

「ルナク」

「とりあえず1週間後に行くからよろしく」

「永琳」

「私に言われてもね…」

—「幻想郷」永遠亭—

永琳達が話をする少し前

「ルナク」

「おいお前ら… ちょっと」

「てゐ&正邪&針妙丸」

「？」

3人はルナクの居る部屋に入った

「ルナク」

「ゾンビには塩が効くらしいぞ」

「針妙丸」

「何でいきなり」

「正邪」

「あ、

確か今晚は2体のゾンビが居るんだったな」(ニヤリ)

「てゐ」

「なるほどねー」(ニヤリ)

「ルナク」

「まだ皮膚は再生し無いはず

つまりめちゃんこ染みて痛いはず

しかも目も見えない」

「てゐ&正邪」

「イタズラ(？) し放題って訳か」(ニヤニヤ)

そして現在に至る

「ゾンビA」

「アーーーーー!!!」

「ゾンビB」

「グオーーーーー!!!」

「正邪」

「あっちに行つたぞ！」

2人がゾンビに塩を投げつけながら追いかける

「てゐ」

「あっちには塩水トラップが」

「ゾンビA&B」

「ひゃーーーーー!!!」

2体のゾンビに大量の塩水がかかる

「正邪」

「人の苦しみこそ!!」

「てゐ」

「最高の娯楽!!」

2人は高らかに笑つた

「針妙丸」

「あんたらやり過ぎ」

第3話 対永琳その1

—永遠亭—

翌朝

「輝夜」(元ゾンビA)

「めっちゃ痛かったんだけど!!!」

てると正邪が2人の前で正座させられていた

「妹紅」(元ゾンビB)

「あの状態に塩かけるとかお前ら正気か!？」

「正邪」

「ルナクが」

「てゐ」

「やれって」

「輝夜&妹紅」

「あいつか…:(^ω^#)」

—永遠亭／永琳の部屋—

「ルナク」

「お！ちょうどいいところに」

「輝夜&妹紅」

「お前ふざげんなよ!!!」

2人が押し入ってきた

「ルナク」

「まあまあまあ落ち着け落ち着け
ちよつと頼みがある」

「輝夜」

「何よ!」

「ルナク」

「うつつが作った^危ガラクタの^險実験台に」

「妹紅」

「絶対やるか——!!!」

「輝夜」

「しかもフリガナがおかしい!!!」

「ルナク」

「フリガナは間違っていない」

「輝夜&妹紅」

「ふざけんなー！ー！！」

「永琳」

「ここ私の部屋なんだけど…」

「ルナク」

「大丈夫だって」

経口核爆弾とかガラス玉爆弾とか

比較的安全な」

「輝夜」

「此奴…狂ってやがる」

「うつつ」

「私としては毎秒60発の速度で射出出来る

ガトリングロケットランチャーを

嫌なら毎秒634発の発射可能な弾幕ガトリング砲

PHG—634でいいです」

うつつが目を輝かせながら言い寄ってきた

「妹紅」

「輝夜、逃げよう」

輝夜と妹紅は走って逃げ出した

「永琳」

「本当にそれらはあるのかしら？」

「ルナク」

「有りますよ」

「うつつ」

「反転郷の地霊殿に

私のガレージ的な感じになってるので」

永琳は目元をひくつかせた

「永琳」

「ところで、聞きそびれたんだけど
何人で行くの？」

「ルナク」

「最初に俺だけで豊かの海に行く

攻撃を回避&反射して恐怖心を植え付けて帰る

次の日は都までの半分の距離を

攻撃を反射しながら進んで帰る

3日目は都まで行って門を壊す

4日目であつと共玉座まで月の王に挨拶

居なかつたら追っかけて挨拶」

「永琳」

「最低ね」

「ルナク」

「お褒めに預かり光栄の至り」

「永琳」

「褒めてない

と言うかあまり月の軍事力を舐めない方が良いわよ？」

「ルナク」

「俺はつえーぞ？大丈夫だって」

「永琳」

「じゃあテストしましょうか」

「ルナク」

「いいよー…どこで？」

「永琳」

「庭で」

——永遠亭／庭——

「ルナク」

「死んだら負けな

そしたら完全復活させてやる」

「永琳」

「分かったわ」

「ルナク」

「実力の何%でいけばいい？本気は面倒だから無しな」

「永琳」

「じゃあ月で使うつもりの方で」

一方、うつつ達は少し離れたところで観戦を始めていた

「鈴仙」

「師匠が戦う所久々に見るなー」

「正邪」

「多分本気が見れるかもよ」

一方輝夜達は団子をかけていた

「輝夜」

「永琳に団子5本」

「妹紅」

「じゃあルナクに5本」

「ルナク」

「了解、うつつ！合図を」

うつつがロケットランチャーを真上に打ち上げ

妖力弾を当てて起爆させた

第4話 対永琳その2

―永遠亭／庭―

うつつがロケットランチャーを真上に打ち上げ
妖力弾を当てて起爆させた

「ルナク」

「ちよ、その合図はおかしいΣ／＼（。D。；）」

永琳はルナクの出方を伺っている

「ルナク」

「まあいいや」

スペルカード

陰乱「影の反乱」

永琳の影が永琳に襲いかかる

しかし軽くないなされて終わった

「永琳」

「なるほどね、相手の戦力をこうやって削ると」

「ルナク」

「ゞ」名答」

「永琳」

スペルカード

蘇活「生命遊戯 ―ライフゲーム―」

永琳を中心に

大弾、中弾、米弾を数方向に回転しながら放つ

そしてルナクを中心に避けるように

規則正しく小弾を生成した

「ルナク」

スペルカード

鏡面「リバースリフレクト」

永琳の弾幕がルナクに当たりそうになると

その弾幕が来た道を通って永琳に戻ってきた

「永琳」

「これで攻撃を弾くのね… 物理攻撃すら」

「ルナク」

「またまたご名答… 恐怖心は」

ルナクは永琳から輝夜へと姿を変えた

それは色までしつかりと同じで見分けがつかない

「ルナク」

「相手の仲の良い人、家族に変身して

相手の大将を攻撃する

雑魚は、それで十分」

「永琳」

「相変わらずゲスね」

永琳はスペルカードを中断した

「永琳」

「一旦本気を見せて貰おうかしら？」

「ルナク」

「しようがない… 昨晩は晩飯を頂いたしな

特別に見せてやろう」

ルナクは腕のリボンを完全に取り払った

すると、さっきまでの威圧感と存在感が薄くなり

陽炎の様なもの形の定まらない羽が生えた

「うつつ」

「全ての対の降臨だ」

「輝夜&妹紅」

「げげ…」

2人はルナクを警戒した顔で見つめた

「ルナク」

「結ぶのめんどくさいんだけどね

このリボン…」

「永琳」

「やる気だしたら？」

「覇気が無いわよ？」

「ルナク」

「性質上そうなる

だってあらゆるものの影だからな」

「永琳」

「特に注意して見ることも無い影だからって事ね」

スペルカード

秘術「天文密葬法」

ルナクの周りにいくつもの魔法陣を展開し

そこに大弾を打ち込む

すると魔法陣から米弾が発射された

「ルナク」

スペルカード

反転「オフエンシブリバース」

一瞬で永琳とルナクの攻防が逆転した

「永琳」

「え？」

気づくと永琳がスペルカードを受け

ルナクが攻撃していた

「ルナク」

「自分のスペルカードを食らう気分はどうだ？」

「永琳」

「自分のくらい避けれずはどうしろって言うの？」

永琳はスルスルと避けて行った

「ルナク」

スペルカード

式神「夜羽うつつ」

ルナクは頭上に魔法陣を展開

そこからうつつが飛び出す

「うつつ」

「傍に居るんですからわざわざ召喚しなくても」

「ルナク」

「カッコ良さ重視」

「うつつ」

「まったく…」

スペルカード

危険物「ガトリングロケットランチャー」

うつつはデツカイロケットランチャーを取り出して

その先を永琳に向ける

「うつつ」

「60回／秒モード、安全装置解除

ファイヤー……!!!」

永琳にロケットランチャーの雨が降り注ぐ

「永琳」

ラストワードスペルカード

「天網蜘蛛捕蝶の法」

永琳はレーザーの網を作り対処した

「ルナク」

「お……！や……！」

「うつつ」

「なん………か？」

爆発音が大き過ぎて指示が通らない

うつつがガトリングを止めた

「うつつ」

「なんですか？」

「ルナク」

「音がデカすぎる、あとで改良な」

「正邪」

「耳が……」

「針妙丸」

「キーンて言ってる」

正邪達は耳を抑えて座りこんでいた

「永琳」

「計画性ゼロね」

「ルナク」

「じゃあ次！」

スペルカード

解消 「デイスエイブルサージ」

永琳を不思議な波動が襲った

「永琳」

「…何も無いわよ」

「ルナク」

「蓬莱の薬の効果が切れるかと思ったんだが」

「永琳」

「あれは不老不死にする薬よ

簡単に言うとな死身は後遺症的なものよ」

「ルナク」

「なるほどね、じゃあラスト」

ルナクは一瞬で永琳に詰め寄ると

永琳の顔の前に手を出した

「ルナク」

インポッシブル^{不可}ラストワードスペルカード

「共鳴破壊」

手のひらから波動が放たれると

永琳が倒れ、頭を押さえてうずくまる

「鈴仙」

「師匠！どうなされました？」

「永琳」

「あ、頭が…い…痛い」

今度は仰け反りながら身体が痙攣しだした

「鈴仙」

「お師匠様ー！しっかり!!!」

貴様!!いくら不死身だからって!

何をした!!」

永琳の鼻から血が出始めた

「ルナク」

「脳を共鳴させてる

もうそろそろペーストになるぞ」

「永琳」

「う……が……」

永琳の動きが止まった

「ルナク」

「勝負あつたな」

「輝夜」

「ちえ……」

悔しそうにする輝夜とは逆に

妹紅は嬉しそうな顔をしている

「妹紅」

「まいど」

「ルナク」

「さてと」

ルナクは永琳を大きな結晶に閉じ込めた

「ルナク」

「ざつと3分で完治」

「鈴仙」

「これは？」

永琳が入った緑色の結晶をつついた

「ルナク」

「回復用の結晶

一応死んでも完治して生き返る」

「鈴仙」

「欠片を下さい」

「ルナク」

「いいけどこれは俺の能力

「アトリビュートクリスタル・樹」

つまり「天空の欠片」の1つだぞ？

本来は植物の力を扱うための物だ
それなりの対価を貰うぞ？」

「鈴仙」

「へ、へそくりで…。」

「ルナク」

「却下、額が期待できない」

「最低でもお前の健康寿命2人分」

「鈴仙」

「そんな…。」

「ルナク」

「そもそもの話だがこの能力は

俺やうつつによつて負傷した者にしか使わん

死ぬ者、負傷する者、病気になる者

はそういう運命だったって事だ

それこそである、早苗、レミリアに頼め」

「永琳」

「確かにうどんげの

多くの人を救いたい気持ちは分かるわ

でも本人がそういうのだし、諦めましょう」

永琳は結晶から出てきていた

「ルナク」

「あれ？早くね？」

「永琳」

「不死身の蓬莱人を舐めないで欲しいわね

ところで何であれ砕けたの？」

永琳が入っていた結晶は砕けていた

「ルナク」

「見てて復活感があるから

後は出てきやすそうだから」

「永琳」

「...」

第5話 帰宅

—永遠亭—

「ルナク」

「じゃあそろそろ帰るわ」

「うつつ」

「夕飯ご馳走様でした」

「針妙丸」

「またねー」

「正邪」

「じゃあな悪戯兎」

「てゐ」

「またねー天邪鬼」

うつつ達は鏡の中へと帰って行った

「ルナク」

「解析出来るならしてみろ…」

そう言うるとルナクは鏡の中へと帰って行った

「鈴仙」

「バレてるー」

「永琳」

「じゃあ欠片の解析お願いね」

「鈴仙」

「師匠にもバレてる…」

「永琳」

「私は月に報告して来るから」

永琳は自室へと戻って行った

一方庭の角では

「輝夜」

「ねえ妹紅」

「妹紅」

「なんだ輝夜」

「輝夜」

「蓬莱人としてルナクとやらに

負けっぱなしは気に食わないわ

一泡吹かせてやりましょうよ」

「妹紅」

「お前と手を組むのはごめんだが私も同感だ

仕方ない…今回だけ協力してやろう」

「てる」

「お前らはヤサイ人の王子とカカ○ツトかなんかか？」

——「反転郷」 永遠亭——

「ルナク」

「月に情報が筒抜けになってる…」

ふっふふふ…計画道り…」

「正邪」

「死神ノートでも手に入れたのか？」

「うつつ」

「かぐもこコンビも復讐に燃えてる様です」

「ルナク」

「大丈夫だ、返り討ちにしてやる

そういえば正邪、お前てみると仲良さげだな」

「正邪」

「最強の組み合わせだろ？」

「ルナク」

「最悪の組み合わせだな…」

その夜

——「幻想郷」 永遠亭——

「鈴仙」

「師匠、解析の結果ですが

物質というよりエネルギーの結晶な様なものでした

妖力系のエネルギーにのみ反応し

触れている生物の再生能力を飛躍的に上げます

そして周りの植物、菌類の成長を

加速させる力もある様です

最後に、エネルギーの消費がえげつないです

分からないことはなぜ死者を蘇生出来るのかですね」

「永琳」

「どうもありがとう」

まるで蓬莱の薬のような性質を持っているのね

こっちも報告が終わったわ

どうも紫が侵略した時より少ない勢力で

立ち向かうそうよ

相手は1人だからこれで十分って調子こいてたわ」

「鈴仙」

「私達はどうしたら」

「永琳」

「どうもしないわよ」

強いて言うなら観戦位かしら？」

「鈴仙」

「完全に他人事ですね」

「永琳」

「ええ、完全に他人事よ」

――「月の裏」 月の都／月の勢力本部――

「モブ玉兎B」

「大丈夫なんですか？」

「依姫」

「たとえば八意様を倒したからって相手は1人

数には敵わないはずだ……」

豊かの海に拠点を建てておいてくれ」

「モブ玉兎B」

「了解しました！」

「依姫」

「あと一応「おぼろ朧」を指揮に置いといて」

「モブ玉兎B」

「あ、あの朧さんを!？」

「依姫」

「ええ、最悪を想定しての戦力よ」

「モブ玉兎B」

「了解しました！」

玉兎の少女は司令室をあとにした

「依姫」

「あと6日か…」

第6話 1日目

―「反転郷」紅魔館／居間―

永琳と戦ってから5日がたった
ついに挨拶の日(?)になった

「ルナク」

「通信機持った、飴持った、財布持った、OK」

「正邪」

「財布は要らんだろ」

「ルナク」

「良いのがあったらお土産にと思って」

「正邪」

「通貨が違うと思うんだが」

「ルナク」

「あ…まあいいや

行ってくる」

ルナクは鏡を潜り、紅魔館の裏から飛び立った

―「月の裏」豊かの海／拠点―

「モブ玉兎C」

「リーダーに反応あり!!」

落ちてきます!!」

「臈」

「夢の世界経由でもなく

テレポートでもない

まさか落ちて来るとは…」

全員戦闘態勢で位置につけ」

指示を出した玉兎は長身で茶髪の

耳のピンと立った男性だった

「臈」

「全員ルナティックガンでの銃撃に備えろ」

「モブ玉兎C」

「了解しました」

そう言っていると各部隊の隊長にそれを無線で伝達した
一方ルナクは

「ルナク」

「お、着いた」

ルナクは隕石の如く月面に衝突し、土煙を巻き起こした

「臚」

「依姫様、敵が到着しました」

「依姫」

「うむ、総員攻撃開始!!」

土煙に向かって無数のレーザー弾が打ち込まれる

「臚」

「流石にこれを耐えきる事は無いですね」

「依姫」

「攻撃停止!」

玉兎達の攻撃が止まった

「依姫」

「奴の顔を拝みに行ってくる」

「臚」

「お供します」

2人はルナクの所へと向かった

「依姫」

「どうだ?相手の様子は」

「モブ玉兎D」

「はい... 無傷で...」

玉兎の指さす方向を見ると
色のおかしい紫が立っている

「ルナク」

「どうもはじめまして

私の名前はルナク・トワイダウン

この姿は八雲さんから借りさせて頂いています
それと随分と長い歓迎でしたね

依姫さんと隴さん」

ルナクは鈴仙に変身した

「隴」

「鈴仙先輩!？」

なぜ!？」

「依姫」

「惑わされるな!!」

「ルナク」

「そんなに不思議ですか?」

次は隴に変身した

「依姫」

「総員攻撃再開!!」

再び攻撃が始まった

「ルナク」

「やれやれ」

ルナクは手を合わせると衝撃波を発生させた

波動は月の軍隊を巻き込み、1／4が吹き飛ばされた

しかし攻撃は止まない

「ルナク」

「流石は月の兵士、鍛えておられる」

攻撃を軽々しく避け続ける

「ルナク」

スペルカード

鏡面「リバースリフレクト」

攻撃を反射した

兵士達は自分の撃ったレーダー弾に撃ち抜かれ

次々に倒れてゆく

兵力は元の1／4まで減り、攻撃が止んだ

「隴」

「くそー!!よくも!!」

隴は剣を持ちルナクに攻撃を仕掛けた
ルナクは最小限の動きで避ける

「ルナク」

「おやおや、男の玉兎って居たんですね」

「隴」

「そりやいるさ、山ほどな!!」

剣を薙ぎ払う

しかしまた避けられる

「ルナク」

「貴方は能力を持っていますね？」

「どう言った能力なのでしょう？」

「そしてなぜ使わないんですか？」

隴は後ろに下がり、ルナクへと構えた

「隴」

「教えるわけ無いだろ」

「ルナク」

「ほう…」

能力を相手に教えると不利になる

それ対策ですか…

私の能力は有と無を操る能力です

以後、お見知り置きを」

「隴」

「チート能力じゃねーか

って言うか言うなよ!!」

「ルナク」

「過ちを繰り返さない能力

を持つ貴方に言われたくないですね

あと今知ったのでこれでおあいこです」

ルナクの胸元にいつの間にか

ぶら下がっていた目玉が消えた

そして朧は目を見開いた

「朧」

「なぜそれを！」

「ルナク」

「地上の… いえ地下の妖怪の能力です

一時的にその能力を有る物にしたので…

そろそろ帰りますね、また明日

そういえば死んだ兵士達は無事ですから

ルナクは黒い霧となって消えた

「朧」

「くっ…」

今回の戦いでは負傷者は1人も居なかった

死者負傷者は不思議な結晶によって完治していた

―「月の裏」月の都／月の勢力本部―

「依姫」

「明日は都に向かって来るそうだ」

「朧」

「依姫様… 奴は一体何者ですか？目的は!？」

朧は真剣な顔で聞いた

「依姫」

「私にも分からん…」

八意様の情報によるとアレは力を封印した状態らしい」

「朧」

「一体何者なんだ…」

第7話 2日目

―「月の裏」豊かの海／拠点―

翌日…

ルナクは紫の姿で登場した

「ルナク」

「こんにちh」

「朧」

「撃てー!!」

またもや一斉射撃が始まる

「ルナク」

「あの一…」

銃撃による土煙を立てながら朧へと近づぐ

「朧」

秘術

朧月幻視（ろうげつげんし）

朧が2人に増え左右からルナクに切り掛る

ルナクは右から来る上段切りを躲し

左から下段薙ぎ払いをする朧の顔面を蹴り飛ばす

「朧」

「ぐふっ…」

（何故だ… なぜどちらが本物か分かるんだ…）

朧は大きく飛ばされた

「ルナク」

「なんで分かるんでしょね？」

それより

能力は弱いですが貴方も波長を操れるのですね…

ですが鈴仙には敵いません」

ルナクは鈴仙に変身した

「ルナク」

模符「幻朧月睨（ルナティックレッドアイズ）」

全方位に銃弾型の弾を発射するが

その弾は途中で消える

次に円状に中弾を広げながら生成してゆく

そして消えていた銃弾型の弾が再び現れ発射される

「隴」

「くっ…なぜ先輩の能力を…」

隴は最初こそ被弾していたが徐々に被弾が減ってゆく

「ルナク」

「それは私の正体に関係します

貴方が知るべきことではありません

まあ力の片鱗は見るようになるでしょうけど」

ルナクは攻撃を止め、

再び始まった銃撃を受けながら都へと進む

「隴」

「敵に背を向けるな」

隴はルナクの胸を後ろから剣で貫いた

「隴」

「戦う上での鉄則だ」

胸を紅に染めたルナクは歩みを止めた

「隴」

「お前の敗因は

己の力にうめぼれ注意を怠ったこと

能力に頼り過ぎたことだ」

「ルナク」

「…」

「隴」

「過去の自分を恨むんだな」

ルナクは腕のリボンへと手をかけた

「ルナク」

「残念」

「隴」

「!？」

心臓を貫いたはずの相手が

ニヤリと不気味に笑いながらこつちを見てきた

「ルナク」

「1つの教えてやろう」

お前の敗因は相手に有効な殺り方を知らない事だ」

「朧」

「なんだと!？」

ルナクはリボンを半分解いた

するとおかしな羽が生え、輪郭がよどむ

「ルナク」

「俺はこの程度では死なん」

身の危険を感じた朧は剣を引き抜き、数メートル下がる

「ルナク」

6色「色彩乱斬」

ルナクの周りに生成された

紅青緑白黒灰色の6つのクリスタルから

光の刃が生成される

そしてそれぞれが別の方向から切りかかる

「朧」

「久々の戦ってるって感じだよ」

「ルナク」

「前に妖怪が攻めて来た時

能力故に成長し過ぎてしまい

日課の訓練では成長どころか維持すら出来なくなった

という感じか？」

朧は斬撃を受け止めながら答えた

「朧」

「そうさ、お陰でなまっちまったよ」

朧はどンドンルナクへと近付いて行く

「ルナク」

ラストワードスペルカード

「極彩乱斬」

結晶の数が20に増えた

「朧」

「ラストワードって事は全力攻撃って事だな

これでも一応スペルカードルールとやらを

独学で調べてたんだよ」

朧は結晶が増えてもなお攻撃を弾き続ける

「ルナク」

「罅が明かないから次行くぞ!!」

ラストワードスペルカード

核熱「テラケルビン」

紅い結晶に神力をチャージして

超高温の光線を放った

朧は光線を大きく避けた

「朧」

「アツツ!!」

剣は光線には当たらなかったものの

先端が高温に炙られて溶けてしまった

「朧」

「何だこのデタラメな熱さは!」

光線の通り過ぎた地面は熱で蒸発し吹き飛ばされた

朧は二丁のルナティックガンを取り出す

「ルナク」

ラストワードスペルカード

異変「間欠泉異変―末期―」

ルナクは手のひらを掲げ、小さな太陽を作り出した

「朧」

「貴様!何を!」

「ルナク」

「哀れ、月は新たな灼熱地獄に生まれ変わる
穢れなき地に地獄を!!」

そして太陽を月面に叩きつけた
着地点を中心に地面が溶けてゆく

「朧」

「総員退避!!」

兵士達が逃げてゆく中

地面は溶け続け大きな溶岩湖が出来上がった

「ルナク」

「うひゃー… 地面が真っ赤だ」

豊かの海の拠点溶岩に溶けてゆくなか

「朧」

「うわぁー… あぶねー…」

朧は空中に逃げていた

「ルナク」

「お前、飛べるんだな

てつきり焼き玉兔になって

美味しく頂けるかと」

「朧」

「俺を食うとか物騒だな

残念ながら飛べるぜ」

「ルナク」

「それじゃあ都に行くとするか」

「朧」

「!？」

ルナクは高速で都に向かって飛び始めた

朧も負けじとしばらく追い続ける

「朧」

「待て!!行くな!!」

「ルナク」

「では待ってやろう」

ルナクの姿が消えた

「臙」

「一体何がしたいんだよ……」

最終話

3日目

―「月の裏」都と豊かの海の間―

ルナクが消えたあと、溶岩湖は冷え固まり

朧は消えた場所で治した剣を持ち奴を待った

「ルナク」

「誰待ってるの？」

空間が割れ、そこからルナクが出てきた

「朧」

「誰だろうね」

「ルナク」

「用事が出来てしまってね

いい加減決着を付けようか」

ルナクは朧に変身しながら

リボンを完全に解いた

殺気と覇気が消え、影が薄くなる

そして陽炎のような大きな翼が生えた

「ルナク」

「最終形態とやらになってやったぞ」

「朧」

「能力も変わるのか？」

「ルナク」

「全ての対になる能力

相手と同じ力量にもなれるし

反対になることも出来る」

「朧」

「解説どうも」

ルナクに向かって剣とルナティックガンを構える

「ルナク」

「貴様に勝利はない」

「朧」

奥義

「真空斬」

剣を振ると真空の斬撃がルナクへと飛んでゆく

「ルナク」

「この程度か」

ルナクは斬撃をつまんで退かした

「隴」

「は!？」

「ルナク」

「スペルカードを知ってるなら使ってみろよ」

「隴」

「スペルカード…を…」

隴は少し考え、スペルカードを発動させた

「隴」

「紙は無いが…」

スペルカード

「模擬スペル」

隴はルナクへと散弾銃を連射する様に

不安定な形の弾を発射する

「ルナク」

「弾幕は初めてか…」

スペルカード

「超高压圧縮神力式炸裂弾幕」

神力を圧縮した弾を隴に向けて放つ

「隴」

「こんなもの真つ二つにー!」

隴は飛んでくる弾を切ろうとした

しかし刃が当たる瞬間、大爆発が巻き起こる

「隴」

「ぐ…」

隴は爆風で地面に叩きつけられた

「ルナク」

「じゃあな

ああ、そういえば4日目と3日目を
合併するって言つといて」

ルナクは臙の右肩と太ももをレーザーで貫いた

「臙」

「うっ… 待て… まだ…」

ルナクが無視して都に向かって飛んでゆくのを横目に
本部へと無線で報告した

―月の都／門前―

「門番A」

「誰だ貴様!!」

「ルナク」

「ルナク・トワイダウンだ」

「門番B」

「何しに来た!!」

「ルナク」

「月の王に挨拶しに」

門番達の質問に即答したルナクは

2人の頭を掴み、シンバルの様にぶつけた

「ルナク」

「門番達が伸びてるうちに…」

門を蹴飛ばした

「指揮官」

「撃てー!!」

2台の戦車が至近距離でルナクに高圧レーザーを発射した

「ルナク」

スペルカード

鏡面「リバーズリフレクト」

レーザーはそのまま砲身に戻ってゆき
戦車が爆発を起こす

騒ぎになっている内に真上に高く飛び上がる

「ルナク」

スペルカード

式神「夜羽うつつ」

魔法陣からうつつが飛び出し

一際高い建物の上の方のガラスをバズーカ砲で爆破した

「うつつ」

「あそこです」

「ルナク」

「上出来だ

行くぞ」

2人は混乱した門を後にし、砕けた窓へと飛んでゆく

――月の都／玉座の間――

「大臣A」

「侵略者は都の入口まで来てるようです」

「大臣B」

「ここは門から離れている、すぐ来ることは無いだろう」

突如窓が爆発し、2人の人物が飛び込んで来た

「大臣A」

「侵入者だ！護衛!!」

王の護衛達はルナクを捉えようとする

しかし反撃を喰らい、全滅する

そして王と数名の大臣のみが残った

「ルナク」

「密室化します」

うつつは部屋に結界を張り

部屋から人が出入り出来ないようにした

「ルナク」

「さて、」

ルナクは玉座に座る王の前に立ち
うつつはルナクの斜め後ろに立った

「ルナク」

「はじめまして、月の王」

私の名前はルナク・トワイダウン

そして従者で式神の」

「うつつ」

「夜羽うつつと申します」

王は椅子から立ち上がり、豪華な銃を手にする

「月の王」

「出てゆけ、二度と来るな」

ルナクは眉間に銃を突き付けられたが

そのまま話を続ける

「ルナク」

「今回は、幻想郷の新たな賢者として挨拶に参りました」

王は引き金を引いた

眉間に風穴が開き、紅い飛沫が舞う

しかしルナクは倒れない

「大臣C」

「なぜ死なない… あの銃は戦車を貫通する威力だぞ!？」

「ルナク」

「お土産としてこちらを」

ルナクは何事も無いように小さな綺麗な石を渡した

「月の王」

「貴様… 何がしたいんだ」

「ルナク」

「挨拶をしに来ただけです」

因みに、その石を碎けば今日負傷した者と

物品が元通り全快しますそれでは」

結界と共にルナク達が消えた

「兵士」

「王様！ご無事ですか!？」

兵士達が玉座の間へと流れ込んでくる

「月の王」

「ああ、無事だ」

「依姫」

「申し訳ありません」

兵からの通達があつたのですが

結界の影響で・・・」

「月の王」

「あいつが侵略者か？」

「依姫」

「恐らく」

「大臣A」

「今すぐに幻想郷に兵を送るべきだ!!」

「大臣B」

「いや、あいつへの有効的な攻撃方法が分からん限り

出兵は控えるべきだ!!」

大臣達が騒ぎ出した

「月の王」

「まあ良い、あちらも危害を加える気は無いようだ

本当に何がしたかったのだろう・・・」

王は石を粉々に握り潰した

――「幻想郷」永遠亭――

翌日

「永琳」

「あんた何がしたいのよ・・・」

「ルナク」

「暇だったからさ、」

「うつつ」

「展開グダグダ過ぎませんか？」

「ルナク」

「3日目は飽きたから手短にね…」

「と言いたいところだが…急用が出来てね」

「永琳」

「はー…」

「永琳は大きなため息をついた」

「永琳」

「もうこんな事しないでね」

「こつちも色々めんどくさかったんだから」

「月の王から通信が来たりしたし」

「ルナク」

「善処する」

第2章 陰陽と厚み無き境界線

第1話 闇夜の閃光―Quartet Side

―博麗神社周辺の森―

―夜―

博麗神社周辺の森にひっそりと建つ
さほど大きくないログハウス

そこには小さな人喰い妖怪が住んでいた

「ルーミア」

「そろそろ寝ようかな？」

明日はチルノ達と遊ぶ約束があるし…

やっぱり寝る時は体が小さい方が

広々寝れていいわよねー」

屋根裏の寝室に置いてあるベッドに飛び込んだ

「ルーミア」

「確か昼の10時に紅魔館の門に集合だったから

明日は7:30頃に出ようかな？」

ルーミアが寝付こうとした時

空が明るくなり始めた

「ルーミア」

「え？朝!？」

ベッドの脇の窓から空を見た

太陽が出てる訳では無いのに

明け方の様に空が薄暗くなっている

「ルーミア」

「異変かしら？」「永昼異変」なんてごめんよ」

空に小さな光の玉が発生した

ルーミアが凝視していると

光の玉が鋭い閃光を発した

「ルーミア」

「きゃー！！イッタイ目がー！！！！」

ガッツリと閃光を見てしまったルーミアは
床で目を押さえながら転がり回った

「ルーミア」

「あー…目にゴムパッチンされた位痛かった…
まったたく…目が覚めちゃったじゃない」

—翌日—

—「幻想郷」紅魔館／門の前—

「チルノ」

「遅いぞー！！ルーミア！！」

「ルーミア」

「ごめんごめん！」

昨日の夜、空が光ってから寝付けなくて…」

「大妖精」

「空？」

「チルノ」

「何時頃？」

2人は首を傾げた

「ルーミア」

「だいたい11時頃かな？」

「大妖精」

「子供なんだから早く寝ないとダメだよ…」

「チルノ」

「アタイなんて今日は5時に起きたんだぞ！！」

「リグル&ミステイア」

「ごめんねー」

2人が遅れてやって来た

「チルノ」

「おそーい!!… つて… なんか…」

「リグル&ミスティア」

「？」

「大妖精」

「なんか少し背が縮んでるような…」

リグルとミスティアが1、2センチほど少し縮んでいた

「ミスティア」

「そういえば昨日の夜

屋台をやつてたら空が光つて

それからかな？」

ちよつと体がだるいつて言うか重いつていうか…」

「リグル」

「私は朝起きたらみすちーと同じ様に…」

だるいつて言うより妖力が足りない感じに近いかな？」

「ミスティア」

「そう！そんな感じ」

「大妖精」

「私はその逆で朝から力が湧いてくるような…」

妖力に満ちた感じだったよ？」

「チルノ」

「アタイも！」

「ミスティア」

「ルーミアは？」

「ルーミア」

「私は… 特に無いわね

強いて言うなら光源を凝視したせいで

ムス○の気持ちがよく分かったわ」

「大妖精」

「だとしたら原因は… なんだろう…」

全員が悩み始めたところでチルノが言い始めた

「チルノ」

「とりあえず鬼ごっこしない？」

「いつもと違ってなんでも有りのやつ」

「大妖精」

「飛んでも弾幕で邪魔してもいいって事？」

「チルノ」

「そゆこと」

「リグル」

「虫も？」

「ミスティア」

「鳥目攻撃も？」

「ルーミア」

「闇も？」

「大妖精」

「瞬間移動も？」

「チルノ」

「ドンと来い！美鈴のどこ開始ね

ルールは

範囲は湖周辺

鬼と逃げる側のチーム戦で

1人でも5分間逃げ切れば逃げる側の勝利

捕まった人は紅魔館の門で待機！

復活なし!!

更に今回は特別ルールで鬼はメーリンに頼んで

1回だけ指定した人の方向にレーザを撃って貰えるよ!!」

「ルーミア」

「つまり相手の位置が分かると…」

美鈴にアポ取ったか？」

「チルノ」

「アタイは最強だからもう取ってある！

じゃあ大ちゃん鬼ね!!」

「リグル」

「最初っから強敵だな…。」

大妖精以外が蜘蛛の子を散らすように散ってゆく

「大妖精」

「それでは美鈴さん

リグルに向かってお願い出来ますか？」

「美鈴」

「了解です！」

美鈴は気を能力で探り、その方向へとかめ〇め波の様な光線を放った

「美鈴」

「あ…。」

「大妖精」

「当たったんですか？」

「美鈴」

「はい… クリーンヒットしました…。」

美鈴は冷静に答えた

「大妖精」

「じ、じゃありグルを捕まえて気まず…。」

第1話 闇夜の閃光―Mirror Side―

―「反転郷」紅魔館／次元ディメンショナルの書庫―

―夜―

「ルナク」

「これでよし!」

大きな針妙丸の姿をした

ルナクは本を閉じ、その本を書庫に登録した

「うつつ」

「ルナク様、お風呂が湧きました…」

つかぬ事をお伺いしますが何をなさっていたのですか?」

「ルナク」

「月からこっさり奪った技術を記録してた」

ルナクの手から本が飛んでゆき

奥の方へと飛んでゆく

「ルナク」

「ところで、一体誰に変身すればみんな分かりやすいと思う?」

「うつつ」

「大きい針妙丸なら大ききで分かりやすいと…」

まあそれでいいんじゃないですか?」

「ルナク」

「なら今日はこのままで居て見るよ」

風呂入ってくる」

うつつはルナクが書庫を出たことを確認し

通信機を取り出すと

いつもと違う周波数で通信を開始した

「うつつ」

「作戦開始!!」

―「反転郷」紅魔館／正邪の部屋―

「正邪」

「了解!!」

「チビもいいか?」

「針妙丸」

「いいよー」

――「反転郷」紅魔館／脱衣所――

「ルナク」

「正直言うと風呂も必要無いんだけど」

「娯楽とイメージの為…：…しょうがない…：…」

「ルナクがブツブツ言いながら脱衣所に入った」

――（前略）次元の書庫――

「うつつ」

「これより」

「ルナクは男か女か目視確認作戦」

「を開始する」

「うつつは正邪の部屋に向け、移動を始めた」

「正邪」

「機材に問題なし」

「ターゲットの入室を確認」

「目視で確認出来ません」

「正邪達は風呂に仕掛けてある」

「うつつ お手製の隠しカメラの映像をテレビで見ている」

「うつつ／通信機」

「なら別のポイントだ」

――（前略）脱衣所――

「ルナクは風呂場の扉を開けた」

「ルナク」

「む…：…視線を感じる…：…」

「気のせいか」

――（前略）正邪の部屋――

「うつつ」

「どうだった?」

うつつは部屋に入った瞬間に聞いた

「正邪」

「もう少し広域を見れた方がよかったかと
ピンポイントで見ようとして

棚の下の奥の方は流石に…」

「うつつ」

「鏡の紅魔館ここに居るのは私達だけだから

顔を見る必要が無いと思って」

「正邪」

「まあな

お！セカンドポイントに来た…

あれ？画面が真っ暗に…」

「うつつ」

「あそこは最も見やすいポイントなのに…」

「針妙丸」

「ところで今は誰に変身してるの？」

2人が残念そうにしている中、針妙丸は質問した

「うつつ」

「貴女です」

「針妙丸」

「え!？」

針妙丸の顔が赤くなった

— (前略) 風呂場 —

「ルナク」

(何コレ? (☒—☒))

— (前略) 正邪の部屋 —

「うつつ」

「こうなれば最後のポイント!」

「正邪」

「湯船全てが見える上からカメラで!!」
テレビに映ったのは

金髪で頭に赤いリボンを緩く着けた女性だった

「正邪&うつつ」

「ルーミア（さん）!!」

「針妙丸」

「え!?!」

「正邪」

「なんであいつが」

「うつつ」

「落ち着け!!」

「変身してるだけかも」

テレビに映ったルーミアがこちらを睨みつけた

「正邪&針妙丸&うつつ」

（やばい…（・―・））

ルーミアの姿がモヤモヤした雲に変わった

「正邪」

「あれが本当の姿か？」

「???」

「残念… それは瞬間移動してるだけよ」

正邪達の後ろにモヤモヤしたものが発生し

封印を半分解いた大きいルーミアへと姿が変わってゆく

「正邪&針妙丸&うつつ」

「ごめんなさい!!」

ルーミアはニコニコしながら続ける

「ルーミア」

「なんでこんな事を？」

「正邪」

「ルナクの性別を知りたくて」

「ルーミア」

「私が来ることを聞いてなかったの？」

「うつつ」

「はい…」

「ルーミア」

「そりゃそうよね」

「だって《言ってないしそもそも来ていない》んだもの」

「針妙丸」

「!？」

ルーミアが大きいサイズの針妙丸に変わってゆく

「ルナク」

「言ったじゃん」

「どっちでも無いしどっちでもあるって」

笑顔のまま指をポキポキ鳴らす

「正邪」

「どっちでもあるってのは初耳!!」

「ルナク」

「覚悟は出来てる？覗き魔さん方？」

「正邪&針妙丸&うつつ」

「い……イヤー……!!!!」

突如、夜空が光だした

「ルナク」

「!？」

「うつつ」

「なんですか!？」

光は直ぐにきえ、また夜の闇が広がった

「ルナク」

「異変か？」

「正邪」

「な、なあ……なんか……体がだるいんだけど……」

正邪がどんよりオーラを発している

そしてなんかひとまわり縮んでる

「うつつ」

「風邪？」

「針妙丸」

「あれ？みんな大きくなった？」

針妙丸の声が小さく聞こえる

「ルナク」

「いや、正邪は若干縮んでる… っておい!!」

「針妙丸」

「？」

「正邪」

「チビが… 元々15センチのチビが5センチのどチビに!!」

「ルナク」

「細かいな!!」

「うつつ!! 妖力飴の持続タイプ全員分持ってこい!!」

「うつつ」

「了解しました!!」

うつつは飛ぶように部屋を出ていった

「ルナク」

「妖力不足か…」

けどなんで今？ なぜ俺はならない？」

「うつつ」

「持って来ました!!」

うつつは両手でひとつかみ分持ってきた

「ルナク」

「正邪！舐めろ！」

飴を2つ取り1つを正邪に投げ

もう1つを小さく割った

「ルナク」

「針妙丸、お前はこっち」

飴の欠片を針妙丸に舐めさせると

針妙丸はちよつとずつ大きくなってゆく

「ルナク」

「ふー… 危ない危ない…」

危うくノミみたいになるとこだった…

小人は妖力が足りんと縮む性質が有るからな
よく考えたら正邪は急ぎじゃ無かったな

〔正邪〕

「まあいいじゃんか

これで少しは楽になったぜ?… 不味いなこれ」

〔ルナク〕

「針妙丸はしばらく舐めっぱなしな」

〔針妙丸〕

「次は違う味がいいなー…」

針妙丸は少し顔を歪ませている

〔ルナク〕

「まさか…」

開発中のキュウリ味持ってきたのか? うつつよ

〔うつつ〕

「近くにあったから…」

そっぽ向いて小さな声で答えた

〔正邪〕

「どおりでまずいと思ったわ!

てかなんでそんな味を開発してんだよ!!」

〔ルナク〕

「河童に頼まれた夜更かし用栄養剤に良いかと思って
河童の好むキュウリ味を…」

因みに試作品は大好評、あとは味の調整」

〔正邪〕

「結果は聞いてねーよ!!」

第1話 闇夜の閃光―Phantasm Sid

e―

―博麗神社／寢室―

〔霊夢〕

「そろそろ寝るか…」

布団を押し入れから引っ張り出し敷く

〔霊夢〕

「冬は紅魔館とかお屋敷の方が暖かいけど

夏は神社の方が涼しいのよねー」

布団に入り、目を瞑ろうとした瞬間

空がしらみ始める

〔霊夢〕

「げ!?もう朝?」

早苗から借りたボサツトモンスターやり過ぎたか?」

襖を開け空を見ると光の玉が浮いている

〔霊夢〕

「キ〇ラ?…いや、アレはゲームの…でも幻想郷なら…」

光の玉が閃光を放ち、夜の闇がかき消される

〔霊夢〕

「光線は出さないのね… って目がー!!!」

目を抑え転がり回った

〔霊夢〕

「あー… バルスバルス…」

再び空を見上げるが既に光の玉は無くなっていた

〔霊夢〕

「異変かしら?… まあいいや」

再び布団に入り、そのまま寝た

―翌日―

「魔理沙」

「おーい！霊夢ー！朝だぞー！起きろー！」

朝から魔理沙が博麗神社に来て

寝室の襖を開けてゆく

「霊夢」

「ううん……あと5分……」

「魔理沙」

「まさか昨日の夜にボサモンやり過ぎたのか？」

魔理沙は上布団をひっぺがし、押し入れに押し込んだ

「霊夢」

「違うわよ……」

昨日の夜、空が光ったでしょ？

その後直ぐに寝たわよ……」

ムクっと起き上がり、下布団を押し入れにしまった

「霊夢」

「今何時？」

「魔理沙」

「8時」

そういえば確かに光ったな、異変か？」

霊夢はスタスタと台所に向かい朝食の準備をした

「霊夢」

「確か昨日の残りが」

夕ご飯の残りを取り出して食べ始める

「魔理沙」

「なあ霊夢」

「霊夢」

「なに？」（モグモグ）

「魔理沙」

「なんか気づかないか？」

「霊夢」

「なんかイタズラでもしたの？」（モグモグ）

「魔理沙」

「違う!!」

「なんか今日は霊力が満ちて来ないか?」

「食後のお茶を啜りながら体に起きている異変を探った」

「霊夢」

「…確かに」

「言われるまで気づかなかったが」

「何故か霊力が溢れ出る感触がする」

「魔理沙」

「どんどん溢れて爆発四散する異変だったりしてな!」

「霊夢」

「知らないわよ?」

「永琳やルナクなんか寝てる間に」

「変な葉を射ったかもしれないし」

「霊夢は茶碗を洗い、籠に干した」

「紫」

「逆に私がダルいのはどうしてかしら?」

「スキマが開き」

「紫が窓から身を乗り出すかのように顔を出した」

「魔理沙」

「それは…人妖の違い?」

「霊夢と魔理沙が居間に移動するのに」

「紫はスキマを平行移動させてついて行く」

「紫」

「半分そうで半分そうではない」

「霊夢」

「半分?」

「紫」

「藍に調べさせたのよ」

「妖獣や人間達、妖精や神は大体が」

「良い影響を受けていた」

対して妖怪や一部の妖精や神
付喪神達は悪い影響を受けていた
例外的に

藍には影響はないけど橙はあなた達と比べて
半分ほどいつもより元気だった

隠岐奈のやつはピンピンしてたし

慧音や霖之助等の半分妖怪の人間は

一切の影響を受けていない

あと普通の動物は無関係そうね」

「魔理沙」

「ごめん、簡単に言ってくれ

訳がわからん」

魔理沙が首を傾げた

「紫」

「妖怪は弱く

人間、神と妖精の大体とかは強く

中間はそのまま

普通の動物は無関係」

「魔理沙」

「お、おお・・・」

「霊夢」

「まるでライトサイド、ダークサイドで別れてる様ね」

「魔理沙」

「そういえば鏡の連中は？」

魔理沙が鏡に指を指す

「紫」

「連絡取れてない」

「霊夢」

「またアイツらの仕業？」

「霊夢は熱いお茶を啜った

「魔理沙」

「もう8月だぞ？」

よく熱いお茶飲めるよな…」

「紫」

「多分全員へナへナになつてると思うわよ？」

ルナクもライトサイド2人間 幽霊に対して吸血鬼、魔法使い、妖精(影)ダークサイド3の割合だし」

「魔理沙」

「あれ？妖精ってライトサイドじゃ…」

「霊夢」

「アレは影の妖精よ、どう考えてもダークサイド

まあとりあえず待つてれば元凶が出てくるでしょ」

「魔理沙」

「そんな人任せな…」

第2話 談話

―紅魔館／エントランス―

「大妖精」

「すみませーん！」

「咲夜」

「はい！」

いきなり目の前に咲夜が現れた

「大妖精」

「なんか元気いっぱいですね」

「咲夜」

「なんか朝から元気が満ち満ちて」

「チルノ」

「怪我の手当を頼む!!」

膝を擦りむいたチルノと

特に怪我をしていないルーミアに

運ばれてきたのは

レーザをもろに食らったリグルと

チルノの弾幕を大量に食らったミスティアだった

「咲夜」

「では医務室へ！」

6人は医務室へと向かった

「ルーミア」

「ごめん大ちゃん！」

みすちーを預かってて」

「大妖精」

「え!?!ちよ」

ルーミアは大妖精にミスティアを渡すと

廊下を逆方向に走って行った

―紅魔館／空き大部屋―

広い紅魔館にも空き部屋はある様で

そのうちの1つの部屋にルーミアは入っていった

「ルーミア」

「さてと、確かこの鏡だっけ？」

部屋の片隅にある鏡を起こし鏡面に手を当てる

すると魔法陣が浮き出て鏡全体が一瞬輝く

—「反転郷」紅魔館／居間—

置いてある鏡が輝き、ルーミアが出てきた

「ルナク」

「どしたー？」

「ルーミア」

「ちよつと医務室に来て」

ルーミアはそれだけ言うと鏡に触れて

幻想郷の紅魔館へと戻って行った

「ルナク」

「バカルテットアイツらか・・・」

うつつ！救急箱持って行くぞー」

「うつつ」

「了解です！

レベルは・・・

一応全部持っていますね」

—「幻想郷」紅魔館／医務室—

「ルーミア」

「おまたせー」

「大妖精」

「遅いよー・・・どこ行ってたの？」

「ルーミア」

「ちよつと花を摘みに・・・」

「チルノ」

「トイレか…」

「ルナク」

「そこは伏せてやれよ…」

鏡からルナクとうつつが出てきた

「咲夜」

「よかった… 援軍が来た…」

—少女達治療中—

「ルナク」

「援軍呼ばんでもできるじゃん…」

やったのは湿布貼ったり包帯巻いた程度だった

「咲夜」

「やったこと無かったから…」

「ルナク」

「怪我の度合いを見てからにしろよ…」

「ルーミア」

「まあいいじゃないの大したことなくて

あと私から」

「ルナク」

「なんか用か？」

「ルーミア」

「オデカドトコニラキホナ」

「チルノ」

「え？なんて？」

チルノが首を傾げた

「ルナク」

「… ああ… そういう…」

「イアクオユル」

「大妖精」

「はい？」

「ルーミア」

「エフオユクネトナフゼエアイロト」

「ルナク」

「ちよつと失礼

ルーミアを借りるね」

「咲夜」

「えふお… ゆ?… あ! いいですよ!」

2人は鏡の中へと入っていった

— 「反転郷」 紅魔館／医務室 —

「ルナク」

「暗号とは考えたね」

ルーミアは医務室の椅子に座った

「ルーミア」

「バレたら色々めんどくさいしね

と言うかよく1発で解読したわね…」

「ルナク」

「文をローマ字のアルファベットに変えて
後ろから読む

エフオユクネットナフゼアイロト

e h u o y k n e t n a h u z e a i r o t

つまり、とりあえず反転郷へ

って事だろ?」

「ルーミア」

「その通りよ

で、要件だけど」

ルーミアは真剣な眼差しをルナクへ送った

「ルーミア」

「あの光について」

第3話 元凶命名会

「ルーミア」

「あの光について」

ルーミアが真剣な眼差しをルナクへ向けた

「ルナク」

「ただの異変じゃ無いのか」

ルナクは医務室を後にする

それにルーミアはついて行つた

「ルーミア」

「妖怪は弱化

人間、妖精は強化

私は妖怪のほずだから弱化するのが普通だけど

影響を受けていない

そして貴方も影響を受けていない」

「ルナク」

「俺は半人半妖だからじゃ無いのか？」

「ルーミア」

「私はやっぱりヤツが来たんじゃないかって思うの」

「ルナク」

「ヤツって？」

ルナクは歩みを止めた

「ルーミア」

「決まってるしわかってるでしょ？」

「ルナク」

「全ての光である者か… あの酔っぱらいが…」

「ルーミア」

「私は光の影響をしゃだんできるし

あんたは平均的な立ち位置だから効かない」

「ルナク」

「なるほど、確かにそんな気がして来た」

ルナク達は居間へと入った

―「反転郷」紅魔館／居間―

「正邪&針妙丸」

「おかえりー」

「ルーミア」

「よいしよと」

ルーミアは頭のリボンを解いた
するとルーミアが大きくなり、髪が黒く長く
背中には黒い羽が生えた

「ルーミア」

「応急処置」

ルーミアは闇のオーラを発する
すると針妙丸が若干大きくなってゆく

「正邪」

「おお、妖力がみなぎってくる…」

「ルーミア」

「こいつらにバレてもいいの?」

「ルナク」

「いいよー」

2人は椅子に腰掛けた

「正邪」

「ところで犯人分かったのか?」

「ルーミア」

「ええ、あらかた検討が着いたわ」

「正邪」

「もしかして永琳がまた?」

「針妙丸」

「それとも空?」

「ルナク」

「いや、俺らの身内」

「正邪」

「闇と影と来たら、次にくるのは」

「針妙丸」

「光!？」

「ルーミア」

「そうよ、全ての光である者

ねえ、呼び名考えない?」

ルーミアはほおずえをついた

「正邪」

「光と言ったらキーラ」

「ルーミア」

「いやいや、それは光の化身

あとあいつは男」

「針妙丸」

「じゃあ月ラット」

「ルナク」

「死神手帳使われるぞ」

「正邪」

「ルーミア||リバーズ」

「ルーミア」

「じゃあ私はどうなるのよ!」

「正邪」

「... ルーミア||ノーマル?」

「ルーミア」

「いやいやダサイ」

「ルナク」

「あー... 思いつかん... いっその事Daysから取って
デイズで...」

「ルーミア」

「却下」

「うつつ」

「只今戻りました」

「ルナク」

「救世主が来た！」

いきなりの事でうつつが固まる

「うつつ」

「え？」

—説明中—

「うつつ」

「それなら… ルーミア語源の逆

つまり「lumia」の逆の意味を…

そもそも逆がないわこれ… ブツブツ…」

うつつがもごもご言い出した

「正邪」

「lumia」の逆で「aimul」って事で

アームルはどうだ？」

「ルナク」

「それよりもパンドラがいいんじゃない？」

「正邪」

「なるほど、光を振りまく相手に対して

あえて絶望の箱を開けてしまった者の名を付けるか…」

「針妙丸」

「その人って男の人？ 女の人？ それともどっちでもない？」

「ルーミア」

「男よ」

「針妙丸」

「じゃあヒカルは？」

「ルナク」

「ブンブン言いたくなるから辞めておこう

じゃあHazyは？」

「うつつ」

「霞んでいる…ですか…朧と同じ意味ですね」

「ルナク」

「あ…（…ω…）…もう針妙丸の意見半採用で
光でいいや」

全員結局思いつかなかったなので

光と呼ぶことになった

第4話 注文

―「反転郷」紅魔館／居間―

「ルーミア」

「とりあえず、お願いしたいものが有るんだけど」

「ルナク」

「ん？」

「ルーミア」

「いざと言う時いつもつるんでる《あの子達》

にバレずにこの姿になれるような物を作って欲しいの

ちなみにバレずってのはこの姿が正体

って事がバレなきやいって事よ」

「ルナク」

「じゃあチルノの渡したことのある精霊時計の

中身なしでいいか？」

「ルーミア」

「私精霊なんかじゃ無いから別ので」

「ルナク」

「じゃあ石型かスイッチ型かどっちがいい？」

「ルーミア」

「スイッチ

手のひらサイズで」

「ルナク」

「了解

じゃあ完成は明日ね

うつつー！よろしくー」

「うつつ」

「ではいつてきます」

うつつは窓から飛んでどっかへ行ってしまった

「ルーミア」

「行儀悪!!」

ていうかどこ行ったの!？」

「ルナク」

「この方が早いでしょう？」

行先は^{反転郷}この地霊殿」

「ルーミア」

「…」

じゃあ3日後」

ルーミアはリボンをキツく締めて小さい姿に戻ると鏡を潜って帰って行った

—「反転郷」地霊殿／第2工作室—

「うつつ」

「また「超高速豆腐の角発射機」の製作が遅れる…」

まあ趣味だからいいんだけど…」

なんで私に作らせるのかな…」

女心が分かる方が良いから？」

ブツブツ言いながら材料を集めた

「うつつ」

「えっと…」

魔力石と魔法陣を入れられる名前が分からない石は…」

在庫切らしてるわ…」

作りながら設計するか…」

—「幻想郷」紅魔館／医務室—

「ルーミア」

「ただいま—」

「ミスティア」

「おかえり—」

ミスティアとリグルは復活していた

「リグル」

「ピチュった方が楽だったかもね… いたた…」

「大妖精」

「美鈴さんは遊びを続行出来るように
手加減してくれたんじゃないかな？
結局いつその事殺してくれ状態だけど」

「咲夜」

「大妖精：．． ちょっと詳しいことを」

2人は廊下へ出た

「ルーミア」

「リグル：．． 命を軽く見すぎ．．．」

「チルノ」

「で、ルーミアは何しに行っただんだ？」

ルーミアは一瞬考えた

「ルーミア」

「チルノが精霊になった見たいに

強くなれる最終兵器をお願いしたの」

「チルノ」

「そーなのかー」

まあ最強であるアタイのせいれいモード
には叶わないだろうけどね」

「ルーミア」

「記憶なくせによく言うわ」

「チルノ」

「なんだとー!!」

つららを生成しルーミアに構える

「ルーミア」

「チルノよ

武器なんて捨ててかかってこいよ」

「チルノ」

「野郎ぶっ殺してやる!!」

喧嘩が始まったと同時に咲夜達が帰ってきた
「大妖精」

「お待ちせー…って

また始まったよ…」

みすちー、リグルお願い」

「ミステイア」

「ハイハイ…」

ミステイアは能力でチルノとルーミアを鳥目にした
すかさず大妖精が

部屋の電気を消し、カーテンを閉める

「チルノ」

「どこいったー!!」

闇出して逃げんな!!」

「ルーミア」

「そつちこそ逃げてんじやないわよ!!」

そしてリグルが右手を蛍のように弱く発光さ

残りの3人の明かりを確保する

「ミステイア」

「にしてもなんでお尻じゃ無くて手が光るのかね」

「リグル」

「私は蛍の妖怪だから何処でも光らせることが出来るよ

面積は狭いけど…」

あと蛍が光らせてるのは腹だからね?」

第5話 異変の始まり

—幻想郷／???—

「??」

「楽しませてくれよう…闇」

光を発する白髪を持つ男が

ヒョウタンを片手にニヤリと笑う

「??」

「この星の太陽よ、

この忘れられたモノの樂園郷から闇を消し去れ」

男が手を頭上に掲げると眩い光線が発射され

太陽の動きが止まった

—博麗神社／居間—

「魔理沙」

「ん？今外が光らなかつたか？」

「霊夢」

「気のせいでしょう」

お煎餅をバリボリかじりながら答えた

「紫」

「でもなんか違和感が…」

「魔理沙」

「またなんか起きたんじゃないか？」

—紅魔館／医務室—

「咲夜」

「プリン食べる？」

「大妖精」

「頂きます！」

ちようどおやつ時という事でプリンが用意された

「チルノ」

「うまい!!」

「ルーミア」

「咲夜のプリンは格別ね!」

「ミステイア」

「研究して夜雀庵のメニューに加えたい…」

「リグル」

「居酒屋の屋台にプリンって」

外が「瞬光った

「咲夜」

「雷かしら…音が無いから違うか

昨夜起きた閃光と同じやつかしら?」

「チルノ」

「うおおおおお!!」

「大ちゃん!!なんか力が!!」

「大妖精」

「なんだろう…また力が増した気がする」

「ミステイア」

「私もリグルも何も起きてないよ」

「咲夜」

「私も何も…」

「ミステイア」

「じゃあ今度は妖精だけ?」

—「反転郷」紅魔館／居間—

「ルナク」

「あれ?今外が…」

「正邪」

「気のせいじゃない?」

「針妙丸」

「気のせい気のせい」

「ルナク」

「ちよつとトイレ」

「正邪」

「いってらー」

—「幻想郷」博麗神社／居間—

「藍」

「紫様」

スキマの中から藍の声がした

「紫」

「どうしたの？」

「藍」

「先程の閃光から一部を除いた妖精達が
活性化した様です」

「魔理沙」

「ほら、やっぱり異変だよ」

「紫」

「ありがとう藍」

引き続き監視をお願い」

「藍」

「了解しました」

「霊夢」

「妖精位なら大した事ないわよ」

湯のみのお茶を啜った

「魔理沙」

「後で酷い目にあっても知らないぜ？」

「霊夢」

「そういえば」

ちよつと気になる事が」

「魔理沙」

「？」

「霊夢」

「ルナクの異変…の前の正邪の異変に出る時
やな予感がするって言ったじゃない？」

「魔理沙」

「確か残機をたくさん持ってったは良いけど
あんまり使わなかったけどな」

「霊夢」

「そのやな予感があれから消えずに
どんどん大きくなってるのよね」

「紫」

「そんなに早く危機を感じるなんて…」

「霊夢あんた今回死ぬわね」

「霊夢」

「冗談じゃないわよ」

「私が死んだら誰が博麗大结界を守るのよ」

「魔理沙」

「早苗」

「霊夢」

「守矢の巫女じゃない」

「紫はお茶を飲み干すと」

「紫」

「そろそろお暇するわ」

「魔理沙」

「もう帰るのか？まだ昼だぜ？」

「紫」

「え？でも時計は…」

「時計は17時を指していた」

「魔理沙」

「なあ霊夢」

「霊夢」

「…」

「紫」

「永夜異変ならぬ永昼異変えいちゆうね」

「霊夢」

「…」

一瞬部屋が静まり返る

「霊夢」

「今日は白夜ね」

「魔理沙」

「ここは北極、南極とやらではないぜ」
また静まり返る

「霊夢」

「あの時計電池が切れt」

「紫」

「秒針動いてるわよ？」

シーン…

「霊夢」

「あ！

帰るの？

気をつけてねー」

「魔理沙」

「行くぞ」

「霊夢」

「わかったわよ!!」

晩御飯食べたらね!!」

霊夢は逃げ出した

「紫」

「強制輸送ー」

しかし足元にスキマが開き
その中に落ちていった

「魔理沙」

「屋台でも行くか」

「あつこもつち」
[紫]

第6話 手がかり

—人間の里—

—翌日—

〔霊夢〕

「なんの手がかりも無いってどういう事よ!!」

〔魔理沙〕

「今回の元凶は潜伏能力高いな…」

〔紫〕

「せめて光の発生源が分かれば…」

あれから1晩中探したが

何の手がかりもつかめずにいた

〔霊夢〕

「そういえば隠岐奈はなんて言ってた?」

〔紫〕

「分かんないってハイテンションで言ってた

秘神はライトサイドだから」

〔魔理沙〕

「なあ、団子屋で一服するか?」

ちようど団子屋の前を通りかかっていた

〔霊夢〕

「そうね」

—人間の里／団子屋玉兎—

〔鈴瑚〕

「いらっしやいませー!

久々だねー、君たち」

〔霊夢〕

「玉兎はどっち?」

〔紫〕

「多分ライトサイド」

「鈴瑚」

「ご注文は？」

「魔理沙」

「うさぎで」

「鈴瑚」

「え!？」

「魔理沙」

「もう一度言う」

「ご注文はうさぎ」

「霊夢」

「みたらし団子3本!!」

「鈴瑚」

「ま、まいど!!」

鈴瑚は厨房へと消えていった

「紫」

「やめなさい」

「魔理沙」

「ハイハイ…」

流石は人間の里

ライトサイドだらけだ」

「紫」

「活気が凄いわね…」

夜が来てないのを知ってるのに」

「鈴瑚」

「お待ち!」

みたらし団子が運ばれてきた

「霊夢」

「どーも」

それぞれみたらし団子を食べ始めた

「魔理沙」

「そういえば鏡の連中は？」

〔紫〕

「まだ接触できてない」

〔靈夢〕

「正邪がバイトしてればなー…」

すると、何処からか聞き覚えのある声が聞こえた

〔??〕

「ごちそうさまー」

〔鈴瑚〕

「まいど!!」

みたらし団子10本

こし餡団子10本

3色団子10本

玉兎特性団子10本

合計で5000円ね」

金髪に赤いリボンを付けた幼い少女が
支払いをしていた

〔魔理沙〕

「40本!? 食いすぎー」

〔靈夢〕

「ああ、ルーミアか…」

((; ㇿ)) ルーミア!?

〔魔理沙〕

「行くぞー! 靈夢!!」

〔靈夢〕

「了解!!」

紫は会計お願い!!」

〔紫〕

「え!?! ちよー!」

— 博麗神社周辺の森ルーミアの家 —

〔靈夢〕

「これってルーミアの家!？」

しばらくルーミアを尾行していたら

森の中にひっそりと建つ

さほど大きくないログハウスに着いた

「魔理沙」

「でもあいつが入って行ったぜ」

屋根に着いた窓からルーミアが見えた

「魔理沙」

「ちよつと見てくる」

バレないように慎重にのぞき込んだ

「ルーミア」

「さてと、そろそろ完成したかな？」

クローゼットを開けると

鏡の中へと通じている鏡が出てきた

そしてそのまま

ウォークインクローゼットの中へ入って行くかの様に

鏡の中へと入って行った

「魔理沙」

「反転郷の入口発見」

「霊夢」

「じゃあ行きましょう」

「紫」

「いたいた、1人100円ね」

「霊夢」

「帰ったら返すわ」

――ルーミアの家／室内――

内装はシンプルで

業務用冷蔵庫以上の大きさの冷蔵庫が数台ある

冷蔵庫室が1階の半分を締めていた事以外は普通だった

「魔理沙」

「なんだこの冷蔵庫

メーカーは…

NITORI & ミラークロー共同制作

…カツパにとりか」

中を開けてみると、野菜から肉まで色んな物が
ぎっしり入っていた

「魔理沙」

「1人なら半年は引きこもれそう…

かじりかけのワンホールケーキまであるぞ

なんで切らずにかぶりつくいてるかは置いといて

こつちにはロープみたいなソーセージ

あつちには… 見なかったことにしよう」

魔理沙が見たのは人喰い妖怪ならではのものだった

「霊夢」

「そんなことより行くわよ!」

階段で2階に登り、クローゼットを開ける

「魔理沙」

「いや、入口閉じとけよ

通じっぱなしじゃなくて」

「霊夢」

「人喰い妖怪の巣になんて誰も来ないでしょ」

「魔理沙」

「まあな

自殺行為としか言い様がないぜ」

3人は開けっ放しの鏡の中へ入って行った

第7話 注作品

―「反転郷」紅魔館／居間―

「ルーミア」

「出来た？」

「ルナク」

「今から仕上げ」

うつつがたくさんの試作を持ってきた

「うつつ」

「では始めましょう」

まず形ですが

魔力結晶をリロードして使うハンドガンタイプ

某青タヌキアニメに出てきた独裁スイッチタイプ

某野菜人アニメに出てくるカプセルタイプ

あとは興味本位で作った

腕時計タイプ

某奇妙な冒険の石製仮面タイプ

某ライダーの記憶媒体タイプ

どれが良いですか？」

「ルーミア」

「謎のレパートリーの広さ…」

オススメは？」

「うつつ」

「オススメは

ハンドガンタイプですね

実際の物の外装を使用しましたし

何よりリロード動作をする際に

引っかかりを無くしたり

薬莖の様に魔力結晶ケースを排出するギミック

を搭載したり

因みに緊急時はリロード無しで行けますし

魔力石を必要としない使用者供給モードもあります
やっぱりロマン溢れますね」

「ルナク」

「ごめんな、武器マニアだから」

「ルーミア」

「え・・・ええ」

「うつつ」

「ちなみに

ハンドガンタイプにも

拳銃型トリボルバー型が有りますし他にも

ショットガンタイプ

ライフルタイプ

スナイパーライフルタイプ

ロケットランチャータイプ

グレネードランチャータイプ

ついでに手榴弾タイプも

ちなみに作ってたら楽しすぎて

いつの間にか18時間作業してました」

「ルナク」

「ここまで来ると変態を通り越して末期だな

武器オタク末期」

「正邪」

「スナイパーライフルなんて持ち運びに不便すぎる

しかもバカ重い」

スナイパーライフルタイプを持って

構えてみるも

腕がプルプル震えている

「ルーミア」

「じゃあカプセルタイプで」

「うつつ」

「・・・はい」

一気にテンションが下がったうつつは
機構の取り付けを開始した

「ルナク」

「じゃあ俺は拳銃型とスナイパーライフル型で
もったいないから正邪達にもあげるぞ」

「正邪」

「模型見たいなもんだな」

「針妙丸」

「もつと小さければ…」

「うつつ」

「後で小さいのも作ってあげますよ?…
形だけ選んでくれれば…」

出来ました」

手のひらサイズのカプセルをルーミアに渡した

「うつつ」

「引っ込んでるスイッチを捻ると

飛び出て起動します

後は押すだけです

カチツて言うまで押して下さいね

そうしないと起動前に戻りません

と言うよりそこまでやらないと演出が出ません…」

ルーミアはカプセルを起動して

スイッチを押した

するとカプセルから闇が吹き出し

ルーミアを包み込み球形になった所で

膨らみ、弾けた

「ルーミア」

「…なんも変わらないわよ?」

「ルナク」

「そりゃそうさ」

バレないための《演出》だもの

その内に封印を解除するって事」

ルナクが拳銃型の物を改造し終わると

マガジンをセットしコメカミに当てる

「ルナク」

「つまりこういう事」

引き金を引くと、銃声と共にルナクが倒れる

「ルーミア」

「!？」

そのまま床に当たると思いきや

ルナク自身の影に吸い込まれた

影を中心に赤黒い魔法陣が現れ

ゆらりと起き上がる

表面の黒い何かの水が流れる様にサーッと

落ち、羽を生やしたルナクがあらわれる

「ルナク」

「あたかも変身した様に演技するのが重要」

リボンを結び直し

椅子に座った

「ルーミア」

「演技ね……」

「そういえば霊夢達が」

「ドアが開き霊夢達が入ってきた」

「ルーミア」

「……来たわよ」

第8話 隠し事

―「反転郷」紅魔館／居間―

「ルーミア」

「そういえば霊夢達が」

「ドアが開き霊夢達が入ってきた

「ルーミア」

「…来たわよ」

「紫」

「状況を報告してもらおうかしら？」

「ルナク」

「してなかったっけ？」

「まあいいや

「幻想郷と同じ状態だよ

「俺とうつつ、あとルーミアは特に無いし

「正邪と針妙丸は妖力の飴を

「定期的に舐めさせてるから

「実質無被害」

「霊夢」

「ルーミアとルナクが無被害って事は

「あんたらに關係してるわね？」

「少し間を開けてから答えた

「ルーミア」

「そうよ」

「ルナク」

「今回の元凶は俺らの身内によるもの」

「ルーミア」

「その事は秘密にしといて」

「ルナク」

「さもなくば内乱が勃発するかも知れないし

「それどころか知ってしまった人を

抹消しなくちゃいけない」

2人が異様な殺気を放ちながら忠告した

「ルナク」

「ちなみに場所だけど..」

簡潔に言うとは分らない」

「ルーミア」

「私も封印状態だし」

ルナクも違う世界に居るからね」

「霊夢」

「じゃあどっちか連れてけば分かるんでしょ？

案内をお願い」

途端に2人の動きが止まった

「ルーミア」

「私はバカ達と遊ぶ約束があるし」

ちらつとルナクを見ると

絨毯の毛の影に潜り込み、行方を眩ませた

「魔理沙」

「あ、逃げた」

「ルナク」

「冷蔵庫もう一個あげるからお願い！」

「魔理沙」

「ミラークローって鏡の鴉..」

うつつの事か..って作るのうつつじゃんか!!」

「ルーミア」

「しように無いじゃん！約束したんだもん!!」

「霊夢」

「帰るか」

「紫」

「そうしよう」

「魔理沙」

「じゃあなー」

3人はゆつくりとドアを閉めた

―数分後―

「ルナク」

「帰ったか？」

「ルーミア」

「そのようね」

2人は椅子に腰掛けた

「ルナク」

「お茶を頼む」

「うつつ」

「了解しました」

座って数秒も経たないうちに

ルナクは立ち上がった

「ルナク」

「トイレ行ってくる」

そう言うとトイレへと向かった

「正邪」

「最近よくトイレに行くな」

「ルーミア」

「…」

―紅魔館／トイレ―

「ルナク」

「フウ…」

ルナクが力を抜くと

14個もの結晶が現れた

「ルナク」

「炎水雷樹氷毒虫地風岩然闇光影

どれもこれも自然系…」

つまり、大精霊の復活が近づいているって事か…」
「??」

「どうかした?」

慌てて振り返るとルーミアだった

「ルーミア」

「最近妖精が活性化してる見ただけど

それと関係してる?」

「ルナク」

「… ああ、確かに

俺の中の妖精の血が暴走しかけている

いや、暴走ではなく抜け出そうとしてる」

ルナクの背中には

カラスアゲハの様な黒い羽が生えていた

「ルーミア」

「霊夢達は影の妖精が闇側って思ってる見ただけど

実際はその中点にいるって事は知らないようね」

「ルナク」

「精霊共が力を失う時

それを興味本位で集めて出来たのがこの

クリスタルを生成し操る程度の能力

おかげで俺は全体的に光側に傾いてるけどね

闇2、光2・5、中立1

の割合かな?」

「ルーミア」

「なんでこんなになややくしくなっちゃったんだろうね」

「ルナク」

「話すと長くなるな…」

ルナクは何か懐かしいものを見る様な顔を一瞬見せた

「ルナク」

「と言うより知らなかったのか?」

こうなった理由

まあいい、それより大精霊が復活されるのが困るな……」

「ルーミア」

「大量に持ってかれるの？」

「ルナク」

「そう、無鬨幻魔霊神鋼の7つしか残らない」

「ルーミア」

「大妖精を保護した方が良いかしら？」

「ルナク」

「頼む」

ルナクは結晶を消し、羽を引っ込めた

第9話 強化カプセル

―「幻想郷」永遠亭―

「輝夜」

スペル

「永夜返し」

輝夜の能力で時間を加速し夜にしようと試みる
しかし、何も起こらない

「輝夜」

「この異変

ただの異変に終わりそうも無いわね…。」

「妹紅」

「やっぱりアイツのせいかな?」

「輝夜」

「かも知れないわね」

「妹紅」

「じゃあ今回の対決は

アイツを先に仕留めた方が勝ち

でいいかな?」

「輝夜」

「いいわよ?」

「どうせ私が勝つんだし」

「妹紅」

「勝手に言っとけ」

―霧の湖―

「チルノ」

「何する?」

「ルーミア」

「そういえばルナクに頼んだ

最終兵器が遂に完成した!!」

ルーミアはカプセルを見せる

「チルノ」

「しよぼ」

「ルーミア」

「1回黙ってて」

「まず私が封印されている事は知ってるよね？」

「リグル」

「確か頭のリボンが御札になってるって」

「ルーミア」

「そう」

「ミステイア」

「でも触れないんじゃない？」

「ルーミア」

「そこもルナクに頼んだ」

「ミステイア」

「なんでも出来るんだね…」

「ルーミアは数歩下がると」

「ルーミア」

「まず封印を解く！」

「リボンを解くと同時に」

「体が大きくならないように」

「爆発するように溢れ出る力を」

「全身全霊で抑え込む」

「大妖精」

「な、なんか闇のオーラが…」

「いくら押さえ込んだとしても」

「一部が漏れてしまっている」

「ルーミア」

「どうだチルノ！」

「この状態でもお前の数十倍強いぞ!!」

「チルノ」

「アタイの方がまだまだ強いな！」

ルーミアはカプセルのボタンを捻った

「ルーミア」

「では、最終兵器

スイッチオン!!」

カプセルから闇が溢れ出し

ルーミアを包み込み闇のボールができる

そしてボールの中で押さえ込んだ力を解放する

すると、急激に力が満ち

軽い衝撃波を周りに放ってしまふ

「ルーミア」

「ぐふっ」

(しまった…)

「チルノ」

「うわ！」

大妖精達が身構えている中

仁王立ちしていたチルノが数メートル吹き飛んだ

そしてボールが弾け

黒い歪な翼を生やした

大きなルーミアが出てくる

「ルーミア」

「急に解放し過ぎたな…」

「チルノ」

「いたた…」

「一体何をするんだ!…?」

チルノの声がだんだん小さくなった

「チルノ」

「アレ? どっかで…」

「大ちゃん?」

「大妖精」

「テスト成功！」

「チルノ」

「いやでももつと禍々しくなかった？」

「大妖精」

「いや・・・もつと闇を纏ってたと思うけど・・・うーん・・・」

2人はまだ記憶を探っている

「ルーミア」

「ルナクに報告しよう」

第10話 潜伏行動

—博麗神社、妖怪の山間上空—

「??」

「今、闇の気配が…」

紅の館の傍か…

急ぎの用事でもないからまあいいか」

—紅魔館／門の前—

「ルーミア」

「アレ？」

「あんた何でここに？」

ルナクが

美鈴の姿をして並んで立っていた

「美鈴」

「むにゃ…」

!?

「わわ、私がもう1人!」

「ルナク」

「…」

「ルーミア」

「居眠り…」

「そういえば

「上手くいったわよ」

「ルナク」

「ならオツケー」

「ついでに

「こちらからも言いたいことがある」

「ルーミア」

「？」

「ルナク」

「奴に位置がバレてるぞ」

「ルーミア」

「でしようね」

「ルナク」

「俺は封印したままだからバレて無いと思うけど…」

スperl

「絶縁結界」

慌てて結界でルーミアとルナク

範囲内にいた美鈴の3人を包んだ

「ルーミア」

「どうしたの？」

いきなり」

「美鈴」

「シャボン玉見たい…」

シャボン玉の様な結界の上を

オレンジ色の様な金髪の男が通って行った

「ルーミア」

「絶縁結界

外と中とのあらゆる干渉を絶縁する結界ね」

「ルナク」

「危ない危ない

お前らが接触したら色々面倒だしな」

「美鈴」

「あの一…」

「ルーミア&ルナク」

「…」

（居るの忘れてたー）

— 紅魔館／屋根 —

「光」

「どこに行ったんだ？」

瓢箪の中の液体を一口飲むと
博麗神社へと飛び立った

— 紅魔館／門の前 —

「霊夢」

「アレ？」

美鈴が居ない」

いつも居るはずの美鈴が門の前に居ない

「魔理沙」

「昼寝だろうな」

「紫」

「次は永遠亭でも行きましようか」

3人は永遠亭へと飛んで行った

— 紅魔館／門の前の絶縁結界内 — (同時刻)

「ルナク」

「OK？」

「美鈴」

「わ… わかりました」

顔を引くつかせて答えた

「ルーミア」

「無いわー…」

言ったら紅魔館消滅って脅しは流石に無いわー」

美鈴口止めした後、ルナクは結界を解いた

そして紅魔館の城壁の影に溶け込み

どこかへ行ってしまった

「チルノ」

「あ!! いたいた!!」

チルノ達がルーミアに向かって走ってきた

「チルノ」

「なんでここに居るんだよー!」

「ルーミア」

「ルナクに最終兵器のテスト結果報告しに
で、どこで私に似た人を見たの？」

「チルノ」

「わかんない」

「大妖精」

「結局思い出せなくて」

「ルーミア」

「いつかまた会おうでしょ」

妖精に寿命は無いんだから」

「チルノ」

「まあね」

アタイったらサイキョーだから!!」

チルノはドヤ顔をキメた

—紅魔館／裏—

「ルナク」

「さて、戻るとするか」

「??」

「待てい!!」

突如飛んで来た燃え盛るライダーキックを躲し
距離をとる

「??」

「あらあらあら?」

不意打ちも当てることが出来ないのかしら?」

ライダーキックの着地点には妹紅

ヤジを飛ばしていたのは輝夜だった

「妹紅」

「ケ!」

「輝夜」

「次は私ね」

輝夜は構えた

「ルナク」

「まあ待てや

今回は俺を倒した方が勝ち
つて事か？」

2人が頷いた

「ルナク」

「スペルカードルールは？」

「妹紅」

「お前も不死身なんだろう？
なら無効で」

「ルナク」

「つまり何でも有りか…」

「輝夜」

「そうなるわね」

「ルナク」

「ほう…」

キラリと目を輝かせた

第11話 紅魔館裏の戦い

—紅魔館／裏—

「ルナク」

「じゃあ後攻で」

「輝夜」

「じゃあ行くわよ?」

輝夜は蓬萊の玉の杖を取り出し

避けさせる気のない超高速超高密度弾幕を打ち出す

飛んでくる弾を腕を交差させて耐えるルナクの後ろから

妹紅が不死鳥型の弾幕を浴びせてくる

「妹紅」

「何時まで耐えるか見ものだな」

まあ時間制限は無いから永遠に続くがな」

「ルナク」

「俺を蜂の巣にする気か?」

「まいい、反撃と行くか…所で、」

ルナクは腕の構えを解く

「ルナク」

「俺はなんでもありの全力を出して良いんだな?」

「輝夜」

「良いわよ?」

「妹紅」

「構わないぞこっちだってその気だ」

「ルナク」

「OK」

スperl

「式神召喚」

展開した魔法陣の中から一匹のカラスが飛び出す

「ルナク」

「後はヨロシクー」

影に溶け込んだ

「輝夜&妹紅」

「…え？」

「カラス」

「カー」

しんと静まり返った

「輝夜」

「舐められてる？」

「妹紅」

「ぎ… さあ？」

気はひけるけど… やるしか…」

ちよつと赤みがかったカラスは

そこら辺の地面をつついて

そこに妹紅が一発だけ弾を打ち込む

すると、カラスは掠るように弾を避け石を掴み

妹紅の額に投げつけた

「妹紅」

「痛！」

更に妹紅にあたり落ちてゆく石を掴み

したから顎に向かって投げる

「妹紅」

「ちよ！」

上を向く事で躲すが

今度はカラス本体が溝落ちへと突っ込んできた

「妹紅」

「ぐふう」

「輝夜」

「アハハハハ」

いい気味ね」

笑っている隙に玉の枝をカラスにひつたくられた

「妹紅」

「人を笑うからバチが当たったんだ

カラスは綺麗なものが好きらしいからな」

「輝夜」

「ちよっと！返しなさいよ!!」○(´ω´*)○

カラスは上空から玉の枝で攻撃してくる

「輝夜」

「所詮はカラスね

密度が薄いわ」

「妹紅」

「さつきはやられたが次は容赦しねえ!」

妹紅はカラスに向かって大量の火炎弾を放った

火炎弾はカラスにあたると爆発し、火球を生み出した

「妹紅」

「焼き鳥ならぬ焼き鳥いつちよ上がり!」

妹紅が得意げに言う

「??」

「残念、カラスはカラスでも

地獄鴉の焼き鳥はこんな低温じゃあ焼けないわよ?」

丸焼きになった筈のカラスの姿が

人型へと変わってゆく

「妹紅」

「お前は!」

「うつつ」

「お久しぶりです妹紅さん

父は鴉、母は地獄鴉の

ハイブリッド鴉こと、夜羽うつつです」

「輝夜」

「貴女だったのね」

自己紹介していると

うつつの下の影からルナクが顔だけ出した

「ルナク」

「玉の枝、お返ししなさい」

「うつつ」

「えー…：せつかく分解して調べようと思ったのに」

「輝夜」

「え？」

ブツブツ言いながら地上におり

輝夜へと返した

「妹紅」

「で、どうするんだ？」

「輝夜」

「所で気になるんだけど

あんたはなんでそんなに色んな種族へと

変わるのかしら？」

ルナクは最初は真剣な顔で答えた

「ルナク」

「それは妹紅が生まれるもつと前の話だ…：

いや、世界が生まれて間もない時からか？

でも…：いや…：あー…：

まあいいや」

ラストワードスペル

虚空「虚数魔砲」

マスパ大の透明なレーザーが放たれる

それを見た2人は絶対に当たってはいけないと悟った

「妹紅」

「レーザー越しの風景の色が反転してるとか

絶対にヤバイ!!」

そう言うと2人はレーザーの進行方向から横にズレた

「輝夜」

「試しに当たって見なさいよ(´・ω・´)」

「妹紅」

「お前が当たれ!!Σ＼(。D。#)
くそ!!」

スペル

蓬萊「凱風快晴　―フジヤマヴォルケイノ―」

大弾が発射され

それがレーザーに当たり爆発を起こす

「ルナク」

「2段目!」

スペル

虚移「虚空断裂」

レーザーの前の空間が割れ、その中へと入ってゆく

その瞬間、2人の傍の空間が割れ

レーザーが飛び出してきた

「輝夜&妹紅」

「うわ!」

揃って驚きの声をあげたあと直ぐに

急降下で躲す

「ルナク」

「3段目!」

スペルカード

陰乱「影の反乱」

それぞれの影が起き上がり

急降下してくる2人に向かつて

急上昇して攻撃を仕掛ける

交わすことが出来ない判断した2人は

「輝夜」

スペル

難題「火鼠の皮衣　―焦れぬ心―」

「妹紅」

スペル

滅罪「正直者の死」

スペルを使い反撃を試みる
しかし

「影輝夜」

スペル

難題「火鼠の皮衣 — 焦れぬ心—」

「影妹紅」

スペル

滅罪「正直者の死」

全く同じ技で相殺される

「ルナク」

「5段目!!」

スペル

神降ろし「秋穰子、八咫鳥」

ルナクは幻想郷に居る2柱の神を自分に降ろした

—「地底」地霊殿／灼熱地獄跡地—

—同時刻—

「燐」

「でね、その死体がホントに状態良くてさ」

「空」

「へー…アレ？」

お空の身体が少し縮み、胸の目の様なものが消えた

—「幻想郷」妖怪の山／秋姉妹の社—

「静葉」

「もうすぐ夏野菜の季節だねー」

「穰子」

「豊穰神の出番は秋だけではない事を」

今度こそ知らしめてやる！」

「静葉」

「どうやって?」

「穰子」

「そりゃ決まってるでしょ

夏野菜を豊s...」

穰子が消えた

「静葉」

「アレ?」

神降ろし?

なんで穰子が?」

—紅魔館／裏—

ルナクに鴉の様な翼と胸に目のようなものが現れ
服に赤みがかった

「ルナク」

「準備完了!!」

最後6段目!!」

インポッシブルスperl

核実「シャインフルーツ」

小さな太陽を地面に打ち込むと

大きな木が生え

その木には15cm大のミカン型の輝く実がなっている

「ルナク」

「必殺ゲツシゲツシ」

ルナクは木の根本をゲツシゲツシと蹴り始めた

「輝夜」

「一体何がしたい...の...」

呆れていた輝夜の口が止まった

「妹紅」

「おいおいどうし…!」

遠くで輝く実が着地した瞬間に大爆発を起こした

「輝夜&妹紅」

「え」

頭上から大量の実が降ってきた

「輝夜&妹紅」

「ギャー……!!」

2人の叫び声は

絶え間ない爆発音の中に散っていった

第12話 手がかりその2

—永遠亭—

「てる」

「エイサ！」

「鈴仙」

「ホイサ！」

「モブイナバA」

「エイサ！」

「早苗」

「ほおいさあー…」

永遠亭に入ると2つの大きな炭を

担架に入れて運んでいるてゐる達が通り過ぎた

「霊夢」

「なにあれ」

「魔理沙」

「バーベキューでもやるんじゃないか？」

「紫」

「にしては大きくないかしら？」

てゐる達が来た方向から永琳がスタスタとやって来た

「永琳」

「あら、どうしたの？」

守矢の巫女と同じ二日酔いの薬？

それとも熱射病？」

「紫」

「たしかに7月に太陽が沈まないとなると

気温が大変な事になるわね

というか大変な事になってるわね」

「魔理沙」

「早苗が来てたのか？」

「霊夢」

「さつき通ってたじゃない

と言っより二日酔い？」

「永琳」

「ええ、

酒飲みの偉い人が来たらしくて

一緒に飲んだらこのザマ見たいよ

詳しくは本人に聞いて」

「魔理沙」

「あれ？早苗って20歳過ぎてたっけ？

過ぎてない私が宴会してるけど」

「霊夢」

「は？何言ってるの？

彼奴はXX歳よ？」

「魔理沙」

「ゴメン

何歳って言った？」

「霊夢」

「XX歳よ

まったく、何回も言わせないでよ

さして、行くわよ」

「魔理沙」

「お・・・おう・・・」

——永遠亭／客間——

「早苗」

「うー・・・」

早苗が仰向けに横たわっている

「霊夢」

「あ、いた」

早苗は顔を上げた

「早苗」

「あー、霊夢さんですか…。」

「魔理沙」

「誰と呑んだんだ？」

再び顔を下げる

「早苗」

「なんかすごい人来てなんか凄い呑むから
巻き込まれて」

「魔理沙」

「どんな奴？」

「早苗」

「金色の髪に腰から瓢箪ぶら下げてて」

「紫」

「萃香かしら？」

「早苗」

「いいえ、男性で長身でした」

「霊夢」

「ルナクの身内とやらかしら」

「魔理沙」

「分かん

性別も見た目も知らんしな

所でおでこのたんこぶはなんだ？」

よく見ると左眉の上に小さなたんこぶがあった

「早苗」

「頭痛いんであった事全部言いますね」

—妖怪の山／守矢神社—

—過去—

それは守矢神社の参道を

いつも通りほうきで掃除していた時

「早苗」

「よし、ここら辺は終わった、次は裏かな？」

「金髪の男」

「ここには色んな神や精霊が居るな…」

金髪で長身の酒臭い男が空から降りてきた

「早苗」

「こんにちは！」

参拝はあちらでどうぞ！

守矢教への加入はこちらで！」

「金髪の男」

「君は？」

「早苗」

「はい」

私はこの守矢神社で巫女をさせて頂いております

東風谷早苗と申します」

「金髪の男」

「君は人間か？」

それとも神か？」

「早苗」

「人間です」

風祝をさせて頂いてはいます」

「金髪の男」

「なるほど、道理で君から神力を感じる訳か

ところで君以外に神が2柱居るか？」

「早苗」

「はい！」

神奈子様と諏訪子様がおられます！」

「金髪の男」

「ほう…」

神社の裏から加奈子と諏訪子が出てきた

「神奈子」

「おーい、早苗ー」

そろそろお昼ごはんは…」

「諏訪子」

「どうしたの神奈子？」

「イキナリ凍りついた様に…」

男を見るなりカチコチに固まった

「早苗」

「あ！神奈子様！諏訪子！

この人とお知り合いですか？」

神奈子達は一気に青ざめ

早苗に飛びかかる

「早苗」

「え!?ちよーまつてーぐふう!!」

諏訪子がスライディング膝カツクンを早苗にし

体制が崩れた所で神奈子が後ろからラリアットで

強制的に土下座させる

「神奈子」

「申し訳ございませんでした!!」

「諏訪子」

「貴方様に無礼な態度をとったこの人間を

どうか見逃し下さい!!」

早苗を挟むように2人も土下座をする

「早苗」

「え？」

「一体なんで　ぐふう!!!」

神奈子は頭を上げた早苗の後頭部を掴み

地面に叩きつける

「金髪の男」

「よかろう

離してやれ」

「神奈子&諏訪子」

「はっ!!」

「早苗」

「?…??」

おでこを押さえながら体を起こした

「金髪の男」

「代わりと言ってはなんだから」

「一緒に吞もう」

「神奈子&諏訪子」

「いただきます!!」

— 永遠亭／客間 —

— 現在 —

「早苗」

「それでもってその人がとんでもないのを」

「持ってくるんですよ」

「美味しいお酒が沢山あったから良いけど」

「100度のお酒を吞ませてくるから」

「魔理沙」

「100度って酒と言うよりアルコール単体じゃねーか」

「よく死ななかつたな」

「紫」

「後遺症もなさげな所を見ると」

「奇跡としか言い様が無いわね」

「魔理沙」

「あ、納得」

「早苗」

「で、そのあと」

「いい観光名所は無いかな?」

「って聞かれたから博麗神社をオススメしてきました」

「それにしてもあんな神奈子様達を見るのは初めてですね」

「一通り聞き終わると」

「霊夢」

「行くわよ、博麗神社に」

霊夢達は博麗神社へと出発した

第13話 戦闘開始

―「反転郷」紅魔館／居間―

「うつつ」

「霊夢達が光の居る位置を特定し
移動を開始しました」

「ルナク」

「大妖精は？」

「大妖精」

「はい、居ます」

所で、なんで私はここに連れて来られたんですか？」

「ルナク」

「詳しいことは後で話す」

とりあえず博麗神社に行くぞ」

―「幻想郷」博麗神社―

「金髪の男」

「ここが博麗神社…留守か？」

にしてもなんでここはこんなにも不安定なんだ？」

「霊夢」

「いたいた」

あんた何者よ

名前なんていうの」

「魔理沙」

「なにが目的でこんな異変を起こしたんだ」

霊夢達の問いかけに落ち着いて答えた

「金髪の男」

「異変とやらの目的は無い」

ただの暇つぶしみたいなものだ

次に名前についてだが

名前は無い

なんとも呼べ

最後に何者か

私は全ての光である者だ」

ドヤ顔を決めた

「魔理沙」

「あいつが身内と言ったのはそういう事か

ようやくハッキリした」

「光」

「あいつとは闇の事か？」

「魔理沙」

「多分な

こつちではルーミアって名乗ってるけど」

「霊夢」

「で、この異変を止めてくれるかしら？」

「光」

「嫌と言ったら？」

「魔理沙」

「嫌と言ったら

痛い目にあってから止める事になるな」

「光」

「フッ

やれる物ならやってみろ！」

「魔理沙」

スペルカード

恋符「マスタースパーク」

ミニ八卦炉を取り出し

いつも通りチャージして放つ

「光」

「やるねえ」

向かってくるマスパに人差し指を向け

チャージ無しでマスパを放った

「魔理沙」

「はあ!？」

マスパ同士はぶつかり合い

最初の方は相殺されていたが

徐々に魔理沙が劣勢になってゆく

「魔理沙」

「くっ! 霊夢!」

「霊夢」

「了解!」

スペルカード

夢符 「二重結界」

2人を守るように二重の結界が貼られた

「魔理沙」

「1回切つての!」

ラストワードスペルカード

魔砲 「ファイルスパーク」

マスパを1回止め、さらに大きな光線を放つ

「光」

「ほうほう、コレは.:」

光線を止め

その指をクイツと曲げる

すると、魔理沙のファイルスパークがぐにやりと

進路を変え、光の肩に上からぶつかる

「霊夢」

「なにやってんのよ!!」

「魔理沙」

「わ、私は何もして無いぜ!」

「光」

「あー.:」

いい感じの強さのおかげで肩のコリが解れたよ

「魔理沙」

「くっそー！ー！！！！」

ラストワードスペルカード

彗星「ブレイジングスター」—OverDrive—

光の言葉にキレてしまった魔理沙は

真正面から全力で突っ込んでゆく

「光」

「バカめ」

またもや指をクイツと曲げると

魔理沙の進路がぐにやりと曲がった

「魔理沙」

「え!?!ちよー!」

うわああああー！！！！」

そのまま魔法の森へと落ちてゆき

爆発が発生した

第14話 自分の影

—???

「魔理沙」

「いててて…」

痛む頭を擦りながら
体を起こす

「魔理沙」

「残機が減ってないって事は

うまい具合に落ちたって事か？

…にしても此処は何処だ？」

全ての色が反転し

風も音も無く

暖かくも寒くも無い

生物の気配も無い場所

「魔理沙」

「とりあえず博麗神社に行くか」

立ち上がり箒を取ろうと

地面に向かって視線を向けた

視線の先には紅く輝く丸い目がついた

自分の影があった

「魔理沙」

「妖怪か!？」

「魔理沙の影」

「イヤ、チ ガウ」

影が唇のない紅い口を開き

カタコトで話しはじめ

「魔理沙の影」

「トリア エズ キリ サ メマ リサ

トナ ノ ツテ オコウ」

「魔理沙」

「じゃあ自称魔理沙さんよお

目的はなんだ？」

「魔理沙の影」

「オ マエハ、アイ ツニ カテル ト

オモ ウノ カ」

「魔理沙」

「アイツって光の事か？」

「魔理沙の影」

「ソ ウダ、光の事だ」

「魔理沙」

「確かに私の攻撃は基本光系の魔法だから

全部操られるから、正直勝てないと思うぜ」

「魔理沙の影」

「光系の魔法イガ イはない ノカ ？」

「魔理沙」

(コイツ、私の喋った単語を!?)

「魔理沙の影」

「ル ー ミアカ ラモラ ツタア レハ 無いノか」

「魔理沙」

「あの闇属性付与のペンダントかー…」

あいにく今は無いな」

「魔理沙の影」

「ジャ ア、イイコト オシエ テヤ ルぜ」

「魔理沙」

「いい事ってなんだ？」

ただの影であるお前に何か出来るとは思わないけど」

「魔理沙の影」

「私はただの影デハ無いぜ

いい事ってノハ

私がいイツニ勝ツホウホ ウをオシ エ テ ヤル」

「魔理沙」

「その方法とは？」

「魔理沙の影」

「私ヲ、キュ　ウシ　ユウシ　ロ」

「魔理沙」

「何が起きるんだ？」

まさかとは思うが体に乗っ取る気か？」

「魔理沙の影」

「ソソ　ナ　モノイラ　ナイゼ

マア、ヤ　ツテミ　レ　バワカ　ル」

「魔理沙」

「じゃあいいぜ

乗っ取ろうもんならルナクにやられると思うしな」

「魔理沙の影」

「デハ、ハ　ジ　メヨウ　」

影が起き上がり魔理沙の前に立った

そして魔理沙にぶつかると同時に体の中へと

吸収されてゆく

「魔理沙」

「う！…！　ぐううう！！」

体が爆発するのでは無いかと思うほどの

激痛が身体中を駆け回る

しばらくして

痛みが和らいできた

「魔理沙」

「はあ、はあ…！」

ふと自分の影に目をやると

いつも通り影が地面にあった

「魔理沙」

「…」

特に変わった所は無いな…

意識もハッキリしてるし

魔力も普通にある

痛みも引いてきた」

ゆつくりと立ち上がり、

そばにある香霖堂へと足を運ぶ

ドアを開け、

いつも霖之助が居るカウンターに目をやると

唯一色の反転していないミニ八卦炉があつた

「魔理沙」

「なんでこんなところ？」

ミニ八卦炉を手にとつた瞬間

再び激痛が体を駆け巡る

そのまま床に倒れ込んだ瞬間に意識を失つた

第15話 変異

―「幻想郷」 香霖堂前―

シャボン玉の様な結界の中
ルナク達は作業をしていた

「ルナク」

「クリスタルによる再生は完了！」

よし、あれを使うぞ

「うつつ」

「本気で人間に使ってしまうのですか？」

「ルナク」

「それでもしないとあいつには勝てないからね」
そう言うのと黒いバツクから

アンプルと注射器を取り出した

「ルナク」

「魔理沙なら行けるだろ」

アンプルから灰色の液体を注射器で吸い取り
それを魔理沙に注射する

「ルナク」

「OK、撤退しよう」

魔法で鏡を作り出し

その中へと飛び込む

その後結界が解けた

「霖之助」

「ん？」

あれは…。」

― 香霖堂／寝室 ―

「魔理沙」

「は！」

気づくと布団の中で寝ていた

「朱鷺子」

「あ！　起きたよー！」

看病していたのかそばで本を読んでいた朱鷺子は
読む手を止め霖之助を読んだ

「霖之助」

「起きたのかい？」

「調子はどう？」

「魔理沙」

「大丈夫だぜ」

「霖之助」

「にしてもびっくりしたよ

爆発音が店の前から響いてきて

慌てて外に出たら

大きなクレーターができてたんだもの

暫く周りを片付けてたらいきなり魔理沙が現れるし」

「魔理沙」

「ちよつと待て、

最初、クレーターに私は居なかったのか？」

「霖之助」

「ああ、いきなり君が倒れた状態で現れたんだ」

「魔理沙」

「何があっただ？」

あの夢は一体なんなんだ？…

あー！こんな事してる場合じゃない！！

とりあえずもう行くぜ！」

「霖之助」

「ちよつとー

あんまり無理しない方が…

行っちゃった…」

霖之助の忠告を無視して
博麗神社へと急いだ

—博麗神社—

豪快な音と共に霊夢が神社へと突っ込んでゆく

「光」

「おいおいおい

そんな程度か？」

呆れた表情で霊夢を見下す

「紫」

「霊夢ー!!

いよいよやばくなってきたわね」

スperl

紫奥義「弹幕結界」

光を包む形で弹幕を生成し

動きを封じる

「魔理沙」

「おまたせー」

「紫」

「魔理沙！」

半壊した神社から左腕を庇いながら霊夢が出てきた

「霊夢」

「魔理沙！」

遅かったわね」

「魔理沙」

「なんか気絶してて」

光が波動で全ての弹幕を打ち消した

「光」

「少しは楽しめたかな…お！

おかえり」

「紫」

「気をつけて

あいつ、スペルカードルールを知らないよ」

「魔理沙」

「なるほど、怪綺談 以来だな

力がものを言う戦いは」

「紫」

「怪綺談とか言うんじゃ無い」

「魔理沙」

「とりあえず」

(あの夢が本当なら…)

スペル

恋符「マスタースパーク」

「霊夢」

「ばか！ 忘れた… の?…」

魔理沙が放ったマスパは

光魔法の光線ではなく

それを通して見た景色の色が反転している

不思議な光線だった

「光」

「そんなもの避けなくても!!」

グハア!!!」

光は指を曲げて軌道を変えようとしたが

一切動かないどころか、ダメージを受けた

「魔理沙」

「!?」

「なんだこれ!?!」

「紫」

「今のは… 虚数魔法かしら?」

「魔理沙」

「虚数って2乗したらマイナスになる架空の数字?」

〔紫〕

「なんで知ってるかは置いて…」

「たしかに虚数と言われたらそうよね」

〔魔理沙〕

「で、どんな魔法だ？」

〔紫〕

「虚数魔法はこの世界の裏側

虚数空間の力を使った魔法

確か、他の魔法より遥かに研究開発が難しいはずよ」

〔魔理沙〕

「パチュリーからパク…」

「借りた本の中にそんな本があった気がするぜ

なんでそんな魔法に変わったのか… アイツか」

〔紫〕

「アイツって？」

魔理沙は夢で見た事を話した

〔紫〕

「貴女、闇落ちしたの？」

〔魔理沙〕

「確かにしてそうな話しただけど

一切してないぜ？

今の所はな」

〔霊夢〕

インポッシブルスペルカード

神籤「反則結界」

霊夢が反則スペルで再び攻撃を仕掛けた

〔魔理沙〕

「虚数魔法か… ならスペルの名前は変えなきゃな」

スペル

虚恋「イマジナリースパーク」

再びマスクを放った

第16話 理不尽な力の暴力

―博麗神社―

「魔理沙」

スペル

虚恋「イマジナリースパーク」

再び虚数魔法の光線を放った

「光」

「逸らせられないなら

打ち消すのみ!!」

指からマスを放った

2つの光線は2人の真ん中で相殺され続ける

「魔理沙」

「霊夢!今だ!」

「霊夢」

スペル

霊符「夢想封印」

輝く弾幕がバラバラな方向から

光に襲いかかる

しかし

光は使っていない左手から

霊夢を高速で追い続ける弾幕を数百発 発射した

「紫」

スペル

境符「四重結界」

全速力で逃げる霊夢を結界で包み

追いついた弾幕を弾いてゆく

「魔理沙」

「改名はあとで!」

ラストワードスペル

彗星「ブレイジングスター」

今度は自らが矛となって光の光線に突っ込んでゆく
「光」

「気を引こうとしても無駄だ

あれは俺の意識で動いていない」

魔理沙はマスパの中を徐々に光へと近づいてゆき
手のひらギリギリまで迫った

「光」

「やるなあ」

魔理沙の箒を掴み真下に向かって投げつけた

「魔理沙」

「やばい!!!」

無意識に落下方向の空を殴った
すると、空間が割れその中へと落ちてゆく

——
???

「魔理沙」

「え?」

突然の事で理解不能に陥ったが
割れ目の中の世界を見て思い出した

「魔理沙」

「夢の… あの場所だ」

地面に着地し周りを見渡す

全ての色が反転し

生き物の気配を感じない世界

「魔理沙の影」

「おかえり

どうだ?その力は」

自分の影が話しかけてきた

「魔理沙」

「此処は何なんだよ!」

「魔理沙の影」

「薄々気づいてるだろ？」

「魔理沙&魔理沙の影」

「虚数空間か（だぜ）」

「魔理沙の影」

「再開の祝いにいい事を

この魔法についての知識をお前に渡しておく

さあ、行ってこい!!!」

—博麗神社—

—同時刻—

「紫」

「魔理沙が！」

「霊夢」

「空間を割った!？」

2人が驚いている中1人冷静に

「光」

「虚数空間か」

「紫」

「行ったことはあるけど…」

「魔理沙」

「ただいま!!パート2!!!」

光の頭上が割れ、魔理沙がかかと落としをかました

「光」

「ぐへ!!」

「魔理沙」

「さーらーにー!!」

ラストワードスペル

「零距离ファイルスパーク」

顔面にゼロ距離でマスパを放った

「霊夢」

「魔理沙！あんたに人の心は有るの!？」

弾幕に追われながら霊夢がツツコミを入れる

「魔理沙」

「変に動くなよ！」

スペル

魔符「ミルキーウェイ」

弾幕の天の川が霊夢を追う弾幕を消してゆく

「紫」

「よかった・・・もうすぐで1枚割れるところだったわ」

「霊夢」

「早く言つてよ！そんな大事なこと!!」

「光」

「いってえー！ー！！」

顔面を押さええながら叫んだ

「光」

「今首消し飛んだぞ！」

「魔理沙」

「あるじゃん、首」

「光」

「再生したんだよ、今！」

もう許さん！

本気出すぞ俺は！

光の肅正を受けるがいい！

まずは攻略しやすそうな紅白の奴からだ!!」

「霊夢」

「私!？」

言った瞬間に光が目の前に移動して

霊夢を蹴り飛ばした

そのまま神社を半壊させながら霊夢が飛んでゆく

「紫」

スペル

境符「四・・・」

発動する間も無く

霊夢の着地点に大量の光線が降り注いだ

「霊夢」

(やばい！)

残機を減らした霊夢はその場を離れようとする

しかし、逃げた先に回り込まれ

今度は殴り飛ばされ

神社を全壊させ、瓦礫に埋まってしまう

「紫」

「霊夢！」

やられるがままの霊夢を回収しようと動く

「霊夢」

ラストワードスペル

「無想転生」—Over Drive—

全力で全ての理屈から浮き

次元を超越する事で

攻撃を避けようとする

「光」

「次元昇華」

光もまた上の次元へと移動してゆき

霊夢をたたき落とす

「紫」

「無想転生に攻撃が当たった!？」

そんな筈…」

「魔理沙」

「霊夢!!」

おい紫！

霊夢を回収しろ!!」

「紫」

「無理よ！

80次元とか行かれたらスキマに入れない」

「魔理沙」

「どんな次元だよ80次元って!」

霊夢は地下深くまですり抜けてゆく

光はそれを追いかけて行った

「魔理沙」

「くそ!」

こんな時にアイツらどこ行ってんだよ^{ルーミア}

またも残機を減らした霊夢が隣に復活した

「霊夢」

「やばい、残機が3しか無い」

「紫」

スperl

境符「8重結界」—OverDrive—

霊夢に8重の分厚い結界を張った

しかし、それを全て打ち砕く様な

アツパーが地下から飛んできた

「紫」

「あの結界を一撃で!?!」

結界が薄氷の様に割れた

その後も

理不尽な力の暴力が霊夢を襲い続ける

「霊夢」

(やばい、残機が... もう... 無い)

「紫」

「霊夢!!!」

隙間で霊夢を保護しようとするスキマを霊夢の足元に開く

しかし文字通りの光速で動く相手に叶わず

霊夢が力無く宙をまい、神社の瓦礫の上に落ちた

「光」

「...あれ?」

もう復活しないのか」
返り血で紅く染まった光が2人に振り返った

光は

発狂する魔理沙に近づきミゾオチを殴る

「魔理沙」

「ああ!!」

正気を保てないと判断した紫は

魔理沙を回収しようとするが

謎の力で回収が出来ない

「紫」

「魔理沙…!?!」

魔理沙の髪が白く変色しだした

「魔理沙」

「あああああ…」

言葉にならない声で魔理沙が呻く

腕に紫にうつすら発光する模様が浮き上がり

目が紅く輝きだす

「?!?!」

「え!?!どういう状態!?!」

「霊夢!!」

どこからともなくルーミアが現れた

「紫」

「遅いわよ!!」

もっと早く来てくれれば…

「霊夢も…」

念の為、最終兵器で隠しながらリボンはそのままに

封印を解く

「ルーミア」

「もう1つ聞きたいことが…」

「なんで魔理沙は暴走してるの?」

「紫」

「分からない

一応知ってる事を話すわ」

—少女説明中—

「ルーミア」

「なるほど、闇堕ちね」

「紫」

「言うと思ったわ、」

変化が落ち着いた魔理沙は

荒い呼吸をしている

「光」

「お！闇じゃんか

久しぶりだな！」

「ルーミア」

「なんでよりによつて

幻想郷の重要人物を殺したの!？」

このままじゃ博麗大結界が… 崩れてない…」

「紫」

「たしかに… なんで」

「魔理沙」

「…」

突然魔理沙が立ち上がった

「ルーミア」

「魔理沙…？」

一切の表情が抜け落ちた顔で

ただ目を紅く輝かせている

次の瞬間、ルーミア達は目を見開いた

周りの影が触手の様に起き上がっていたのだ

「ルーミア」

「影が… まさか！」

幾千もの影の触手は槍の様に尖り

光を串刺しにしようと襲いかかる

「光」

「まさか！… お前！」

対の場所にいるはずじゃ」

「魔理沙」

「…」

光の数箇所に影の槍を打ち込み

冷たい視線を送る

「光」

「ぐ…」

まさかお前が人間なんかに化けていたとはな

誤算だったよ」

魔理沙は更に激しく攻撃を浴びせた

「紫」

「なんでか知らないけど

魔理沙がルナクと間違われてるわ…」

「??」

「やっぱりダメかー…」

「??」

「もう回収しよ…」

声のした方を振り返ると

針妙丸がエクステンドアイテムを霊夢のほっぺに

グリグリ押し付けていた

一方隣の正邪は掃除機を持っている

「紫」

「その貴女たち」

「正邪&針妙丸」

「…」 (´・ω・´) チラ

「紫」

「…」

「正邪&針妙丸」

「ばれたー!!!」

急いで掃除機の電源を入れ

そばを漂っていたお餅の様なもの吸い込み
近くにあった鏡に飛び込んだ

「紫」

「まちなさい!!」

第18話 裏方

―博麗神社―

「正邪&針妙丸」

「ばれたー!!!」

急いで掃除機の電源を入れ

そばを漂っていたお餅の様なものを吸い込み

瓦礫にあつた鏡に飛び込んだ

「紫」

「まちなさい!!」

鏡を起こして能力で鏡の世界に行こうとする

「鏡に写った紫」

「ちよいまち」

その姿はだんだんと服の色が反転してゆく

「紫」

「なんでこないのよ!!!」

「ルナク」

「事態は把握している

これでも裏から色々してたんだがな」

「紫」

「表で色々しなさいよ!!」

鼻をグズグズ言わせながら紫が叫ぶ

「ルナク」

「まず裏でやっていた事について

大妖精の回収，保護

魔理沙の強化

霊夢の回収

それに伴った博麗大結界の制御

人里への流れ弾の相殺

以上」

「紫」

「思ったよりやってるのね…」

関心してる場合じゃないわね

ところで

いくつか訳の分からない事をしている様だけど…」

「ルナク」

「大妖精の保護は

もしも光の手に渡ったら全精霊が敵対する事になる

それ対策

今は反転郷に居る

魔理沙の強化は

そうしないと魔理沙は

基本的に彼奴に攻撃が通らないから

まあ激しい怒りと悲しみで暴走してるけどね

博麗大結界の制御は霊夢の代行

うつつを人間に変化させて博麗の血統を付与した

現在の博麗の巫女は実質うつつという事になる」

「紫」

「勝手に博麗の巫女にしないでよ

というか地獄鴉を人間に？」

博麗の血統を付与？」

「ルナク」

「一応俺、妖怪賢者の一員だからそのけんげんで…ね？」

後は言った通り血統を弄った

因みに霊夢の霊体はこちらで回収して

然るべき時に然るべき事をする

彼岸行きはないから安心しろ」

「紫」

「じゃあ魔理沙には何をしたの？」

「ルナク」

「俺という存在を付与した

つまり、現時点で全ての影である者は
2人居る事になるな

正確には違うから魔理沙はそっちで活動出来る」

〔紫〕

「そんな事せずに自分が行けば良いじゃないのよ」

〔ルナク〕

「この場には既に全ての管理者が2人も

ただでさえその狭い空間にいるんだから

空間がが歪みに歪んで

博麗大結界の維持が大変なんだ

試しに…」

ルナクは鏡から人差し指だけを出した

「バキイイイイイ!!!」

爆音と共に博麗大結界に大きな亀裂がはいる

〔ルナク〕

「な

言った通りだ

今から修復に向かうが

魔理沙にこれを」

ルナクは液体の入った注射器を渡した

〔紫〕

「これは？」

〔ルナク〕

「魔理沙の力を中和する薬だ

存在の付与は消えないが安定するはずだ

後は本人次第だが… 魔理沙ならいける」

そう言い残すと鏡からルナクが消え

普通の鏡へと戻った

〔光〕

「そこの妖怪！

がら空きだぜ!!」

大量の光の槍が紫を襲った

第19話 全ての影である者（仮）

―博麗神社―

〔光〕

「その妖怪！

がら空きだぜ!!」

大量の光の槍が紫を襲った

急いでスキマの中に逃げ込む

〔光〕

「あー

逃がしたか」

紫はスキマを魔理沙の近くに開けて

魔理沙に薬を使おうとする

気配を感じたのか魔理沙は紫を攻撃する

〔紫〕

「敵味方無差別と」

魔理沙がミニ八卦炉を構える

紫はスキマを閉じた

〔紫〕

「こうなったらスピード勝負」

もう一度魔理沙のそばで開けて

魔理沙の手足をスキマで挟んで拘束する

〔光〕

「ありがとよー！

お陰で狙いやすくなった！」

そう言うのと手のひらからレーザーを発射した

魔理沙は影の槍で紫諸共薙ぎ払う

〔紫〕

「ちよつとチクツとするわよっ！」

仰け反って回避した紫は

魔理沙に薬を投与する

そして拘束を解除し、その場を離れた

「魔理沙」

「…!?」

魔理沙が胸をおさえながら倒れ込み苦しみ出す

「光」

「おいおいおい、どうした?」

「紫」

(ほんとに大丈夫なんでしょうね…)

姿が変わる気配は無く

ただただ苦しむ魔理沙

「ルナク」

「様子はどうか?」

魔法で作ったと思われる浮いている鏡にルナクが写った

「紫」

「ほんとに大丈夫なんでしょうね?」

「ルナク」

「大丈夫だ… たぶん…」

「紫」

「え?」

少し落ち着いたのか

魔理沙が起き上がった

「魔理沙」

「ううう… まだ胸が…」

今日はやけに苦しむことが多いな…」

何事も無かったかのように自我を取り戻した

「紫」

「魔理沙!」

早速だけど現状を説明するわ」

「魔理沙」

「お、おう」

「紫」

「まず霊夢の事だけど

ルナクがどうにかしている

次に

貴女にはいまルナクが存在が付与されている」

「ルナク」

「訳あってここから出られないから代わりに頼む
因みに俺に出来て

今の君が出来ない事は基本的に無いはずだ」

鏡越しにルナクも説明をする

「魔理沙」

「じゃあ魔力無限なわけか

「ルナク」

「そう、他にも有るがな」

「魔理沙」

「よし！」

待ってる光!!

無限魔力の魔法使いなめんなよ!!」

「ルナク」

「他にもできるぞー」

魔理沙はいくつかの小さな結晶生成し

それから弾幕を撃ちながら光へと近づいてゆく

「光」

「この俺に数で勝てると思うな」

光速で移動する事で全ての弾幕を避けていく

「魔理沙」

「では早速！」

スペル

色彩魔砲 「スパークカーニバル」

出来るだけ沢山の結晶を生成し

それぞれからマスパを放つ

光に向かって虹の槍が飛んで行くようにも
見える光線の束は魔理沙との中間で
光の放った光線によって相殺された

「光」

「他属性攻撃か

精霊たちとどんちゃん騒ぎしたのを思い出すなあ
お前もそうだろう？」

「魔理沙」

「いやぜんぜん」

「光」

「生まれてからずっと負の場所に居たもんな」

「魔理沙」

「そうなのかー？」

最終話 双援軍

—紅魔館—

「レミリア」

「熱い…」

「フランドール」

「ほんとにそうだよねー…」

2人共室内に居るにもかかわらず

チリチリと煙をあげていた

「レミリア」

「パチエの日焼け止め（？）魔法も意味無いし」

「うつつ」

「大変ですね」

「レミリア」

「ところで人間の体ってどうなのかしら？

使い心地…では無いけど」

「うつつ」

「筋力が著しく低下してますね

妖怪の非科学的な筋力と比べたら科学的な…」

「レミリア」

(ジュルリ…)

「うつつ」

「一応言っときますけど、今私博麗の巫女ですよ？

血にミコミコミン的な成分入ってて

吸ったら内側からやられたー

なんてなっても知りませんよ？」

「フランドール」

「ミコミコ…フフフ」

「うつつ」

「不満なら未確認物質アンノウンマターでもいいですよ？」

しばらく話していると鏡からルナクが顔をのぞかせた

「ルナク」

「霊夢の処理終わったからうつつを元に戻すぞー」

そう言うとうつつに向けて

キラキラと輝く赤い粒子を放つ

するとうつつからも粒子が放たれたので

それを回収した

一連のキラキラが終わると

うつつの背中から黒い翼が生えてきた

「ルナク」

「じゃあ霊夢と交代

うつつは魔理沙の援護を」

「うつつ」

「了解しました」

うつつが鏡に入ったあと霊夢が出てきた

「ルナク」

「連絡するまで霊夢はここで待機な」

「霊夢」

「分かったわ

変な事されてないか新しい体を色々調べとくわ」

「ルナク」

「大丈夫だ、何もしていない

強いて言うなら口から火を吐けるように

改造したぐらいだ

じゃー！」

ルナク達が鏡から消えた

「霊夢」

「…嘘でしょ」

霊夢がすごい顔で固まった

「レミリア」

「やってみなさい?」

霊夢は口を開けてカーカー掠れるような声を出した

「フランドール」

「背中に付いている付箋には冗談って書いてあるよっ。」

「霊夢」

「…」(, w ,)

— 博麗神社 (跡地) —

「魔理沙」

「いやいや知らない」

「光」

「え!？」

「お前自分の存在意義すらも知らないのか!？」

「2人がわちやわちや会話しているのを聞いて

「ルーミア」

「なんでアイツは気づかないのよ…。」

「紫」

「普通姿で… あー…。」

「ルーミア」

「確かに私も最初、姿じゃ分からなかったわ」

「2人の傍の鏡が輝き、うつつが飛び出す

「ルーミア」

「びっくりしたー!」

「びっくり箱かこの鏡!」

「うつつ」

「霊夢は紅魔館に居ます

「一応の亡命との事ですので構わない様をお願いします」

「早口で事を説明すると

「魔理沙の方へと飛んで行った

「光」

「君は一体何者なんだ…。」

「魔理沙」

「霧雨 魔理沙

普通の魔法使いだぜ！」

「うつつ」

「あの一…」

某少年名探偵の真似をしている霧雨魔理沙さん

助太刀します」

「魔理沙」

「お！援軍か」

「光」

「援軍か… ならばこちらも…」

「チルノ」

「いたぞー!!!」

そこの金髪!!サイキョーのアタイと勝負しろ!!!!!!

「リグル」

「やめようよ… どう考えても勝ち目が無いよ…」

「ミステイア」

「ごめんなさい！今のは無かったことに…」

あれ？ルーミアだ！

しかもリボン付き強化形態

訳してルーミアさん！」

視線の先には顔を青くしたルーミアが

「ルーミア」

「チルノ!!!こつち来て!!」

「光」

「ほう… 力を失った氷精霊か」

「チルノ」

「何言ってるんだ？アタイは氷の妖精だぞ!!」

「光」

「そんな事も忘れたのか」

光はチルノに向けて稲妻の様なエネルギーを送り出す

「チルノ」

「うう!!」

あ、アタイに何…を」

チルノが金縛りに合っているかのように動けなくなる

―「反転郷」博麗神社―

「ルナク」

「ううう…」

ヤバい… かなりやばい」

冷や汗を垂らす

「大妖精」

「チルノちゃん!!!」

大妖精がテレポートでチルノの元へ移動した

「ルナク」

「ばか!!」

―「幻想郷」博麗神社（跡地）―

「チルノ」

「大ちゃん…」

大妖精がチルノを庇いエネルギーを受けた

「ルーミア」

「大ちゃん!!!」

ルーミアはリボンを引きちぎった

歪な翼が生えそれが大妖精を包んだ

「リグル」

「あれは！」

「ミステイア」

「EXルーミア!!」

エネルギーを受けてルーミアの翼が煙をあげ出した

「光」

「なんだ、闇もここにいたんだ

ひさしぶりだ　ね!!」

圧力を増したエネルギーはルーミアの翼を貫いた

「大妖精」

「ルーミアちゃん…：…ルーミ…：…ル…：…」

「ルーミア」

「大ちゃん…：？」

大妖精の様子がおかしい

特に羽がおかしい

羽が7色に煌めいているのだ

「大妖精」

「大妖精？だれ？それ」

一旦距離をとり大妖精のを観察する

「大妖精」

「我が名は大精霊」

「ルナク」

「すまん！」

不意打ちテレポートは

流石に止めることが出来んかった！」

「ルーミア」

「どうすんのよこれ！」

「大精霊」

「数多の精霊を取りまとめる13の精霊を取りまとめし者

我が復活した今、

全ての精霊は再びその力を取り戻すであろう」

第3章 精霊大戦争

第1話 大精霊の復活

—博麗神社（跡地）—

「大精霊」

「我が名は大精霊

数多の精霊を取りまとめる13の精霊を取りまとめし者
我が復活した今、

全ての精霊は再びその力を取り戻すであろう」

「チルノ」

「大…ちゃん？」

さつきまでと違う大妖精に語りかける

「大精霊」

「氷精霊か

待っている、今力を戻してやろう」

大精霊は鏡を通り越し

反転郷のルナクの元へとテレポートする

—「反転郷」博麗神社—

「ルナク」

「!？」

慌てて能力を一時的に消す薬を服用しようとするが
振り払われる

「大精霊」

「さあ、返して貰おうか

可愛い部下達の力を」

「ルナク」

「部下なんて知らねえぞ？」

「大精霊」

「知ってるぞ？」

お前が全員分の力を持っていることを
さあ、おいで」

ルナクの身体から13のアトリビュートクリスタルが
発生し、ゆっくりと大精霊の元へと引き寄せられる

「ルナク」

「容易く返すかよ！」

こちらら妖怪賢者名乗ってんだよ

幻想郷を危機に晒すことなんて

それしかない時しかしねえよ！」

クリスタルを自分に引き寄せる

「大精霊」

「仕方ない、なら力づくだ」

ルナクのまじかにテレポートし

みぞおちに殴り掛かる

それを仰け反りながら後ろに向かって

仰向けの姿勢で高速で飛行する

大精霊はそれに覆いかぶさるように

うつ伏せで攻撃を仕掛ける

「大精霊」

「まず1つ」

白色のクリスタルを奪われルナクがガクツと減速する

「大精霊」

「光精霊の力か」

「これでもっと速く動ける」

ルナクは緑のクリスタルのエネルギーを使って

大精霊を蹴り飛ばす

「ルナク」

「光は樹に弱い」

「大精霊」

「なるほど」

大精霊はテレポートと光速移動によって

緑色のクリスタルを奪う

「ルナク」

「樹は闇に弱い」

光と闇は互いに弱い」

黒いクリスタルから光線が放たれ、

またも大精霊が飛ばされる

「大精霊」

「樹精霊は傷や病を治す力を持つ」

傷をたちどころに治し襲いかかる

「ルナク」

「闇は破壊の力を持つ」

「大精霊」

「光精霊は弱い創造の力を持つ」

創造と破壊の衝突により衝撃波が発生し

互いに地面に叩きつけられる

その瞬間にルナクは蔦で絡め取られた

「ルナク」

スペル

核符 「ニュークリア エクスプロージョン」

紅いクリスタルのエネルギーを使い

自分を中心に核爆発を起こす

「大精霊」

「チエックメイト」

爆煙の中から大精霊が現れ、

一瞬にして全ての自然系クリスタルがを奪われる

「ルナク」

「くそっ!!」

「大精霊」

「これは要らん」

黒と灰色のクリスタルが地面に落ち

コツンという音を立てる

「大精霊」

「では」

ルナクを毛糸の玉の様に蔦で丸めた

——「幻想郷」博麗神社（跡地）——

「魔理沙」

「あれ？クリスタルが」

11のクリスタルがボロボロと崩れ落ちた

「魔理沙」

「まさかルナクが…」

少しすると大精霊が崩れた11のクリスタルと

同じ物を持ってテレポートして来た

「大精霊」

「さあ、力を失いし13の精霊のうち

全ての光である者につかえし11の精霊よ

時は来た、今日覚めよ！」

クリスタルはそれぞれバラバラな方角に飛んでゆき

そのひとつがチルノの元へと近付いた

第2話 精霊の復活

―博麗神社（跡地）―

「大精霊」

「さあ、力を失いし13の精霊のうち

全ての光である者につかえし11の精霊よ

時は来た、今日覚めよ！」

クリスタルはそれぞれバラバラな方角に飛んでゆき

そのひとつがチルノの元へと近付いた

「チルノ」

「え？何？」

「大ちゃん？」

クリスタルが細かい水色の光の粒となって

チルノに吸い込まれてゆく

「リグル」

「…？」

虫の知らせ…」

「ミスティア」

「なんて？」

「リグル」

「何でかわからないけど逃げろって」

チルノが成長し精霊へと変身した

「ミスティア」

「氷精霊チルノだ！」

姿は前に見た精霊状態と同じ

しかし、様子が違う

いつもの好奇心旺盛な輝く瞳ではなく

冷酷な鋭い眼光を放っている

「チルノ」

「忘れていた…」

何もかも」

「うつつ」

「かなりやばいですね…」

魔理沙！プランBの用意を開始します」

「魔理沙」

「おう！わかった」

（なんだそれ？）

「大精霊」

「氷精霊よ、久しぶりだな」

チルノが大精霊の元へと近寄り跪いた

「氷精霊」（チルノ）

「久しぶりと言うのも

いつも会っているのですがどうかとは思いますが

お久しぶりです…」

2人は光の元へと行った

既にそこにはチルノ達と同じ幹部精霊達が並んでいた

「ルーミア」

「やばい… かなりやばい…」

みすちーとリグルは鏡の中へ逃げて！

…ん？」

ミスティア達が鏡に逃げ込んだと同時に

紙切れと黒いクリスタル足元に転がった

「ルーミア」

「…へえー

面白いことするじゃん」

ルーミアは黒いクリスタルにエネルギーを送り込む

するとクリスタルが浮き上がり

地底へと通じる間欠泉の方へ飛んでいった

しばらくすると黒い服を着た精霊が1人飛んできた
「??」

「誰かと思ったら貴女様かー」

せつかく酒盛りしてたのにー」

「ルーミア」

「闇精霊、アンタ地底に居たのね」

「闇精霊」

「そりやあね

常に闇が広がってるわけだし

と言うよりなんかここ暑くね？

しかもダルいし」

「魔理沙」

「あ、あのー

そこの黒いのは？」

クリスタルを更に2つ失った魔理沙が会話に割り込む

「闇精霊」

「む！人間ごときが… っってお前影か？」

「魔理沙」

「いや、人間だぜ？」

「ルーミア」

「こいつは闇精霊

いかにも破壊神というような性格だから注意ね

あとルナクももうそろそろ来るから」

そう言うのと紙切れを紫に渡す

「紫」

「…」

ちよつとおおお!!?

これどういう事よ!？」

「正邪」

「という訳だ、行くぞ」

ルナクによって強化されたであろう金色の瞳の正邪に

スキマの中に拉致されて行った

「光精霊」

「あのー… 操らは一体何を？」

控えめな優しい声の精霊が光へと問う

「光」

「知らん」

第3話 永昼と永夜

―「反転郷」博麗神社―

「ルナク」

「さて、」

灰色のクリスタルにエネルギーと影

妖精の血統を流し込むと

クリスタルが細かい灰色の光の粒となって

ルナクに吸収されてゆく

少しすると

ルナクの影から小柄な精霊が水に浮かんで来たかのように

浮かんできた

「ルナク」

「起きろー」

「影精霊」

「んー… あと5分」

そのまま眠始めた

「ルナク」

「なんか妖精の時から

引きこもりっぱいところあるよなこいつ…

とりあえず行くぞ」

―「幻想郷」博麗神社（跡地）―

「魔理沙」

「あっちにもお前と闇精霊の様な関係のやつがいるな」

「闇精霊」

「あいつは優しい奴だな」

「ルーミア」

「こいつとは正反対」

「??」

「おおー… ってアツ！」

鏡から小柄な女性が出てきた

「闇精霊」

「お！影精霊」

「魔理沙」

「なんかかわいいいな…」

ん？影精霊？

という事は…」

「ルーミア」

「来た」

突如

バッキイイイイイ!!!

という爆音と共に博麗大結界に亀裂が入る

一方その頃

—「スキマの中」—

「紫」

「ウギギ…」

流石にやばい！これやばい!!」

「正邪」

「予想よりも遥かにキツイイ!!」

「針妙丸」

「ガンバレーー!!」

紫が能力をフル活用して

砕け散ろうとする結界を力づくで引き止め

正邪が強化された能力で修繕

針妙丸が小槌で妖力補充といった激務をこなしていた

—「幻想郷」博麗神社（跡地）—

ルナクが鏡から出ようと体を外に出す度

結界の亀裂がより深く、より大きくなってゆく

「ルナク」

「よっこいしよ」

ルナクが全て出てくる頃には空間が歪み切って
全ての輪郭が陽炎のように歪み始めた

スキマ組の努力があつてか

少しずつ輪郭がはつきりしてゆく

「ルナク」

「おまたせ…暑くね？」

「魔理沙」

「多分瓦礫の温度計が壊れてなきや気温40度

日向はだいたい50度つてとこか」

「ルーミア」

「仕方ないわね…」

ルーミアが空に手をかざした

「ルーミア」

「この星の夜の闇よ、

この忘れられたモノの樂園幻想郷から日の光を消し去れ」

ルーミアと光の midpoint を通る様に

幻想郷を半分包み込む夜が発生した

「魔理沙」

「すげえ

天頂にあつた筈の太陽の半分が満月に

しかも昼と夜の境界がスッパリと別れてる」

「ルナク」

「永半昼夜異変に進化したな

何でか知らんがバランスが取れててなんか落ち着くわ」

「魔理沙」

「あんたが落ち着いてる間に紫達は死に物狂いで
結界を維持してるんだけどね」

「ルナク」

「じゃあ霊夢も投入するか」

「うっっ」

「では呼んできます」

反転郷経由で霊夢を呼びに行った

第4話 復帰

―博麗神社（跡地）―

「ルナク」

「魔理沙はうつつと霊夢が帰ってきしだい3人で行動
まずは精霊達の攻略だ
ちなみにこの前精霊チルノと戦ったろ？」

「魔理沙」

「そういえばそうだったな… まさか」

冷たい汗が頬を伝う

「ルナク」

「全員それとほぼ同等だ」

「魔理沙」

「まじか…」

「ルナク」

「じゃあ行くぞ… あれ？影精霊は？」

「魔理沙」

「あっち」

月明かりで出来た木陰にぶかぶか浮かんで昼寝をしていた

「ルナク」

「おいー」（ω、；）

―紅魔館―

「フランドール」

「あれ？」

熱くなくなった」

「レミリア」

「太陽がおかしな事になってるわね」

「うつつ」

「霊夢さーん、博麗霊夢さーん」

うつつが鏡から顔を出した

「霊夢」

「中待合にでも行けばいいのかしら？」

「うつつ」

「いいえ、行先は診察室では無く戦場です

このまま行ってもさつきと同じ・・・いや

残基が少ない分さつきより早くリタイアしそうなので

うつつは持ってきたアタッシュケースを開けた

「うつつ」

「どれがいいですか？」

蓬萊の薬と青酸カリ」

2つのアンプルを取り出した

「レミリア」

「もつとましなもに持ってきなさいよ」

「うつつ」

「じゃあ

紺珠の薬Beta2.0

闇堕ち

能力強化

どれがいいですか？」

「霊夢」

「3分の2ケースに無いじゃない

って言うかBetaってなによ」

「うつつ」

「試作品です

死んでも自己責任で」

「霊夢」

「じゃあ・・・」

「うつつ」

「闇堕ちはある世界を一人で廃墟にした血も涙もない
冷酷非道な完全アタッカータイプの禍霊夢

(次元を司る程度の能力)

になります

ちなみに他の選択肢の中でも最も強い状態になります
ついでに言わせてもらうと能力強化したら
チート能力になります」

「霊夢」

「読み切ってやがる…」

具体的にどんな事かしら？

「うつつ」

「今までのに付け足して

例えば…

光線同士は普通はぶつかったりしません
それをぶつからせたり
物資自体を鏡に反射させたり
水に磁力を持たせたり
色々出来ると予想されます」

「レミリア」

「私からもいいかしら？」

「霊夢」

「なに」

「レミリア」

「私の能力で運命を見させて貰ったんだけど
禍霊夢だっけ？を選んだ結果は
不老不死の人物を除いてルナク以外の妖怪賢者
幻想郷、外の世界、その他もろもろ全て滅んだわ
最期に管理者3人に討伐されて終わり」

「霊夢」

「なるほど、却下ね」

「うつつ」

「じゃあ消去法で能力強化ですね

では、参りましょう!!」

「霊夢」

「何処に？」

「うつつ」

「何処について？決まってるでしょ
戦場に戻るんですよ」

第5話 恐怖光景

―博麗神社（跡地）―

「うつつ」

「オーダー入りましたー

能力強化一丁」

「ルナク」

「いらっしやいませー」

「霊夢」

「緊張感の無い連中ねえ

うわあ… 神社が…

… 私ってこんな感じなのね」

自分の死体を不思議そうに眺める

「魔理沙」

「おかえり」

「霊夢」

「ただいまああああああ!？」

誰!？」

闇堕ちカラーの魔理沙を見て驚いた

「魔理沙」

「私だぜ! 魔理沙!」

お前が死んだ時に発狂して闇堕ちしたらしくて

戻ってもこのままなんだよ」

「ルナク」

「3、2、1… はい」

魔理沙が説明をしているなか

空気を読まずに霊夢に向かって

7色に輝くエネルギー段を打ち込んだ

「霊夢」

「ちよつとー何したのよ!？」

「ルナク」

「能力強化

使い方は自分で頼む」

ルナクは影精霊の元へ行き

「ルナク」

「起きろー」

「影精霊」

「あと30分」

「ルナク」

「ダメ」

「霊夢」

「ところであの太陽はどういう状態？」

「魔理沙」

「光の永昼にルーミアの永夜が合わさって競合中」

「霊夢」

「じゃあ、

ルナクが起こしてる影に浮いてるやつと

ルーミアの隣にいる奴らは誰？」

「魔理沙」

「影精霊と闇精霊

元チルノクラスの妖精達だな

因みに光の周りの奴らもそうだぜ」

「霊夢」

「精霊ってあの!？」

「魔理沙」

「そう、あれぐらい強いらしいぞ」

「??」

「そっちが来ないならこっちから行きますよ!!

だいたい太陽が無かったら

植物達はどうすれば良いのですか!」

緑色の精霊が攻めてきた

「ルナク」

「おい、樹精霊が来たぞ

あいつなら得意だろ」

「影精霊」

「しようがないなあ」

影精霊は起き上がり樹精霊の方向へと歩いてゆく

「樹精霊」

「まずはその人間からです!!」

猛スピードで飛んでくる

「魔理沙」

「やべえやべえ!

えーっと木には火… 紅クリスタルが無いじゃん!」

「霊夢」

「速度で威力は増さない速度で威力は増さない速度で威力は増さない速度で威力は増さない」

パニックってる2人の前に到着した

樹精霊が浮いたまま見下してくる

「樹精霊」

「さて、どう調理して差し上げ…?」

動きが止まった

「影精霊」

「久しぶり、じゅっちゃん」

そこには樹精霊の影を踏む影精霊の姿があり

やがて樹精霊が地面に落ちてきた

「樹精霊」

「… ひさし… ぶりです… ね…」

「影精霊」

「それじゃあ」

倒れている樹精霊と地面の間から影の触手が伸びてきた

「影精霊」

「さようなら」

触手が樹精霊を包み込み締め上げてゆく

〔樹精霊〕

「!!——!!!」

もがき声が聞こえたと思うと「ポキッ」

という軽い音と共に触手の隙間から鮮血が流れ出した

〔霊夢&魔理沙〕

：（；、。、ω、）：ガクガクブルブル

〔ルナク〕

「やっぱり精霊にも血は通ってるんだね」

開いた触手の中から緑色のクリスタルを取り出した

〔ルナク〕

「樹のアトリビュートクリスタル、奪還成功！」

あとはどうぞ」

影から別の触手が出てきて

残骸と血痕を引きずり込んで行った

〔霊夢〕

「可愛い顔してなんと残酷な…」（ガクブルガクブル）

〔闇精霊〕

「あんまり美味しくない…」

〔魔理沙〕

「今なんって言った!？」（ガクガクブルブル）

〔ルナク〕

「そのトラウマ喰らった2人

うつつと3人で行動しろ

目標は精霊の全滅だ

あと霊夢は能力の使い方を早く見つけろ！」

〔うつつ〕

「了解です

行きますよ！二人とも」

〔霊夢〕

「待って、飛べないんだけど」

「魔理沙」

「そっか、今まで能力で飛んでたから…」

「うつつ」

「早く！」

「ルーミア」

「影精霊って闇精霊と能力面が似てるよね」

「ルナク」

「似てるけど、違うんだなコイツら」

「ルーミア」

「じゃ、行ってきます」

ルーミアと影精霊は飛び立って行った

「ルナク」

「じゃあ俺らも」

第6話 能力解放

—博麗神社（跡地）—

「ルナク」

「じゃあ俺らも」

ルナクはふわりと浮きあがり

影精霊の両手を掴んだ

「影精霊」

「行つてきます」

空中ブランコの様な感じで出発しようとしている

「霊夢」

「あんた飛べないの？」

綺麗な羽があるのに」

「影精霊」

「はい、自然界において影はモノに張り付く物ですから」

カラスアゲハの様な羽をパタパタ動かしながら答える

「ルナク」

「同じ羽で俺が飛べたのは

ただ単に飛べるから

という事だ」

羽が無くとも飛べるルナクはそう言いながら飛んで行った

「魔理沙」

「さて、こっちの飛べない奴はどうするか」

「うつつ」

「能力的には……行けるんですが」

「魔理沙」

「命令的にやってみたら？」

「霊夢」

「飛べ!!」

……無理」

「うつつ」

「空を飛ぶ程度の能力

意味合い的には自分を縛るモノの影響を受けない能力
今までは重力無効化で飛んでたから…。」

「魔理沙」

「縛られないの上なら縛りを操れそうだし」

「うつつ」

「予定では光の衝突

物質の鏡面反射も出来るはずですが」

「霊夢」

「待って、なんで分かるの？」

3人が固まった

「うつつ」

「昔ルナク様と実験した事があって」

「魔理沙」

「使ったことがあるなら言えよ!!」

「うつつ」

「… うっかり忘れてました

確かあの時は… 干渉を操る程度の能力
って命名したような… あれ? どうだっけ?」

「魔理沙」

「まさかとは思ったけど流石は鳥妖怪

お空と同じで忘れっぽい」

「うつつ」

「確かに前に砂糖買いに行つたのに塩買って来たり…

あ、思い出した、

霊夢! 心に込めて Repeat after me!
なぜ私は飛べないと思っているの?
常識的に飛べるでしょ?」

Say!!」

「Say!!」

「霊夢」

「な、なぜ私は飛べないと思っているの？
常識的に飛べるでしょ？」

霊夢が浮き出した

「霊夢」

「は!？」

「うつつ」

「色々試した結果

馬鹿にするように命令したら出来ました
恐くもつと短縮&感じ良くイケるか」と

「霊夢」

「うつつの羽は白いのが常識」

うつつの翼が白色に変わった

「魔理沙」

「お、おい!!」

「霊夢」

「あ、イケた」

「うつつ」

「まさか、

私の墨染の翼… 白い!？」

「霊夢」

「なるほど、よし!

行くわよ!」

「うつつ」

「戻して…」(・|・|・、)

3人もようやく出発した

—迷いの竹林上空—

〈光サイド〉

「大精霊」

「樹精霊がやられました」

「光」

「本気？」

「大精霊」

「あと闇精霊と影精霊の反応も」

「光」

「やっぱり移動せず監視しとくべきだったかな？」

「大精霊」

「二人ともこっちに来てます」

「光」

「闇の位置が特定出来た

多分一緒だろう

不可解なのは影の反応が2つある

… あ、1つ消えた」

「大精霊」

「酔ってるからじゃないですか？」

「光」

「酒が出来た時からずっと酔いっぱなしだから大丈夫だ」

— 「スキマの中」 —

「針妙丸」

「がんばれえ…」

「正邪」

「流石にきついぞこりや

チビ！ 飴舐めてないと消えちまうぞ？」

「紫」

「ヤバい… 眠い… 飴の味飽きた…」

3人とも相当疲れているようだ

「??」

「紫よ！ だらしないではないか！」

「紫」

「うるさいわね… 隠岐奈」

「隠岐奈」

「遅れたことは謝る

とりあえず助けてやろう」

3人の背中に扉を作り妖力と生命力を補充する

「正邪」

「少しは楽に…」

「針妙丸」

「明日は筋肉痛だね」

第7話 精霊討伐 1

—Opposite Side—

—「反転郷」博麗神社付近—

「ルナク」

「こつちを経由して奇襲をかけよう」

「影精霊」

「相性から考えると… 光精霊位しか優位に立てないね」

「ルナク」

「不利なものも光だけだな」

目標は水精霊だ

その次に炎精霊を狙う」

「影精霊」

「了解！」

—Darkness Side—

—「幻想郷」人里／上空—

「闇精霊」

「光精霊を狙う？」

「ルーミア」

「他を狙うわ」

多分光精霊は光と一緒にいるから後回し

多分ルナク達は水と炎に行くから…」

—Phantasm Side—

—博麗神社跡地—

「うつつ」

「属性的に考えると…」

魔理沙の光，魔属性攻撃で毒精霊か

私の風属性攻撃で虫精霊を攻略するのがベストかと」

「魔理沙」

「2重で私が有利なのか!？」

「うつつ」

「じゃあ場所を聞いて見ますね」

— Opposite Side —

— 「反転郷」 妖怪の山／玄武の沢 —

「通信／うつつ」

「毒精霊ってどこに居ますか？」

「ルナク」

「鈴蘭の咲く草原がある丘があるだろ？」

そこに居るはずだ

竹林は避ける、光が陣取ってる」

「通信／うつつ」

「了解です！」

「ルナク」

「さて、水精霊は見つけた

あとはこつちに引きずり込むだけ」

沢の水面を歩いている水精霊を

水面を鏡にして反転郷に引きずり込む

「水精霊」

「え?… え?… あ… 全ての対である者じゃないですか」

一瞬戸惑うも直ぐに落ち着いた様子の水精霊

「ルナク」

「早速だけど… Adeliosu!」

— Phantasm Side —

— 「幻想郷」 無名の丘／上空 —

「魔理沙」

「ん?… なんか青いクリスタルが増えたぞ?」

「うつつ」

「ルナク様が水精霊でも仕留めたのでは?」

「魔理沙」

「そういう事か」

「霊夢」

「所で精霊が2人居るように見えるんだけど？」

鈴蘭の花畑に紫色の服と濃い緑の服の精霊が見える

「うつつ」

「虫精霊と毒精霊ですね」

「魔理沙」

「合わせて毒虫精霊だな」

「うつつ」

「あながち間違ってますんよ？」

「霊夢&魔理沙」

「え？」

「うつつ」

「虫精霊が毒虫を操り

毒精霊がその毒を強化する

というコンボ技をやられるかと」

「魔理沙」

「ど、毒虫って例えば？」

「うつつ」

「地上ならムカデ、空中なら蜂

木下ならば毛虫とか色々」

「魔理沙」

「やめろ、作者はムカデ嫌いだ

ムカデって打っただけで足回り気にしでした」

「うつつ」

「そう言ってる間にスズメバチの大群が！」

「霊夢&魔理沙」

「いやあああああああああ!!!」

「毒精霊」

「毒性20倍で良かったかな？ヒヒヒ…」

「虫精霊」

「スズメバチたちおいでー!!」

んでもってアイツらをどんどんどんどん
刺しちやっつてねー!!」

「毒精霊」

「五月蠅いなあー…」

虫だけに… ヒヒヒ…」

「魔理沙」

「不気味な笑いの精霊と声が大きい精霊

なんとも言えないコンビだな… って蜂い!？」

「霊夢」

「蜂には攻撃性は無いわよ?」

スズメバチ達が追いかけて来なくなった

第8話 精霊討伐 2

―無名の丘／上空―

―Phantasm Side―

「霊夢」

「蜂には攻撃性は無いわよ?」

スズメバチ達が追いかけて来なくなった

「虫精霊」

「な!？」

「あつちも虫使い!？」

「毒精霊」

「しょうがないねえ… ヒヒヒ」

「霊夢」

「行くよ!」

「魔理沙」

「お、おう… 便利だな… その能力」

スペル

彗星「ブレイジングスター」

「うつつ」

スペル

突符「バードストライク」

2人はそれぞれ優位に立てる相手ぬ向かって突撃し
弾き飛ばす

「虫精霊」

「ちよつと!」

「不意打ちは卑怯だぞ!!」

「うつつ」

「先に蜂を送り込んで卑怯は無いでしょ」

「毒精霊」

「うぐあぁ…」

「痛い…」

「魔理沙」

「光，魔攻撃はさぞ痛いだろうなあ」

ラストワードスペル

魔砲「ファイナルスパーク」

のたうち回る毒精霊にキツイ追い打ちをかける

「魔理沙」

「よし！」

毒のクリスタル回収完了… あれ？」

視界が揺れ始めた

それと共に吐き気も感じる

「魔理沙」

「貧血かな？… 頭も痛いぜ…」

視界がぼやけてゆき全身に力が入らなくなる

「霊夢」

「魔理沙？」

倒れた魔理沙のところに向かった

「魔理沙」

「めまいと吐き気がやばい」

「虫精霊」

「キツキツキツキ！」

それは毒精霊が死に際に放った毒さ！

そこから辺に生えてる鈴蘭のね！」

「魔理沙」

「説明どうも」

回収したばかりの青紫色のクリスタルと

緑色のクリスタルを使って解毒した

「虫精霊」

「え!？」

「魔理沙」

「残念だったな

毒と分かれば解毒すればいい

ついでに

今ちようど炎の精霊がやられた見た見たいだから

実験台になってくれ

それじゃ!」

コピースペルカード

炎龍「ギガプロミネンス」

炎の龍が虫精霊を焼き焦がした

—「地底」灼熱地獄跡地—

—Opposite Side—

「ルナク」

「虫と毒の回収が完了したみたいだな

それならこのまま地上に出ずに地精霊を攻略しよう」

「影精霊」

「りよーかい」

「ルナク」

「これから地精霊攻略に向かう

そっちは雷精霊の攻略のため天界に向かえ

攻撃は地のクリスタル回収を確認後に行ってくれ

俺はこのまま岩，鋼精霊を攻略する」

—「幻想郷」無名の丘／上空—

—Phantasm Side—

「うつつ」

「了解しました」

「魔理沙」

「にしてもルナクのやつ、すごいペースで倒してくな」

「霊夢」

「不意打ち且つ弱点を一撃で仕留めてるんじゃない？」

「魔理沙」

「暗殺者かな？」

ルナク・ザ・リツパー」

「うつつ」

「とりあえず妖怪の山に向かいますよう

確かその上空に天界が有るんですよ？」

「霊夢」

「あんた鴉天狗と間違われたりしてね」

「うつつ」

「それなら羽の色を戻さない方が…」

いや、それはないですね

それじゃあ行きましょう」

第9話

精霊討伐

3

―「地底」灼熱地獄跡地―

―Opposite Side―

「影精霊」

「暑かったー…」

「ルナク」

「熱くなきや灼熱地獄じゃあないでしょ… あ、」

灼熱地獄から出たところで

地霊殿の主 古明地さとり とぼったり会った

「ルナク」

「…」両手をばさばさ羽ばたかせている

「さとり」

「…？」

「ルナク」

「…」諦め顔

ルナクの肩から1本のコードが伸び

先端が悟り妖怪のサードアイになった

「さとり」

「!?」Σ (. .)

「ルナク」

「…」

「さとり」

「…」

サードアイ同士で見つめ合う

「さとり」

「…」

5秒ぐらい見つめ合うと

さとりがどっかに行ってしまった

「ルナク」

「地，岩，鋼精霊の目撃情報が掴めた」

「影精霊」

「さーどあい だっけ？
すごい便利そうだね」

—「幻想郷」妖怪の山—

—Phantasm Side—

「文」

「あやややや？

見ない顔ですね？

新入りの方ですか？

駄目じゃないですか！

ちゃんと頭襟とぎんを被ってなきや

「うつつ」

「あの一：：」

「文」

「被ってないのが上司にバレたら
給料減らされちゃいますよ？」

「うつつ」

「すみません、私：：」

「文」

「分かったのならよろしい
今すぐ被るか無いなら取りに行きなさい？」

「うつつ」

「私、鴉天狗じゃないんですけど」

「文」

「：：：：え？

黒く美しい翼があるのに？」

「うつつ」

「はい」

「文」

「鴉天狗じゃないと：：

ならあなたは何者ですか？

場合によつては哨戒天狗を呼ぶことになりましたが…」

「うつつ」

「私は地上の鴉と地獄の鴉のハーフで普通は鴉なんです
が式神をつけてもらってるので人型なんです」

「文」

「…妖怪の山に入った目的は？」

「うつつ」

「天界に用があつて」

「文」

「あややややー！

それは失礼しました

ではどうぞ」

横にそれて道を開けた

「霊夢」

「記事にしたら承知しないわよ？」

「文」

「そ、ソクナコトシマセンヨヤダナーレイムサンツテバ」

「魔理沙」

「新聞に載つてたら零距离マスパな」

「文」

「はい」(´・ω・｀)

—「天界」桃畑—

「霊夢」

「ねえ、また二人いない？」

「魔理沙」

「いるな、黄色いのと薄水色のが」

「うつつ」

「桃を食べながら雑談してる様ですね…」

「天人の少女やヒラヒラの女性と」

「魔理沙」

「ありや天子と衣玖だな」

4人仲良く丸いテーブルを囲んで桃を食べている

「霊夢」

「そういえばクリスタルは？」

「魔理沙」

「まだだ」

地のクリスタルが来たとしても

風精霊対策に氷，岩，雷が欲しいところだが…

そういえば岩のスペルが1枚あったわ」

「うつつ」

「風と光は互いに無効なので魔理沙がデコイとして風に

あと2人で雷を倒してその後

魔理沙が雷のちからで風を撃破

これでどうですか？」

「霊夢&魔理沙」

「了解」

―「天界」 桃畑―

「雷精霊」

「がっはっはっはっは!!」

「このももなんて言うかそのー… あれだな!!」

「風精霊」

「あまり美味しくないですね」

「天子」

「サラツと言うわねあんた

しょうがないじゃないの

^{天界}ここにはこれぐらいしか無いもの

比べて地上のぷりんはすごく甘く美味しかったわ」

「雷精霊」

「今度はそのぷりんとやらを期待するぜ!」

「衣玖」

「また勝手に地上でプリンを食されたのですか…」

そんな甘い物ばかり食べてますと虫歯になりますよ?」

(霊夢達が居ますね… 協力してもらいましょうか)

「天子」

「大丈夫よ

しっかり歯を磨いてるから」

「風精霊」

「虫歯にならなくても太るよ?」

「天子」

「うぐう」(・ ・ ・ ω ・ ・ ・)

「魔理沙」

「衣玖の奴気づいてやがる

空気読んで黙っててくれてるけどな」

「霊夢」

「クリスタルは？」

「魔理沙」

「まだ」

「うつつ」

「…なるほど」

うつつ木の影から手を出して指を数回折った

「魔理沙」

「やめろ！」

「バレる！」

「うつつ」

「衣玖さんから伝達

黄色は任せて

私からは

魔理沙の特攻が合図」

「魔理沙」

「つまり？」

「うつつ」

「地のクリスタルが回収され次第攻撃開始」

「魔理沙」

「ご都合主義としか言い様がないタイミングで

地のクリスタルが来たぜ」

「うつつ」

「ちよつと待って」

合図を衣玖に出した

「衣玖」

「…総領嬢様もう少し左へ」

「天子」

「ん？」

「魔理沙」

「元気かー？」

「雷精霊と風精霊」

「風精霊」

「死ね」

精霊天災

鎌鼬

真空の刃で魔理沙を切りつけるも

傷一つつけられない

「魔理沙」

「悪いな

私は光／魔属性だから風属性攻撃は効かない

それでもってコイツのおかげで雷属性攻撃も効かない」

「風精霊」

「…地のアトリビュートクリスタル

まさか!?!」

「魔理沙」

「残念ながら全ての影じゃあないぜ」

「衣玖」

「風精霊様、またのお越しをお待ちしております」

スペルカード

魚符「龍魚ドリル」

「魔理沙」

「必殺！地属性マスパ!! 名付けて」

スペル

恋落「グラウンドスパーク」

それぞれが同時に相手を仕留めた

—Darkness Side—

—霧の湖—

「ルーミア」

「チルノ!!」

「長年の戦いに決着をつけよう

「幸いお互い最大限の力を出して戦えるしね」

「氷精霊」

「… チルノでは無い、氷精霊だ
いくら管理者だからってふざけすぎ」

—Darkness Side—

—霧の湖—

「ルーミア」

「チルノ!!」

「長年の戦いに決着をつけよう

幸いお互い最大限の力を出して戦えるしね」

「氷精霊」

「… チルノでは無い、氷精霊だ

いくら管理者だからってふざけすぎ」

「闇精霊」

「一体どんな戦いを…」

「ルーミア」

「駄菓子屋でお菓子をかけたジャンケンとか

しりとり勝負やら色々」

「闇精霊」

「意外と幼稚…」

チルノが大量の冷気を放ち

湖を凍らせてゆく

「ルーミア」

「凍らすの表面だけにしてよね？」

「ここの魚なかなか美味しいんだから」

「氷精霊」

「そんな事は知らん」

「ルーミア」

「1回食べてみ？」

「氷精霊」

「断る

「そんな事より上を見て死ね」

精霊天災

氷彗星

直径数十メートルの巨大な氷塊が降ってきた

「ルーミア」

「… 美味しそうね」

「闇精霊」

「はいどうぞ」

手渡されたのはイチゴ味のかき氷シロップのボトル

「氷精霊」

「え？」

ルーミアは手のひらから小さな闇の球体を発生させると

それはたちまち大きくなり

氷塊とシロップのボトルを飲み込んだ

「ルーミア」

「ごちそうさま」

まだ早いけど、かき氷は美味しいわね」

「氷精霊」

「チッ！」

精霊天災

絶対温度

音すらも凍てつく極寒の冷気をルーミアに浴びせる

「ルーミア」

「クーラーにしては寒いわね」

再び闇の球体を発生させる

球体は小さく縮んでゆき、重力が発生する

「ルーミア」

「高密度故に重力が発生し自らを縮め続ける恒星の亡骸

ブラックホール

その重力からは光すら逃げられない」

冷気やら湖の氷や水を吸い上げながら

氷精霊の元へ近づいてゆく

「ルーミア」

「安心なさい」

吸い込まれれば時間が止まり苦しまずに済むから」

ブラックホールから逃げようと飛行するが徐々に

吸い寄せられ始めた

「氷精霊」

「… 所詮は精霊、管理者に叶うわけがないって事ね…」

氷精霊は重力の渦に飲み込まれた

—Phantasm Side—

—天界—

「うつつ」

「ご迷惑お掛けしました」

「衣玖」

「いえいえ、

倒さなければいけない気がしたものですから

あと総領様のお仕置に邪魔だったもので

それでは行きますよ！総領様！」

「天子」

「ブー」

衣玖に引きずられながら天子は帰って行った

「魔理沙」

「ルナクのやつ今頃どこまで行ってるのかね」

「霊夢」

「残りは… 氷, 岩, 鋼, 然, 光

恐らく然精霊は大妖精、氷精霊はチルノ

光精霊は光の傍でしょうね」

「魔理沙」

「お！岩っぽいのが来たぞ」

「霊夢」

「それなら次は… 大妖精の所に行きましょうか」

「うつつ」

「一体何処に居るんでしょうね」

「魔理沙」

「雰囲氣的に魔法の森かな？」

「??」

「いやここに居ますよ？」

「霊夢&魔理沙&うつつ」

「え？」

木の上に桃をかじる女性がいた

「魔理沙」

「いつから？」

「??」

「貴女達が合図を送ってる時より前」

「霊夢」

「名前は？」

「??」

「然精霊って呼ばれてる」

「うつつ」

「然精霊と大精霊は別物なんですか…」

「然精霊」

「全くのね、

それより降参していい？」

「うつつ」

「降参ですか…」

「然精霊」

「だって毒のクリスタル持ってるんでしょ？」

かないっこないって」

「霊夢」

「じゃあ自分を殺してくれって言ってるの？」

お祓い棒を喉元に付ける

「然精霊」

「そうなるね」

「魔理沙」

「無抵抗な奴をやるのはちよつと気が引けるな！…」

—Opposite Side—

—「地底」橋の上—

「鋼精霊」

「我が鋼の如く頑丈な肉体を
いとも容易く貫くとは…」

鎧を纏った女性が倒れた

「ルナク」

「うっし！」

鋼精霊撃破、残るは… 氷と然と光と大妖精」

ポケットから小石の様な通信機を取り出し

うつつと連絡をとる

「うつつ／通信」

「すみません

然精霊が降参して来たのですがどうすれば良いですか？

倒すのは少々気が引けます！」

「ルナク」

「あ…」

じゃあ共に行動してくれ

次の目的地の霧の湖で集合しよう」

通信を切ると隠れていた橋姫が出てきた

「パルスィ」

「私が苦戦した相手を仕留めるとは… 妬ましいわね」

「ルナク」

「騒がしくてすまなかつたな、橋姫

それじゃ」

地上へと向かった

「パルスィ」

「… あ！

もしかして全ての影かしら

「なんであのお方が？」

—「幻想郷」霧の湖—

「ルーミア」

「お！きたきた」

「闇精霊」

「遅いぞ!!」

「影精霊」

「まあまあ、そんなに急かさなくてもいいじゃん」

「ルナク」

「あれ？チルノは？」

あたりを見渡すが、いる気配が無い

「ルーミア」

「はい」

「ルナク」

「仕留めたのか… ってなんか赤いの付いてるんだけど」

「ルーミア」

「かき氷シロップ（イチゴ味）」

「ルナク」

「えー…」（ω、；）

「うつつ」

「ルナク様！」

「ルナク」

「おかえり… そのロープでぐるぐる巻になってるのが
然精霊って事で良いのかな？」

「然精霊」

「んん」

口に布を巻かれている様だ

「魔理沙」

「残りは光精霊と大妖精だけか？」

「ルナク」

「ああ、チルノはかき氷になってルーミアに食われた
… え？大妖精？」

「魔理沙」

「大妖精と然精霊は別物って」

「うつつ」

「ルナ ク様…」

うつつが倒れた

「魔理沙」

「うつつ!!」

うつつの背中に大きな尖った石が刺さり

そこから大量の血が流れ出した

「霊夢」

「この出血量はやばいわね」

「ルナク」

「やばい… やばいやばいやばい！」

「魔理沙」

「どうしたんだ？」

「残基があれば自然死や病死以外なら」

「ルナク」

「ダメだ」

うつつは俺が500年前位に犯した罪によって

自然治癒系以外の復活，回復処置が効かないんだよ」

石を抜き、

緑のクリスタルでうつつの自然治癒力を増加させる

「魔理沙」

「誰がこんな事… まさか！」

魔理沙が横に回避すると尖った石が

さつきまでいた場所を通過した

「然精霊」

「ああ…」

もう少しで厄介者も消せるたというのに
けれども敵の参謀を無力化出来た

まあ30点って所かな？」

後ろに尖った石を持った然精霊の姿があった

「魔理沙」

「いつの間に縄を…」

「ルナク」

「そいつは然精霊じゃない！

全精霊の親玉の大精霊だ」

然精霊の羽が大きくなり、

姿が見慣れたモノに変化した

「大精霊」

「良く考えて見なさいな

然属性とは妖精や精霊、自然そのものの属性

妖精属性をまとめる精霊と言ったら

私しかないでしょう」

「魔理沙」

「つまりお前は精霊や妖精の持つ然属性に

お前自身の特色の然属性が合わさったモノなわけだな」

「ルナク」

「然属性は毒属性と鋼属性に弱い

神属性を無効化する神キラー」

「魔理沙」

「つまりは

然のW属性のお前は

毒と鋼属性にめちやくちや弱いという事だ」

青紫と薄灰色のクリスタルを輝かせながら

魔理沙とルナクは戦闘態勢に入る

「大精霊」

「無駄なことを…」

「これで無意味になる」

妖精防御

毒／炎シールド

「魔理沙」

「うっ…」

「ルナク」

「無駄なことをしているのはお前かな？」

ルナクは全てのクリスタルを出して対応する

「大精霊」

「バカなの？」

全自然系属性を操る私に適う訳が無い」

「魔理沙」

「じゃあ… 勝てないって事か？」

魔理沙が絶望し、膝を地につけた

「ルナク」

「…」

「大精霊」

「それじゃあ…」

「ルナク」

「なあ

霊夢、魔理沙

俺が前に属性を説明した時

何属性が有るって言った？」

「魔理沙」

「確か…」

無炎水雷樹氷闘毒地風魔幻虫岩霊神鋼然闇光影

の21種類って」

「霊夢」

「よく覚えてるわね…」

「ルナク」

「最近研究してたらさ、見つけちゃったんだよ
第22と第23の属性」

―霧の湖―

「ルナク」

「最近研究してたらさ、見つけちゃったんだよ

第22と第23の属性」

「大精霊」

「は!？」

「そんなのある訳ないじゃない」

「ルナク」

「正確には見つけたと言うより

作り出した方かな？」

「魔理沙」

「それが何になるんだ？」

「ルナク」

「まあ聞けばわかるさ」

「まず名前は

第22属性が「根」

第23属性が「創」

それぞれ

自然界に存在する根源の自然系属性

自然界に存在しない何かによって作られた創作属性

相性的にお互いに攻撃優位で防御劣位

根属性は

闘魔幻霊神属性に優位で

創属性は

炎水雷樹氷毒地風虫岩鋼然闇光影属性に優位

簡単に言うと

根属性は根属性を除く非自然系と創属性に強く

創属性は自然系属性と根属性に強い

お互いに無属性とは対等

因みに根属性と創属性は非自然系属性だから
根精霊はいない」

「霊夢」

「長い」

「ルナク」

「そもでもってアトリビュートクリスタルは
銀色と銅色で出来そう」

「魔理沙」

「無いのか今は」

「と言うか絶対金色出るだろ」

「根と創属性混ぜたやつか全部混ぜたの」

「ルナク」

「…」

「という訳で今から創属性のクリスタル作るから
時間稼ぎお願いします」

「だいたい1分ぐらい」

「大精霊」

「私攻略に関係あるのかしら？」

「霊夢」

「自然系のシールドしか貼れないあんたには
自然系特攻が効くって事よ」

「大精霊」

「させるかー！ー！ー！！！！」

「ルナク」

「うつつの回復はまだかかりそうだから」

「樹のクリスタルは使えない」

「作れるのは創属性のクリスタルだけか… しょうがない」

「赤橙，赤紫，ピンク，薄灰色，金色のクリスタルに」

「高压の源力を送り込み、」

「出てくる各属性エネルギーを混ぜて」

更に源力を使って結晶化させる

少しずつ銅色の結晶が成長してゆき

ほかのクリスタルと同じサイズになった

「ルナク」

「出来た」

「霊夢」

「遅い！」

「魔理沙」

「危うく死ぬところだったぞ!!」

湖の周りにクレーターが幾つか出来ていた

「ルナク」

「では早速」

創のクリスタルに魔力を流し込み

変換されたエネルギーを取り込む

「ルナク」

「自然界に在らざる創の精霊よ

全ての影の名をもって命ずる

我が源力の一部で肉体を創り、現界せよ」

創のクリスタルにエネルギーを流し込むと

眩い光と共に1人の羽の生えた男性が姿を表した

「創精霊」

「…」

「影精霊」

「おお…」

「闇精霊」

「イケメンだ…」

「創精霊」

「我が主よ

「汝が示す敵は何処だ」

「霊夢」

「なんか闇精霊惚れてない？」

「ルーミア」

「同族の男が居ないとタイプだったんじゃない？」

「ルナク」

「我が敵は自然の大精霊なり」

「創精霊」

「…なるほど」

ではその大妖精とやら

貴様の命を貰い受けよう」

「大精霊」

「上級精霊が最上級精霊の私に楯突くの？」

返り討ちにしてやるわ」

不意打ちで放った高火力の火炎弾を顔面にぶち込んだ

創精霊は吹き飛ばされ紅魔館の塀にぶつかつた

「創精霊」

「…痛い」

「大精霊」

「全然痛そうに見えないわね」

「創精霊」

「属性による軽減が有るが

痛いものは痛いのだ」

「大精霊」

「じゃあ火力で攻めればいつかは倒れるのね」

炎岩精霊天災

メテオストライク

落下してきた隕石の衝撃で紅魔館の1/4が吹き飛んだ

「創精霊」

「さらに痛いぞ」

「大精霊」

「無駄に頑丈ね」

「魔理沙」

「隕石くらつても立ってるとか…」

「霊夢」

「ルナク、鼻血が出てるわよ？」

「ルナク」

「じゃあアイツは首の骨でも折れてるな」

「ルーミア」

「どういう事？」

「創精霊」

「…首が… まあいい」

「それでは我からも攻撃するでしょう」

魔精霊災害

魔力暴走

手のひらに安定化の対策をせずに魔力を集める

少しするとそれがぱちぱちと火花を散らすようになる

「創精霊」

「効き目こそ普通だが防げぬ以上

有効な攻撃手段と言えよう」

魔力の玉を投げつけると大爆発を起こした

「ルナク」

「右腕が…」

右腕全体に火傷や傷が出来た

「ルーミア」

「なんでリンクしてんのよ!？」

「ルナク」

「俺が精霊を使役すると

ダメージの半分が俺にも来るんだよ

かといって精霊の被ダメージが半減する訳でもない」

「ルーミア」

「精霊召喚失敗してるんじゃない？」

「ルナク」

「合ってるはずなんだがな」

「大精霊」

「暴走攻撃するなんて馬鹿なのかしら？」

「創精霊」

「貴様の腕を1本無力化出来ただけでも吉報だ」

「大精霊」

「あんたは腕1本吹き飛んでるじゃない」

「創精霊」

「こちらには合計3本の腕が残っておる故

例え我が倒れようとも本命が無事ならそれで良い」

「大精霊」

「じゃあ雑魚は黙ってなさい」

全身に弾幕を打ち込む

「ルナク」

「ぐあー!!!」

「ルーミア」

「待つだけ無駄じゃない？」

—霧の湖—

「ルナク」

「うつつの状態は？」

「霊夢」

「怪我は治ったけど貧血状態って所じゃない？」

「ルナク」

「じゃあ行ってくる」

「何かあったら言ってくれ」

「うつつから樹のクリスタルを回収し

創精霊の元へと急いだ」

「大精霊」

「もう終わり？」

「創精霊」

「…フツ」

「精霊王が降臨された…」

「大精霊」

「は？」

「そんなのいるわけが無いじゃない」

「??？」

「こんにちは、自然の大精霊」

「後ろに誰がいる」

「??？」

「精霊王は言い過ぎだと思っただけ」

「全ての精霊の力を持つ俺は2人の大精霊の上の存在」

「高温の炎を周りに放つ」

「??？」

「これで引き離したつもり？」

「振り返ると青い結界に包まれた女性の姿があった」

「大精霊」

「誰だ」

「??」

「そうだなー…」

摂理を権力でねじ曲げた精霊王にして最悪の罪人

「ギル」

とでも呼んでくれ」

「大精霊」

「ではギル、早速だが」

炎精霊能力

サンフレア

「ギル」

ラストワードスペル

核熱「テラケルビン」

お互いに放った炎の龍が衝突し

大精霊は自分の放った炎ごと

ギルの放った炎に飲み込まれた

「大精霊」

「シールドが無かったら負けてたわ…」

水属性の結界で攻撃を防いだ

「ギル」

「創精霊、お疲れ様」

創精霊は光の粒となってクリスタルを残して消滅した

「ギル」

「さて、きりをつけよう」

どこからともなく現れたダガーを鞘から抜く

「ギル」

「この技を使うのは500年ぶりかな？」

ダガーで使うのは初めてだけだ」

ダガーに魔力を込めると不思議な文様が現れた

「ギル」

「創属性付与

闇に願いを月に祈りを」

ダガーを担いだ槍のように構えると

闇と影が混じった赤黒い槍の矢じりになった

「ギル」

「復習の時来たり

我が敵に闇と月の裁きを」

スペル

恨祈「プリエール デ ヴェンジエンス」

「大精霊」

精霊防御

全属性シールド

放たれた槍はシールドを突き破り

大精霊の胸に大きな風穴を開けた

「魔理沙」

「全精霊攻略完了」

「ルナク」

「お疲れ様

これで影と闇精霊以外の精霊は消滅するはずだ」

「影精霊」

「じゃあ私達はどうすればいい？」

「ルナク」

「また宴会の時に呼ぶよ」

「ルーミア」

「じゃあね

ヤミちゃん」

「闇精霊」

「ヤミちゃんだと!？」

「貴様ー私を…なめ…やがってー」(?▽?)
照れながら光の粒になって消滅した

「ルナク」

「それじゃあまた

我が2人目の師にして体の一部、シヤナよ」

「影精霊」

「それじゃあ宴会でね、ミラ」

ルナクの影に入ると赤い粒が発生し
ルナクにすいこまれていった

「ルーミア」

「…ねえ

あの槍ってゲイボルグ?」

「ルナク」

「違う

そんな凄いのじゃない

グングニルでもない

タダの魔力で作った槍さ」

「魔理沙」

「じゃあそのダガーはなんなんだ?」

「ルナク」

「これは昔友達に作って貰った採集兼戦闘用のダガー
魔力を込めると浮き上がる文様は

マナスチールって言う魔法合金を使ってるから

あとマナクリスタルを埋め込める様になってるから
魔力が切れても少しなら魔法も使える」

「魔理沙」

「マナスチール?」

マナクリスタル?」

「ルナク」
「…時は残酷だな」

第15話

精霊討伐

終了

<光サイド>

「光精霊」

「ごめんなさい」

光精霊が光の粒となって消滅した

「光」

「大精霊がやられたか、

話し相手が…。」

<闇サイド>

—霧の湖—

「ルナク」

「残すは光のみか」

「霊夢」

「ギルって言ってたけどあんたの本名は

ルナク・トワイダウンで良いのよね？」

「ルナク」

「ああ、ギルは今作った偽名だ」

「魔理沙」

「じゃあルナは？」

「ルナク」

「前の名前」

「ルーミア」

「とりあえず

うつつちちゃんをどこかに避難させないとね」

「ルナク」

「じゃあスキマ組の休憩のために

スキマの中に一旦いるつもりだったから

ついでに運んでくわ」

影の触手でうつつを包み

スキマの中に入っていった

「ルーミア」

「一旦休憩しようか」

―「スキマの中」―

「ルナク」

「お疲れー」

「紫」

「はあ、はあ、

一旦休憩…」

結界維持をしていた4人が倒れ込んだ

「正邪」

「もう無理…」

「針妙丸」

「腕が…ちぎれる…」

「隠岐奈」

「何回死を覚悟した事か…」

「ルナク」

「よっこらせ、

じゃあ回復しまーす」

うつつを置き

魔，神，幻のクリスタルでそれぞれを回復させる

「紫」

「生き返るわー…」

「正邪」

「チビも大きくなったし、ちよつとは安心できるな」

「隠岐奈」

「久しいのう、ルナクよ

会うのはこれで2回目かな？」

「ルナク」

「いやいや、もっと会ってるでしょ」

〔正邪〕

(妖怪賢者が3人：： 外の世界を征服できそう)

〔ルナク〕

「休憩がてら

外の世界に妖怪の存在を取り戻す計画

の話をしようか」

〔正邪〕

(まじか！)

〔紫〕

「知らないわよそんな作戦」

〔正邪〕

「…」

〔紫〕

「… 反乱分子発見」

〔正邪〕

「ままま待ってくれ!!」

「誤解だ!」

〔紫〕

「は？」

何あんたが反応してんのよ

ルナクの事言ってるの」

〔ルナク〕

「… 地下房への片道切符あげようか？」

〔紫〕

「あなたにはシベリアへの片道切符でいいかしら？」

〔ルナク〕

「別に良いけど…」

とりあえず今は休んどけよ？

下手すればあ光とルーミアの2人が本気で暴れたら

結界を守るだけだと幻想郷が滅ぶぞ？」

「正邪」

「内側も守らなきゃ行かんのか!？」

「ルナク」

「そりやそうだ」

いくら丈夫な金庫でも中に爆弾入ってたら

お札は全部灰になるだろ？」

「隠岐奈」

「確かに」

「ルナク」

「という訳で戦闘がエスカレートしたら流れ弾の相殺をします

それに伴ってスキマや鏡の中から出る可能性があるから

そのつもりで」

「紫&正邪&針妙丸&隠岐奈」

「…」 (⊠—⊠)

「紫」

「踊り子達呼んできて、藍と橙も呼ぶから」

第16話 フラッシュバック

―見覚えのある場所―

「うつつ」

「…ねえ

#####って国の言葉で#の事を#####って言うの
そこから取って名前は#####ってのはどうかなあ？」

「オッドアイの少女」

「…いいと思いマス

気に入りますタ」

―何処かの大きな家―

「紫の目をした夫人」

「#####…

洒落た事するわね

あとは#####の花…え!？」

―何処かの広い地下室―

「オッドアイの少女」

「何度飛ばしたら気が済むの?」

「うつつ」

「しようがないじゃない

それが私の魔法なんだから

#####が戻って来なくなるまで続ける気よ?」

「オッドアイの少女」

「しようがない!」

さっさと決めよう!!」

―何処かの役所の壁の外?―

「うつつ」

「全員の紙とロープを取って

早く！」

―町だった瓦礫から離れた場所―

「オッドアイの少女」

「早く!!」

「紫髪の青年」

「#####!!」

頼む!!辞めてくれ!!!!!!」

―町だったものから数百メートル離れた野原―

「オッドアイの少女」

「#####!!」

しっかりしろ!

#####に一緒に行くんだろ!!

#####!!!!!!」

―何処かの川原―

「うつつ」

「は?!?!?!」

気づくと霧のかかった川原に居た

生き物の音が全くせず、

陽気な鼻歌が時々聞こえるのと

ちよつと離れたところで水子の霊が

楽しそうに石を積んでいる

「うつつ」

「ここは…今の…夢?」

「小町」

「まだ若いのに…残念だったね

人生を1番謳歌してそんな年齢で死ぬのは

確かキミは…新しい妖怪賢者の式神の…えーつと

ゆうつちちゃんか」

「うつつ」

「うつつです」

貴女がここに居るといふ事は此岸ですか
つまり私は死んだのですね…」

「小町」

「…!!」

アンタちよつとまっててくれ」

死神は、急いで船に戻り漕ぎ出した

「うつつ」

「私に乗せずに… そういえば6文持ってたかな？」

「小町」

「おまたー」

乗せ忘れに気づいてすぐに帰って来たと思つたら
閻魔様を乗せて帰ってきた

「映姫」

「ご苦労様、すぐに戻ります」

「うつつ」

「普通私が向こうに行きませんか？」

「映姫」

「貴女は少し特殊なのです」

夜羽うつつ、ここに来て思い出したでしょう

500年程前の出来事を」

記憶を探るも、一切思い出せない

「うつつ」

「… 全然思い出せません」

「映姫」

「おかしいですね、死んでいるのなら思い出せ…!?

小町！」

「小町」

「ハイハイなんでしょ」

「映姫」

「この人死んでませんか?」

「小町」

「え!？」

「あたりを静寂が包んだ

「うつつ」

「よかった…」

「映姫」

「すみませんでした

「この死神がよく見なかったせいでこんな事に」

「うつつ」

「いえいえ、安心しました

「6文持ってなかったので」

「小町」

「よかった、ってのはそっちの意味かい!」

「映姫」

「ところでここに来るまでに何か見ましたか?」

「うつつ」

「そういえば何か他の人の記憶の断片の様な…」

「夢のような…」

「映姫」

「その中で出てきた人の名前を覚えていますか?」

「うつつ」

「いえ、名前らしき所全てがノイズが入った様に

「聞き取れませんでした」

「映姫」

「ならばよろしい、元の場所にお戻りなさい」

— 「スキマの中」 —

「正邪」

「針妙丸の妖力対策も頼む

「このままじゃ糖尿病まっしぐらだ」

目が覚めるとスキマの中に寝かされていた

「ルナク」

「そうだなー…クリスタルは貸せないし…
魔力を貯められるペンダントあげるわ

あとは大きい状態になれば振るのも簡単になるだろ」

「針妙丸」

「起きたよー！」

一斉に私の方に振り向いた

「ルナク」

「痛いところは無いか？」

「うつつ」

「強いて言うならものすごくお腹が減ってます」

「ルナク」

「自然治癒力をはね上げれば

傷を治すためにエネルギーを使う

そう考えれば普通か…」

待ってる、何か持ってくる」

「うつつ」

「料理は勘弁してください！

ロクな事にならないので」

「ルナク」

「ん？なんでだ？」

「正邪」

「美味しいじゃんかルナクの作る飯は」

「うつつ」

「…そう言われれば確かに

なんでだろう、不意に塩やオリーブオイルを

山ほどかけてしまう気がして」

「ルナク」

「…そんなわけないだろ？」

最終話 少女休憩中…

―「スキマの中」―

〔紫〕

「え？そんなに美味しいの？」

〔正邪〕

「特にちやーはんが美味しい」

〔うつつ〕

「月末に冷蔵庫を片付けるのに便利な料理ですよね」

〔ルナク〕

「卵がたくさん余れば天津チャーハン

初めて出した次の月は卵料理が減るという自体も起きた」

〔紫〕

「じゅるり…」

〔ルナク〕

「じゃあこの戦いに勝ったら一緒に食おうぜ」

〔正邪〕

（…唐突に言っではいけないセリフを!?)

〔ルナク〕

「うつつ！」

見様見真似「マスタースパーク」

いきなりうつつに向かってマスパを撃った

〔うつつ〕

〔!?!〕

#####

マスパの進行方向からうつつが消えた

〔正邪〕

「な!?!」

〔紫〕

「これは…」

「うつつ」

「あービックリした！」

いきなりどうしたんですか！

当たったらどうするんですか!？」

うつつはルナクの後ろにいた

「ルナク」

「今どうやって避けた？」

「うつつ」

「そりや… あれ？」

「今どうやって…」

「隠岐奈」

「魔法陣が一瞬見えた

つまりこれは」

「紫」

「転移魔法」

「ルナク」

「なるほど、そういえばうつつって魔法使えたっけ？」

「うつつ」

「使えますが

薪や炭に火をつける着火魔法位しか」

「ルナク」

「なるほどなるほど

分かった」

「うつつ」

「何がですか？」

「ルナク」

「お前さつき三途の川に行ったらろ」

「うつつ」

「… そういえば行きましたね

6文持って無かったですけど

まあそもそも渡らずに済みました」

「ルナク」

「そこで変な夢を見ただろ？」

「うつつ」

「はい、殆ど覚えて無いですけど」

「閻魔様からそれについて質問も受けました」

「ルナク」

「その質問、

答えようによっては死んでたぞ？」

「うつつ」

「え？」

「ルナク」

「理由は詳しく教えられない

だがさつきから度々起きる変な事はそれ絡みの事象だ」

ルナクは黄緑色と青紫色のオッドアイの少女に変化した

「ルナク」

「この姿に見覚えは？」

「うつつ」

「…！」

三途の川で見た夢にいました！

その見た目の人物が！」

「ルナク」

「…協力ありがとう」

ルナクは紫の色違いに変身した

「ルナク」

「早速だが霊夢達の方へ行ってくれ

次の目標はこの異変の元凶

全ての光である者だ」

「うつつ」

「了解です

では行ってきます」

うつつはルナクが開けたスキマを潜って

霊夢達の元へ行った

—「幻想郷」霧の湖—

「うつつ」

「という訳で竹林に向かいます」

「霊夢」

「遂に元凶ね」

「あん時の仕返ししてやるわ!!」

「魔理沙」

「ルナクは流れ弾の処理か」

「なら周りを気にせず戦えるぜ!」

「うつつ」

「多分光精霊は消滅したと思いますが
警戒しておいて下さい」

あとは・・・ 霊夢は光／霊、魔理沙は光／魔
相性的には多分大丈夫ですね」

「魔理沙」

「相手は光属性だろ？」

「なら効くのは樹，闇，影，創属性かな？」

「うつつ」

「羽が生えていたら光／光属性になります
さらに重要なことがあって」

光，ルーミア，ルナクの3人への神属性攻撃は無効

光はルーミア以外からの闇属性攻撃

ルーミアは光以外からの光属性攻撃

これらの場合ダメージは増加ではなく低下します」

「魔理沙」

「じゃあ効果的な属性はなんなんだ？」

「霊夢」

「樹，影属性攻撃」

「魔理沙」

「詰んだ

霊夢が」

「霊夢」

「え？」

「なんで積んでるの？」

「私の攻撃は樹か影属性を纏ってるのが当たり前でしょ？」

「魔理沙」

「ずりい」

「うつつ」

「残念ながら光は光属性攻撃を吸収出来ませよ？」

「霊夢」

「属性変換：風／闇

攻撃属性付与：闇

攻撃属性除去：光」

「魔理沙」

「めちやくちやずるい」

「うつつ」

「魔理沙も出来ますよ？」

「魔理沙」

「どうやって？」

「うつつ」

「操作する属性のクリスタル、今回は岩でお願いします

これに妖力，魔力，神力，霊力，源力

のいずれかを注ぎ込んでください」

「魔理沙」

「次は？」

「うつつ」

「クリスタル内でそれらが

属性エネルギーに変換されます

それを取り込んで下さい」

「魔理沙」

「取り込んだ」

「うつつ」

「ちなみにこのエネルギーで

岩属性攻撃をすると威力が上がり

他の属性での攻撃には岩属性が付与されます

今回はそのエネルギーを右手に移して」

「魔理沙」

「移して？」

「うつつ」

「霊夢にパンチ」

魔理沙は霊夢の頬を叩いた

「霊夢」

「痛った！」

「うつつ」

「効果はバツグンだ」

「霊夢」

スperl

夢想封印

「魔理沙&うつつ」

「わあああつつつつつ

!!!!!!!」

第4章 陰と陽
第1話 補給

—霧の湖—

「うつつ」

「で、どうします?..」

「魔理沙」

「一旦神社に行って補給しよう
それでいいか? 閻巫女霊夢」

「霊夢」

「良いわよ」

「そろそろお腹空いたしね」

「うつつ」

「今は... 7時ですね」

「霊夢」

「ずっと夜だから時間感覚くるってるわ」

「魔理沙」

「じゃあ晩御飯もよろしく」

「閻巫女霊夢」

「霊夢」

「あんた晩御飯抜きね」

「うつつ」

「まあまあ落ち着いて下さいよ、閻巫女霊夢さん」

「霊夢」

「あんたも抜き」

—博麗神社跡地—

「霊夢」

「... どうしようか」

「うつつ」

「鏡の中で良いんじゃないですか？」

「そこなら神社残ってますし」

「魔理沙」

「入れるんか？」

「うつつ」

「無理」

「でも梅干しのツボと鍋なら」

「瓦礫からツボと凹んだ鍋を引っ張り出す」

「魔理沙」

「米びつあつたぞ！」

「水は井戸が残ってるし」

「うつつ」

「じゃあ作りますか」

「凹んだ鍋を直し」

「瓦礫の木で蓋と薪を調達し米を炊く」

「魔理沙」

「コンロなら八卦炉で代替出来るのに」

「うつつ」

「魔力温存」

「魔理沙」

「無限魔力供給を受けてる」

「うつつ」

「ルナクの魔力を消耗してる」

「魔理沙」

「あいつの魔力は無尽蔵だ」

「うつつ」

「…」

「霊夢」

「確かにそっちの方が楽そうね」

「うつつ」

「…完全に忘れてた」

―スキマの中―

「正邪」

「固い」

「ルナク」

「携帯食料だが中々いけるだろ？」

「紫」

「干し肉じゃないの」

「ルナク」

「しよっぱくて旨い」

「針妙丸」

「甘いのはしよっぱい…」

「他の味が欲しい…」

「隠岐奈」

「よく糖尿病にならないな」

「ルナク」

「今後は飴じゃない魔力そのものの結晶にしようか」

「針妙丸」

「何味？」

「ルナク」

「食べない」

「持ってるだけ」

―博麗神社跡地―

「霊夢」

「そういえばルーミアどこ行った？」

「うつつ」

「家で暴食してるらしいです」

「なんかあの姿だと食欲が暴走してしようがない」

「って言っていました」

「魔理沙」

「そういえばルーミアの闇の触手と
ルナクの影の触手って

何が違うか分かるか？」

「うつつ」

「はつきり言って違いはわかりません

発生源が本人かクリスタルの力か位しか」

「魔理沙」

「影って闇じゃ無いのか？」

「霊夢」

「確かにそうよね

光源との間に物体があった時に映る闇が影」

「うつつ」

「だったら影属性や影精霊って居ないはずですし」

「魔理沙」

「でも自然系属性なんだろう？」

「うつつ」

「そうですね…」

相性的には

樹鬨神光闇に強く

無属性には為す術なく木っ端微塵にされる

そんな属性ですね」

「霊夢」

「光と闇に強い…」

両方の力を持つと言う訳？」

「うつつ」

「どうなんでしょうね

そこの所は私にもわかりません」

第2話 侵食の闇

―ルーミアの家―

「ルナク」

「食べるねー」

食卓には大量の空き皿が積まれていた

「ルーミア」

「私は闇よ？」

侵食と破壊のを受け持つ管理者」

「ルナク」

「つまりこれは食べてるのではなく侵食してると」

「ルーミア」

「そういう事じゃ無いの」

またひとつ大皿を空にした

「ルーミア」

「あんたは食べないの？」

「ルナク」

「干し肉食べた

というか」

「ルーミア&ルナク」

「食事はいらない

食べるという行為は娯楽」

ルナクの言葉にルーミアが被せた

「ルーミア」

「何時何処全てを楽しみなさい

今というこの瞬間を

シャボン玉の様に生まれては死んでゆく友と共に」

「ルナク」

「侵食と破壊の管理者の言葉とは思えないな」

「ルーミア」

「破壊によって作られるモノもあるし

創造によって破壊されるモノもあるこの世界
破壊も創造も同じようなものよ」

「ルナク」

「じゃ俺は何なんだ？」

破壊と創造の輪廻に乗せられなかった俺は」

「ルーミア」

「… 何だ、まだ気づいてないんだ」

「ルナク」

「均衡と調和の管理者だろ？」

「ルーミア」

「もうすぐ役目が来ると思うわよ？」

「ルナク」

「昼と夜の調和を取れってか？」

「ルーミア」

「知らないわ」

「ルナク」

「そろそろ行く」

ルナクは席を立ち、反転郷へのゲートを開いた

「ルーミア」

「… あんたさ」

「ルナク」

「何だ？」

「ルーミア」

「よく見たら生まれた時と違って

気配とか存在感が強くなってるわね

管理者としての力も薄いし

しかも魔力も切れかかっている」

「ルナク」

「このリボンのせいじゃ無いのか？」

ルナクは腕に2本リボンを巻いて5歳ぐらいに幼児化する事で
博麗大結界への影響を最小限に抑えている

「ルーミア」

「関係ない」

「ルナク」

「…他の奴らには言うなよ?」

源力を魔力に変換して不足を補う

「ルーミア」

「源力の残りは?」

「ルナク」

「霊、魔、妖、神力を3回全回復

ざっとマスパ3兆回分

数値換算で… 60兆」

「ルーミア」

「単位は?」

「ルナク」

「外の世界のゲームからとってMPかな?」

「ルーミア」

「却下」

「ルナク」

「聞いたいてなんだよ…」

「というより今はそんなことどうでもいい

そっういえばルーミアって

宝具的な神器的な武器ってあるのか?

レミアアやフランのグングニル、レーヴァテインみたいな」

「ルーミア」

「あるよ」

「名前の概念は無いけどね」

「そっう言うとルーミアは闇を圧縮して

十字型の剣を作り出した

「ルーミア」

「確か光は弓だったかな?」

「ルナク」

「俺のは？」

「ルーミア」

「知らない」

「使った事あるでしょ？……」

「無いんだ……」

「ルナク」

「そもそも存在自体今知った」

「ルーミア」

「……教えるから手出して」

「えーっと……闇……じゃない影……はクリスタルだし……あれ？」

「ルナク」

「影でいいんじゃないか？」

「全ての影なんだし」

「ルーミア」

「……面白そうだからやっぱ自分でやって」

「ルナク」

「はあ!？」

第3話 対面

<光サイド>

「光」

「…暇」

<主人公組サイド>

―博麗神社跡地―

「ルナク」

「なあ、光と闇の中間って何だ？」

「魔理沙」

「無いだろ、っていうかやけに幼いな」

「ルナク」

「ルーミアの頭に付いてた

封印の御札と同じものを2枚付けてる」

「うつつ」

「御札は触れるんですか？」

「ルナク」

「知ってるだろ？」

それは御札の効果じゃない

重ねがけされてるだけ」

「霊夢」

「じゃあ今度こそ戦闘開始ね」

「ルナク」

「後でルーミアも行くからよろしくー」

そういうとルナクは魔法で作った鏡の中に入っていった

「魔理沙」

「…妖怪賢者3人って全員異空間を住処にしてるよな」

「うつつ」

「…全員手下持ってますよね
ルナク以外…」

「霊夢」

「天邪鬼とおまけの小人も手下みたいなものじゃない」

「うつつ」

「…確かに」

「魔理沙」

「さて、行きます… どうした？ 霊夢？」

「霊夢」

「…!?」

「やばい…」

「行くわよ!!」

— 迷いの竹林 —

「光」

「遅かったね、危うく撃っちゃうところだったよ」

「光の右手には小さな光の玉が浮いている」

「魔理沙」

「あれは魔法じゃないな」

「魔力を感じない」

「でも何か感じる気が…」

「うつつ」

「あれは源力ですので」

「それにしても博麗の巫女の感は恐ろしいですね」

「危うく博麗大結界が砕けるところでした」

「魔理沙」

「え？」

「あのビー玉サイズの光球がか？」

「光」

「お前は… 対の式神か」

「うつつ」

「正確には使い魔に契約だけの式を付けてるだけです」

「光」

「契約？」

「うつつ」

「源力行使及び大体の妖術の行使と

莫大な知識，能力の強化を受ける代償に
仕えるというものです

正直式神っぽくは無いと思いますね」

「光」

「へー」

「うつつ」

「知ってどうするんですか？」

「光」

「どれぐらい自由度が高いか確認したくてね
想像以上に自由だな」

「うつつ」

「他の式神はタダの方程式ですからね」

「光」

「すごい使役者は自我を残すがな」

「うつつ」

「いい主に巡り会えました」

「光」

「そういうえばなんの為に対はお前っ」

「ルーミア」

「…話が長い！」

闇で作った鎌で光の首を切り落とした

「光」

「びっくりしたなー」

切り口から光が溢れ出し頭を再生させた

「ルーミア」

「いい加減やめなさい」

「光」

「やだ」

「ルーミア」

「なんで？」

「光」

「暇だから」

鎌を剣に変形させて構える

「光」

「やる気？」

光を集めて弓を作り出す

「ルーミア&光」

「我は全ての闇にして侵食と破壊の管理者」

「我は全ての光にして繁栄と創造の管理者」

「その名において光を飲み込む」

「その名において闇を照らす」

「魔理沙」

「今の宣言いるか？」

「霊夢」

「分からない」

第4話 光と闇の正面衝突

―迷いの竹林―

光が文字通り光速で動き回り光の矢で攻撃を仕掛ける
それをルーミアが闇の剣で撃ち落としてゆく

「魔理沙」

「光ばっかで訳が解らん」

「うつつ」

「ライトがいいんじゃない?」

「霊夢」

「カタカナでいいんじゃない?」

「うつつ」

「そんな事よりとりあえず援護...」

「魔理沙」

「出来そうか?」

「うつつ」

「無理そう」

「魔理沙」

「しようがないなあ」

「この魔理沙様の有志をとくと見よ!!」

スペルカード

恋符「マシンガンスパーク」

属性を変換したマspaを乱射する

「光」

「お... 中々の魔力量だな」

動きを止めこちらに飛んでくる

「うつつ」

「かかった!!」

スペル

危険物「ガトリングロケットランチャー改」

ガトリングのようなロケランを取り出し乱射した

「魔理沙」

スペル

ルナク直伝「20 bullets / Second」

計20個の結晶から1秒に1回ずつそれぞれずらして

チャージした弾を打ち出した

「霊夢」

ショット

「ホーミングアミュレット」

球数の多いスペルをやショットで攻めてゆく

「ルーミア」

管理技法

破壊の手

弾を防ぐヒカリに向かって

エネルギーを纏った右手を当てようと高速で飛び込む

しかしカンタンに避けられてしまった

「霊夢&魔理沙&ルーミア&うつつ」

「あ…」

ルーミアの右手にうつつのロケランが触れた瞬間に

それが粉塵と化した

「うつつ」

「死ぬかと思った…」

「ルーミア」

「ごめん!!!」

「光」

「貫った!!」

「覚悟!!!」

至近距離で矢を放つ

矢はルーミアの背中に当たり

反射して帰ってきた

「光」

「な!？」

「ルナク」

「光は反射しちゃえばOK」

ルミアの背中に現れた鏡にルナクが映っていた

「ルミア」

「ナイス！」

「ルナク」

「さあ仕返しn」

鏡を殴って割った

「光」

「もつと本気でこいや!!!」

「ルミア」

「逆ギレ!？」

「ルナク」

「違わないか？」

「ルミア」

「わかったわよ！」

本気出せばいいんでしょ!!」

リボンを完全に消滅させ能力を全開放する

「ルミア」

「闇と光どっちが上かはつきりさせましょ！」

不気味な形の羽が生えた

「ルナク」

「落ち着け、地球が死ぬ」

「光」

「ふははははは!!」

いいねえ、それだよそれ!!」

ヒカリも輝く鳥の様な黄金の翼を生やす

「ルミア」

管理技法

破壊黒点 「ブラックホール」

「光」

管理技法

創造白点 「ホワイトホール」

それぞれの手のひらに

あらゆる物質全てを吸い込む黒い玉と

あらゆる物質全てを生み出す白い玉が現れる

それぞれがお互いに干渉しあい、間の空間が歪み出す

「ルーミア&光」

「行くぞ！」

「ルナク」

「行くなポケナス!!!」

第5話 妖怪の反撃

―迷いの竹林―

「ルナク」

「行くなポケナス!!!」

「ルーミア&光」

（・・・・・）？

魔法で作った浮いてる鏡からルナクが横槍を入れる

「ルナク」

「ブラックホールとホワイトホールぶつけたら

どうなると思ってるんだ!？」

対消滅でエグい量のエネルギーが溢れ出すんだぞ!？」

知らないのか!! 一円玉1枚ずつの反物質と物質の対消滅で

原爆（リトルボーイ）2・9倍のエネルギーが出るんだぞ!？」

（ニコニコ大百科調べ）

「光」

「知るか!!」

ホワイトホールをルーミアに投げつける

ルーミアは護身のためにブラックホールを

ホワイトホールに向かって投げつける

「ルナク」

「アホか!!」

2つの玉が衝突する前にそれぞれを鷲掴みする

体が右手から吸収されながら左手から生成される

「ルナク」

スペル

虚空断裂 「無之世界」

本来相手の攻撃をルナクが生まれた無の場所に飛ばす技を

自分に使ってブラックホールとホワイトホールを

この世界から離す

「光」

「誰だ今のロリ」

「ルーミア」

「対よ」

「光」

「へー… 体を持ったのか」

時空の裂け目が修復されて消滅する

「ルーミア」

「今は小さくなってるだけで実際は普通の大きさよ」

「光」

「身長180か」

「ルーミア」

「高身長のアんたをベースにしてどうするのよ」

スperl

「無身の仏」

「光」

技

「暗殺」

ヒカりはひかの矢をルーミアの後ろに生成し撃ち抜き
ルーミアは闇でヒカリの体を飲み込む

「うつつ」

「不死身と不死身の殺し合いって終わるんですかね」

「霊夢」

「輝夜と妹紅を見てください」

「うつつ」

「…」

「??」

「「おおおおお!!!」」

妖怪の山から雄叫びと共に大量の天狗たちが乗り込んできた

「大天狗」

「目標!あの酔っ払い男!!」

烏天狗はあいつを死んでも撃ち落とせ!!」
それぞれが全速力で近づいてゆくため
烏天狗の群れが縦長になってゆく

「文」

「幻想郷最速の烏天狗

射命丸文

いざー!!!」

先頭にいた文がヒカりに飛び込む

「光」

「これが最速?」

笑わせてくれるな」

一瞬で光の剣を創り出し

文を切り裂く

「烏天狗」

「怯むな!!!」

文は最期[!]の力で光にまわりつき

武器を使わせないようにする

他の烏天狗は別の場所に掴まったり

仲間に掴まったりしてヒカりを地面に落とす

「大天狗」

「警戒天狗たち!!」

地面に落ちると同時に烏天狗達が弾けるように退き

無数の白狼天狗が襲いかかる

「ルーミア」

「やめなさい!!!」

最初の刃がヒカりに当たろうとした瞬間

「光」

「鬱陶しい」

技

エネルギーブラスト

自分のいる場所に膨大な量のエネルギーを創造し爆発させた

白狼天狗たちは瞬く間に消滅してしまった

「光」

「妖怪が横槍入れんな」

ヒカリは起き上がり

右手に光球を生成する

「光」

「確か妖怪はこの結界のお陰で

存在できるんだよな？」

「霊夢」

「…は!？」

そいつを止めて!!!」

ヒカリは光球を空に投げた

「ルーミア」

「させるか!!!」

ルーミアは光球をキャッチしようとしたが

触れた手が綿飴に水を垂らした様に消滅する

「ルナク」

「ふざけんな!!!」

鏡から博麗大結界にヒビが入る爆音と共に

普通サイズのルナクが飛び出して結界を背に光球を掴んだ

しかし徐々に押され始めて博麗大結界に近づき始める

「光」

「無駄」

ヒカリは追尾生の有る弾を数十発ルナクに食らわせる

弾を受ける度にルナクの体が抉れてゆく

「光」

「トドメだ」

ルナクを光の極太レーザーで撃ち抜いた

光球そのままレーザーと共に上昇してゆき

結界に達した

第6話 幻想の崩壊

―迷いの竹林―

光球はレーザーと共に上昇してゆき

結界に達した

眩い閃光と爆風、爆音が空から響き渡る

〔霊夢〕

「結界が！」

閃光収まると博麗大結界に大きなヒビと穴が空いており
穴が崩れながら大きくなってゆく

〔うつつ〕

「烏天狗の皆さんが……」

ちりじりに逃げた天狗たちが1/4ほど透け始めた

〔霊夢〕

「紫と連絡がつかない」

―スキマの中―

〔ルナク〕

「大丈夫……か？」

体を修復しながらスキマの中に入ると

結界を維持していたはずの

紫、正邪、針妙丸、隠岐奈が気絶していた

〔ルナク〕

「しっかりしろ！」

博麗大結界が崩壊し始めてるぞ！」

いくら声をかけても起き上がる気配がない

〔ルナク〕

（結界が砕け散った訳じゃない穴が空いてるだけ

一応効果は残ってる訳で

……穴？

… 行けるか？

— 迷いの竹林 —

「ルーミア」

「あんななんて事を!!」

「光」

「だって邪魔だもん

この結界がなくなれば妖怪は消えるんだろ？」

「ルーミア」

「だからって」

「ルナク」

「幻想郷にとってお前が一番邪魔」

ヒカリの後ろに陣取る

「光」

「あん時のロリか」

「ルナク」

「我が名はルナク・トワイダウン

幻想郷の妖怪賢者にして均衡と調和を守りし者」

「光」

「… ちょっと待て

対が2人？」

「魔理沙」

「私は力を借りてるだけだぜ？」

「光」

「… やつと理解した

で、妖怪賢者とやら

確か我々管理者が幻想郷に3人居ると

結界が砕けるんだろ？」

「ルナク」

「そこは大丈夫

もう穴空いてるから」

「光」

「ああそうかい

言っとくが植物の名前じゃないぞ！」

創造的破壊

落星群「メテオストライク」

地球の重力が届くギリギリの高さに大量の隕石を生成する

「ルナク」

スペル

結界「ミラーシールド」

リボンを外し鏡の結界を張る

「光」

「バカめ」

空に無数の隕石が見え始めた時に気づいた

それらが自分に向けられてない事に

「光」

「妖怪賢者つてのは幻想郷を守る妖怪なんだろう？

じゃあそれを守れなかった時の屈辱は

見ものだろうなー」

無数の隕石が地面にぶつかり

爆音が鳴り響く

と思いきや隕石が破壊したり

方向を180度変えたり

停止したりしだした

「ルナク」

「残念

幻想郷舐めんな」

各地の強者達によって隕石群が無効化された

「光」

「それなら受け止めた奴らをどうにかしようか」

管理技法

神性集合命令（光）

幻想郷中から無数の神が光の元に集められてゆく

「加奈子」

「幾ら全ての光の命令でもこれは受けられない！」

「隠岐奈」

「…はっ！」

「…はっ！」

「早苗」

「私も神判定ですか!？」

集まったはいいが神々は光への攻撃を開始する

「ルーミア」

「今のうちに!」

管理技法

神性集合命令（闇）

先程の集合がかからなかった神々が集まる

「光」

「バカ! あっちだよ敵は!!」

「お空」

「私たちは幻想郷の敵を倒す!

…あれ?

私って神様だったっけ?」

第7話 神合戦

―迷いの竹林―

「光」

「だからお前らの敵はぼへえ!!」

「隠岐奈」

「黙れ侵略者!」

ヒカリは自らが集めた神にリンチされている

「ルーミア」

「ルナク、あんたもなんか出しなさいよ」

一旦地上に降りて作戦を考える

「ルナク」

「そんな事言われても俺に仕える神なんか居ないし…
精霊ならいる」

「ルーミア」

「あつちに利用されるだけじゃない」

「ルナク」

「精霊を弄れば行けるんじゃない?」

「霊夢」

「妖精は純粋な自然のエネルギーの結晶体」

「うつつ」

「そんなのを混ぜたら肉体を維持できないのでは?」

「ルーミア」

「なんか会話に入ってきた」

「魔理沙」

「最近影薄いから

そんな事よりもし精霊混ぜるんなら闇混ぜれば
ルーミアの管轄になるんじゃないのか?」

「うつつ」

「出来たららの話ですけどね」

「光」

管理技法

神性操作「行動停止」

さつきまで響いていた攻撃音が止まった

「光」

管理技法

神性操作「標的指定」

神性操作「条件提示」

神性操作「攻撃命令」

ヒカリを攻撃していた神達全員が
ルーミア達5人に襲いかかった

「霊夢」

「早苗！あんた何やって」

「早苗」

「… 標的ヲ発見、直チニ殲滅ヲ開始」

霊夢に大きく振りかぶった拳を叩きつける

紙一重で交わされた拳は竹をへし折り、地面とぶつかる

そこで鈍い音と共に血が飛び散った

「早苗」

「… 右手破損、行動可能ナタメ攻撃ヲ続行」

再び拳を振り上げて叩きつける

避けられて地面にぶつかる

同じ事を繰り返す度に腕が無残な姿へと変わってゆく

「早苗」

「… 右腕肘ヨリ先ノ損失ヲ確認、行動可能ナタメ続行」

「霊夢」

「早苗!!」

いい加減目を覚ましなさい!!」

スペル

「博麗式お祓い」

霊夢がお祓い棒を降ると輝く粉塵が発生し早苗を包んだ

「早苗」

「…は！

私は何を… キャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

腕を抑えてうずくまる

「早苗」

「腕が…… なんで…… !?」

痛い…… あああああ……」

「霊夢」

「ヒカリに操られてたせいで

自分の怪我を無視して攻撃させられてたのよ

幸いな事に貴女は人間だったから正気に戻せたけど」

空中では狂わされた大量神と少数の神が戦っている

「魔理沙」

「なんとか巻けたか…… つて早苗！

その腕!!」

「霊夢」

「話は後

ルナクは?」

「ルナク」

「ここだ!!」

スペル

衝撃 「インパクトフィールド」

特殊な衝撃波で狂った神達のみを吹き飛ばす

「ルナク」

スペル

「絶縁結界」

霊夢，魔理沙，早苗，ルナクの4人を結界の中に隔離する

「ルナク」

「とりあえず回復だな」

緑色の結晶に魔力を流し込み帰ってくるエネルギーを
早苗の傷に流し込む

「早苗」

「ああ… 痛みが和らいで…？」

なんか伸びてませんか？腕

やっぱ伸びてる!!」

順番に腕が再生し元通りに戻った

「ルナク」

「さてと、援軍作るから時間稼ぎ頼む

怪我したら戻ってこい

いいな？」

返事を聞かずに結界を解除した

第8話 妖精錬成

―迷いの竹林―

絶縁結界が解除されると

周りには動けなくなつた神達が転がっていた

「静葉」

「敵、排除…」

「穰子」

「排除…」

「魔理沙」

「こいつら早苗よりカタコトだな」

「早苗」

「酷い怪我…」

「うつつ」

「いたいた

皆さん！陽動を開始して下さい

時間は5分程ぐへえ!!」

頭と足を飛び蹴りされて強制的に側転させられた

「うつつ」

「弾幕を使用する神は今の所いないので

距離を取らないといたたたたたた!!!

関節!!決まってるって!!」

「魔理沙」

「じゃあいつてきまーす」

ラストワードスペル

彗星「ブレイジングスター」

竹を蹴散らかしながらどこかに向かって行った

「うつつ」

スペル

突符「バードストライク」

魔理沙程派手では無いが

捕まらない為に速度を出して逃げ惑う

「霊夢」

「… 私は護衛かな？」

「ルナク」

「さて、始めますか」

精霊、現在は力が弱まり妖精になっっているが
縄文弥生時代の日本では神以上の勢力を持っていた
その体は純粹な自然エネルギー結晶体で
死ぬと辺りの対応する自然から復活する
もし生きている精霊に他の自然エネルギーを混ぜた場合
相性が悪いと肉体が崩壊し良い場合はエネルギーを弾く
それなら結晶化中に混ぜれば良いのでは？

一か八かで行動に移す

まず闇、影、然属性以外の自然系属性の結晶に
魔力を流し込み帰ってくるエネルギーを
それぞれ一点に集中させる

エネルギーの玉が出来るとその中で妖精が成長を始めた
ここで闇エネルギーを供給するエネルギーに混ぜる

一部の妖精が拒絶反応を起こすが無視して続ける

「ルナク」

「なんか非人道的な実験してる気分だな…」

並行してリーダーとなる闇妖精の生成を開始する

闇エネルギーの玉に然エネルギーを追加する

影エネルギーの玉はそのまま放置する

暫くエネルギー供給をしていると

闇エネルギーを混ぜた妖精の体に変化が起きる
いつもの姿に黒い文様が浮き出始めたのだ

「影精霊」

「… おやすみ」

「ルナク」

「起きなさい」

普通に生成した影妖精が先に誕生した

「影妖精」

「お菓子ちようだい！」

「ルナク」

「後でな」

他の妖精達が次々誕生してゆく

そして最後に闇妖精が生まれた

「ルナク」

「OK、後は精霊化するだけだけど…」

ハーフサイズの闇の結晶を複製してそれぞれの結晶と共に

妖精に持たせる

「チルノ」

「…なにこれ」

「炎妖精」

「さあ？」

「ルナク」

「えーっと…」

精霊王の力を与えられし闇妖精よ

今力を取り戻し、精霊となれ」

オリジナルの闇結晶と然結晶を持った闇妖精に源力を注ぐと

変異が始まった

それに釣られるように変異が他の精霊に連鎖してゆく

「影精霊」

「また用？」

「闇精霊」

「何これ!?何これ!?!」

妖精の改造に成功した

「ルナク」

「えー… 精霊諸君

ルーミアが上にいるのでそちらに行くように

では行動開始！」

「ルーミア」

「こちら側の神は殆ど残ってないか…ん？」

下から13人の精霊達が上昇して来たので慌てて構えた

「闇精霊」

「ルーミア！」

「ルーミア」

「これは？」

「闇精霊」

「詳しい事はこの手紙を」

貰った手紙に目を通す

「ルーミア」

「OK、理解した

じゃあ闇バーサークフェアリに堕ちし精霊出動!!」

「精霊達」

「バーサーク!？」

第9話 精霊たちに闇を込めて

―迷いの竹林―

「ルナク」

「… 光精霊は闇とうまい具合に融合出来なかったか
まあしようがない… までよ？」

作つたの俺だからダメーじ来るんじゃない？」

「ルーミア」

「バーサークフェアリーって書いてあるもん
説明書に」

「闇精霊」

「何がバーサークだ」

「光精霊」

「うーうーあああーうーうー!!!」

「ルーミア」

「… 妖精の生成時に闇エネルギーを混ぜて
それをアトリビュートクリスタルで精霊化させたもの
だつてさ

因みに闇精霊は精霊王と混ぜてあるらしい
だからアンタにはクリスタル2個入ってるみたい」

「闇精霊」

「通りで力が満ち満ちている訳か… 痛い!!」
光精霊が闇精霊のスネに噛み付いた

「ルーミア」

「やっぱバーサークフェアリーじゃん
というわけで、

目標は闇サイドの神の援護及び光サイドの神の討伐
はいGO!!」

精霊達はちりじりになって攻撃を開始した

「光」

「数は圧倒的にこちらが有利

勝ち確だな…ん？」

居ないはずの精霊が暴れている

「光」

「しようがない…」

管理技法

精霊操作「コマンド行動停止ステイ」

精霊達はまだ暴れている

「光」

「…ルーミアの管轄か!？」

でもなぜ」

1人の精霊が近づいて来た

「光」

「あれは光精霊か

よく来…」

「光精霊」

「ぐあああああああ!!!」

一直線に光の腕を噛みちぎった

「光」

「お前!!」

反対の腕に噛み付いた光精霊を振り払うと

泥人形のように崩れた

「光」

「脆いのか…」

残骸から2つ結晶が浮き上がると

黒い結晶が砕け散り、白い結晶が来た方に戻って行った

「ルナク」

「… 光精霊ダウン」

飛んできた白い結晶を回収する

「ルナク」

ラストワードスペル

「フェアリーラストワード」

「1段目、光」

「闇精霊」

「光精霊脱落！」

「ルーミア」

「相手の勢力は？」

「闇精霊」

「残り7／10… ん？」

竹林の1箇所から白い人魂の様なものが連続的に現れ
ランダムな光勢力に飛んでゆきダメージを与えている

「闇精霊」

「岩精霊脱落！」

茶色の人魂が追加された

「ルーミア」

「死んでも戦力は減らないってこと？
なら最初っからやって欲しかったな」

「ルナク」

「地精霊ダウン」

3段目起動」

死んだ精霊が結晶と同時に遺す魂の様なものを
結晶に入れずに纏わせ行使する
つまりは精霊の怨念の様な攻撃
遺言という意味のラストワード
これを最初っから使えたらとつくに使ってた

「闇精霊」

「鋼精霊ダウン」

敵残り1／2こちらは10／13」

「ルーミア」

「13人？14人じゃないの？」

「闇精霊」

「影精霊がいません… 虫精霊，毒精霊ダウン」

「ルーミア」

「単独行動か、それともルナクのところかな？」

「光」

「もう半分か…」

「??」

「みたいだね」

「光」

「勝てると思うか？」

「??」

「わかんない」

「光」

「…誰？」

いつの間にか少女が隣で浮きながらポテチを食べていた

「??」

「私はシヤナ」

「光」

「敵か味方か」

「シヤナ」

「中立」

光陣営でも闇陣営でもない」

「光」

「何しに来た」

「シヤナ」

「暇そうだったから

あと、」

「光」

「なんだ？」

「シヤナ」

「私は幻想郷陣営だからね

幻想郷を殺す人は光でも闇でもちよつと許せないな」

スキル

「ポータブル絶縁結界」

ポテチの袋から御札を取り出して使用する

すると半径3メートルの球状の結界が張られた

「シヤナ」

「これで神々への命令は出来ない」

「光」

「・・・その様だな」

数発弾幕を当てても割れる気配がない

「シヤナ」

「私は影精霊

全ての影である者専属の精霊

・・・ そういえばさつき中立って言ったけど

貴方は幻想郷を殺そうとした

つまり私は貴方の敵よ」

「光」

「ほう・・・ 全ての対では無く全ての影と言ったか

なるほど・・・ まだ安心だな

ところでポテチって美味しいのか？」

「影精霊」

「・・・ 美味しいよ

因みにこれはコンソメだよ」

「光」

「… つまみに良いな」
瓢箪の酒を呑んだ

第10話 神合戦終結

―迷いの竹林―

「闇精霊」

「…残り5人

敵は1／6」

「ルーミア」

「然属性は神属性に強いけど
数には適わないか」

「闇精霊」

「… 敵陣営の神の行動停止を確認
全員正気に戻ってます」

「ルーミア」

「え!？」

「ルナク」

「影精霊に絶縁結界を張らせた
今のうちに力を解放しておけ
あれが割れた時に最終決戦は始まる」
ゆつくりと後ろに浮上してきた

「ルーミア」

「影精霊がねえ…」

「ところでアンタは力を解放しないの？」

「ルナク」

「してもアンタら程にはなれないんだよ
事情があつてな」

「うつつ」

「戻りました」

「霊夢」

「一段落、」

「魔理沙」

「急に相手が正気に戻ったからびっくりしたぜ」

ルーミアはリボンを完全に消滅させて力を引き出した
同じくルナクも腕のリボンを外す

「ルナク」

「テストス

えー、準備OK、至急結界を解除されたし」

「ルーミア」

「絶縁結界なのに電波は届くのね」

「ルナク」

「魔力だけ通すから魔力通信で指示をした

電波では無い」

「光」

「それって絶縁って言えるか？」

「全員」

「…」

「ルナク」

「次元の絶縁わすれてたー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「ル！！ミア」

「あほ！！！！」

ルナクは鏡の結界で辺りに被害が出ないようにし

ルーミアとヒカリはそれぞれ闇と光の剣を作り出し

接近戦を始める

「シヤナ」

「ちよつと！

アイツ四次元空間に入って逃げただけど？」

「ルナク」

「次元超越対策してなかった

ごめん！」

ルーミアとヒカリの剣がぶつかり合う度に

衝撃波が生まれる

「うつつ」

「光と闇の対消滅… ルナク様！」

「ルナク」

スペル

鏡球「リフレクトボール」

2人を結界でも包み

衝撃波をその中に留まらせる

「光」

「鬱陶しい!!」

剣を薙ぎ払い結界を切り裂いた

「ルナク」

「ああああ!!!もう!!!」

こうなれば短期決戦だ!!」

スペルカード

恨祈「プリエール デ ヴェンジエンス」

怒り棟諸々込めた槍をヒカりに打ち込む

しかしまた薙ぎ払われる

「ルナク」

「アイツルーミアと戦ってるのに簡単に弾きやがった…

なら最終手段!!」

スペル

「陰陽魔力絶縁結界」

「うつつ」

「太陽と月の魔力を絶縁し

魔力状態を擬似的に日食にする技ですね

制限時間は2分だったはずです」

「魔理沙」

「超えるとどうなるんだ?」

「うつつ」

「暴走します

フランドールみたいに」

「霊夢」

「幻想郷が終わるじゃない!!」

ルナクはヒカ리를ルーミアと挟む様に陣取り
攻撃を仕掛ける

「光」

「命知らずが来たと思ったたらお前か」

剣を振りかぶると

一瞬で距離を詰められた

「ルナク」

「!？」

「光」

「死ね」

胸にヒカリの手が突き刺さった

「ヒカリ」

「心臓はっけーん

お前確か死ぬんだよな？

心臓潰せば」

心臓を軽く握る

「ルナク」

「やめ…ろ…!」

「光」

「じゃあな

二度と来るな」

心臓を握りつぶし

むしり取る

ルナクは竹林に落下していった

第11話 回帰？

―迷いの竹林―

「うつつ」

「ルナク様!!」

落下地点に向かうと倒れているルナクを見つけた

「魔理沙」

「嘘だろおい！」

「うつつ」

「やっぱり無理ですよね

ルナクは今管理者としての血統を失っています
なのに管理者に立ち向かうなんて」

「霊夢」

「あんた正気!？」

「死んでるのよ？」

「うつつ」

「死んだだけじゃ無いですか

ほら、そんな事言ってる間に

後ろに幽霊が」

ばっ!と後ろを振り返ると

おぼけと言えはこのポーズ

という格好でルナクが立っていた

「ルナク」

「う… うらめしやー

って言うか人を勝手に殺すな

まあ死んだけどな

… 妖精舐めんな!!!」

「魔理沙」

「心配して損した」

「ルナク」

「冷たいなあ」(・ω・)

「うつつ」

「で、次の手は」

「ルナク」

「万策尽きた

詰み

無理ゲー」

「霊夢」

「は!？」

「ルナク」

「血統戻せれば行けると思うが…」

俺の師匠の転生体は何処にいるやら」

「うつつ」

「代償に血統を捧げると閻魔に宣言しちやったそうで」

「霊夢」

「代償？」

「うつつ」

「転生した後も一緒に過ごさせるように

阿求の様に転生し続けて欲しいと閻魔様に言ったところ

その負荷を減らすために条件を下げ

何らかの手段での意思疎通可能

記憶の保持無し

血統を代償にする

という契約らしく」

「魔理沙」

「探しようが無いな」

「うつつ」

「でも

ルナク様の近くで生まれる

生まれつき非種族的な能力持ち

という特徴が有るそうです」

「ルナク」

「能力持ちになる理由は俺の血統

即ち管理者の血統が少量入るからだ

大体は何かしらを扱いこなす系の能力になる

今の所、候補として上がってるのが

ありとあらゆる物を使いこなす うつつ

魔法を使いこなす 魔理沙

文字を読みこなす 小鈴

この3人で

共通点は能力と俺が幻想郷に来てから生まれた奴

他の候補は色んな理由で除外」

「魔理沙」

「私は努力で得た能力持ちなんだが」

「ルナク」

「…じゃあ除外」

「魔理沙」

「魔法ならパチュリーやアリスも」

「ルナク」

「パチュリーは親さんとは会ったことがあるが

生まれた時は国単位で離れていたし

アリスは魔界生まれで離れすぎ

ついでに白蓮やらもつと昔に生まれてる」

「魔理沙」

「というかこの前、過去の記憶一部戻るとか

昔の大罪かなんだと

何やらフラグが立ってるうつつで確定じゃね？」

「ルナク」

「…つまらん娘だな、霧雨さん」

「魔理沙」

「悪かったな

つまらない女で」

「霊夢」

「それで、戻し方は？」

「ルナク」

「血液の摂取」

「魔理沙」

「今やれ」

「ルナク」

「…鴉の血って不味いから余り舐めたくない」

「うつつ」

「…」（？）（？）

「ルナク」

「ハイハイやりますよ」

注射器と消毒液、ゴムチューブを創造して採血を始める

「魔理沙」

「…なんでお前が創造出来るんだ？」

「ルナク」

「最初に言つたらろ」

俺の能力は有と無を操る能力だつて

注射器の存在を無から有にしたんだよ」

うつつの腕に針を刺し

血を抜いてゆく

「うつつ」

「相変わらず注射は怖いですね」

「ルナク」

「そういえば昔から注射嫌いだったな」

流れ弾に当たる事無く採血を終えて

注射器から針を外す

「ルナク」

「やっ」

スキマから紅茶セットを取り出して

カップに血と紅茶を混ぜる

「魔理沙」

「そのスキマって紫のと繋がってるの？」

「ルナク」

「繋がってない

繋がられるけどね… 不味っ！」

「うつつ」

「何故か気にさわりますね…」

身体全体に鴉と地獄鴉の血統が駆け巡り

細胞一つ一つのDNAが組み直され

全身にゾワゾワした感覚が…

ゾワゾワと… あれ？

第12話 回帰

―迷いの竹林―

「うつつ」

「…」

鳥肌が… 私鳥ですけどね」

「ルナク」

「… おかしい

体は血統を取り戻した

けど馴染まない

力も変わらない…

なぜだ」

「うつつ」

「… この記憶は誰のだろう

見たことの無い町

霧状態のルナク様

知らない自分の姿…」

「ルナク」

「… 俺の師匠の記憶だな

まさか記憶まで来るとは思わなかったな」

「霊夢」

「勝てそう?」

「ルナク」

「無理」

「早苗」

「なら名前ですよ!」

外の世界で読んだ漫画に

名前で覚醒したキャラがいました!!」

「霊夢」

「早苗!?

さつきまで何処に」

「早苗」

「諏訪子様と神奈子様を探してまして

2人とも何処で倒れているのやら…。」

「ルナク」

「加奈子はあっち

諏訪子はそっちに居るぞ」

「早苗」

「ありがとうございます!!」

全て終わったら美味しいお酒を皆で飲みましょうね」

そういうと早苗は2人を回収しに走っていった

「魔理沙」

「…フラグ粉碎機無いか？」

「うつつ」

「旗折り機なら」

「魔理沙」

「機織りじゃなくて旗折り？

なぜに?」

「ルナク」

「真名解放

我が真名は全ての影である者

この名の元に

力よ、蘇れ!!」

しかし、何も起きなかった▼

「ルナク」

「うおおお!!なんでじゃー!!!」

「うつつ」

「ん？ルナは全ての対じゃなかった？」

「ルナク」

「あ… そういえばそうだった… ん？ルナ？… !？」

「お前！目の色!!」

うつつの目の色は普段は赤みがかった黒だが

今は黄緑色をしている

「魔理沙」

「まさかうつつの方が覚醒した!？」

「うつつ」

「うつつ？誰の事？」

「私？」

あと貴女達が言っているルナクってルナの事？」

「霊夢」

「呪いかしら？」

「お祓い棒えお構える」

「うつつ」

「… は!？」

「目の色が元に戻った」

「うつつ」

「気絶してた… にしては記憶が…」

「まさか私の第2人格!？」
アルターエゴ

「ルナク」

「お前の転生前の記憶と意識だな」

「霊夢」

「そんな事より早く戦いを終わらせなさいよ！」

「あの二人ますますエスカレートしてるわよ！」

「ルナク」

「よし、力戻った」

「霊夢」

「そんなふうに見えないけど？」

「ルナク」

「力が戻った感じはあるから大丈夫だ」

「うつつ」

「… 待ってください」

「ルナク」

「どうした？」

「うつつ」

「… 確か管理者の血を少し持つてるから

生まれつき能力を持つてる訳ですよね？」

「ルナク」

「だな」

「うつつ」

「血を返納した場合

私の道具を使う能力や使いこなす能力は

どうなったんでしようか」

「ルナク」

「…」

スキマからダーツの矢と的を取り出し

矢を3つうつつに持たせの持って数歩下がった

「ルナク」

「こい」

1 投目はルナクの足の小指に

2 投目はルナクの鼻に

3 投目は的の端っこに当たった

「ルナク」

「… 能力消えちゃってますね… 痛い」

「魔理沙」

「消えちやっただじゃねーよ！
戦力ガタ落ちじゃん!!」

第13話 チエツクメイト

―迷いの竹林―

「ルナク」

「落ち着け

取り敢えず今は」

スペル

能力付与「道具を扱う程度の能力」

うつつに元々の能力を付与する

それが式によって強化され元通りに戻った

「ルナク」

「後の事は終わったら考えよう

ちなみに俺が死ぬと解除されるから気をつける

復活したら戻るがな

じゃー！」

一直線でヒカリとルーミアの所に飛んでいった

「霊夢」

「…ごめん、お茶持ってない？」

「魔理沙」

「私もお願いするぜ」

「うつつ」

「確か…」

スキマを開き水筒を取り出す

「うつつ」

「はいどうぞ…なんですか？」

その「お前も使えるんかい」という目は

そりゃ使えますよ、藍さんと同じ式神ですから

と言うか前にも使いませんでしたっけ？」

「霊夢」

「式なら使えるってのはおかしいんじゃない？」

そんな事よりさらに暑くなってるじゃない？」

「魔理沙」

「夜が来ないのがこんなにきついとは…
ますます痛感したぜ」

「うつつ」

「無理そうなら夜サイドに行きましようか

多分寒くて倦怠感が来ますが日焼けしませんし… あ」

「魔理沙」

「日焼けは日焼け止め（八意製）使ってるから大丈夫」

「うつつ」

「…貸してください」

「霊夢」

「つけ忘れちゃったか」

「うつつ」

「はい…」

「ルナク」

「力復活!!」

妖^怪賢^者
第三勢力ルナク・トワイダウン

いざ参る!!!」

管理技法

全投影—対象：光

ヒカリの力、能力、姿全てを自分に投影し

相手と対になる力量を得た

「ルナク」

「これで勝てないが負けない

しかしこちらには味方がある

1対2なら勝てる！」

影で槍を作り出し構えた

ヒカリは相当な距離をとり

遥か遠くから狙撃を始めた

「ルーミア」

「力、戻ったのかしら?」

「ルナク」

「ようやくな」

矢を弾きながらヒカリの方へと飛んで行く

「ルナク」

「…追っても無駄な気しない?」

「ルーミア」

「確かに、あつちは光速移動するんだしね

でもアンタは光速移動できるんじゃない」

「ルナク」

「…出力は元に戻ったんだけど

光の能力使ってもリミッターかかって上手く扱えない」

「ルーミア」

「所詮は光と闇に作られた格下だからかしら?」

でも少なくとも私は私達を止めれる機能を付けた筈よ?

どうやるかは知らないけどね」

「ルナク」

「欠陥じゃね?」

「ルーミア」

「不満があるなら殺して二号機作っても良いわよ?」

「光」

「ケンカすんなや」

幾つもの光の筋が集まり、ヒカリの形にまとまった

「ルナク」

「かかった!!」

ルナクから影の触手が大量にのび

光をガツチリと絡めとって

地面に落とし固定した

「光」

「何故だ!!」

影はどこにも」

「ルナク」

「服のスキマは影で満たされてるぞ？」

「ルーミア」

「そして影は一種の闇でもある」

影の触手から闇の触手が生え嚴重にヒカ리를包んだ

「光」

「残念だったな！」

次元昇華

「ルナク」

「残念だったな！」

スペル

「ディメンショナルアンカー」

次元を超えて逃げようとするヒカ리의存在を

微妙に発光する透明な鎖でこの次元四次元に縛り付けた

「ルナク」

「チェックメイト

大人しく降参しろ」

第14話 慢心注意

―迷いの竹林―

「ルナク」

「チェックメイト

大人しく降参しろ」

「光」

「断ると言ったら?」

「ルナク」

「このリボンを増やすことになるな」

イモムシ見たいになってる光の髪にリボンを結び付け
触れられない様に封印する

ヒカリの体は縮んでゆき子供サイズになった

「ヒカリ」

「こんなリボン如き!!」

緩んだ触手の隙間からリボンを外そうと手を伸ばす
リボンに触れた瞬間にバチバチっという音がし
手に火傷をおった

「ルーミア」

「触ると火傷するよ?」

ルーミアはリボンを髪に結び

自ら子供サイズに戻った

「ルーミア」

「さてと、結界の修復よろしくね」

「光」

「元に戻せ!!」

「ルナク」

「…お前の顔なんかルーミア（子）に似てるな」

「光」

「そんな事どうでもいい

さっさとしろ!!」

「ルナク」

「やっぱリボン付けると精神年齢下がるんだな…
いつその事無垢な子供になった方が」

「光」

「それだけはやめてくれ」

「ルナク」

「そーなのかー」

…だが断る」

リボンの結びをキツくしようと手を伸ばす

「光」

「馬鹿め」

手から閃光を発しルナクの目を潰す

「ルナク」

「残念だが目潰しにならん…ぞう？」

閃光で視界が奪われている内に影の触手に溶け込まれた

「ルナク」

「くそ!!」

影で作ったナイフで触手を切り

服の中に入られないようにする

しかしその斬撃がヒカリのリボンに当たり

真っ二つに切れてしまった

「光」

「無様だなあ!!」

元の姿に戻った光が触手から出てきた

「光」

「影は一種の闇であり

一種の光でもあるんだよ!!」

全方向から光の矢が降り注いだ

「ルナク」

「ルーミア!!」

「ルーミア」

「ん?… って何やらかしてんのよ!!」

リボンを解こうと手を伸ばすと

ヒカリの矢が腕に刺さり動かせなくなった

「うつつ」

「神経を狙った攻撃…」

「魔理沙」

「存在空気の私達も加勢するぜ!!」

「霊夢」

ラストワードスペルカード

「夢想天生」

「ルナク」

「ストップ!!」

「光」

「無駄だ!!」

管理技法

創造的破壊空間

幻想郷の昼サイド全域の日光に特殊な効果を付与させた

「魔理沙」

「喰らえ!! マスタースパーク!!!」

… あれ?」

ミニ八卦炉の材質と全く同じ材質の結晶が

正面を覆っていて魔砲が撃てなくなっていた

「霊夢」

「御札も同じような事になってるわ」

「光」

「完成品におかしなものをつけければ

作品としての存在は破壊される

つまり作ることで壊す

人間である君たちはあとどれぐらいもつのかな?」

爪が目に見える速さで伸び

体も付け足すように大きくなってゆく

「うつつ」

「私ってクジャクでしたっけ」

いつもは服の中に隠している尾羽の羽が伸びてゆき

スカートから出ていたり

翼の羽が細長くなっていてまるで孔雀のようになっている

「ルーミア」

「夜サイドに逃げて！」

管理技法

破壊的創造空間

ルーミアも同じく夜サイドの月光に特殊な効果を付与させた

「ルナク」

「これは許せないな」

辺りの物体全てが成長し大きくなってゆく

「光」

「俺もガチで行かせてもらおう」

第15話 反復横跳び

—人間の里／外—

「魔理沙」

「髪が重い！」

「ルーミア」

「夜サイドにいれば治るから

でも居すぎると逆効果だからこまめに移動しなさいよ」

「そう言い残すと竹林へと戻っていった

「うつつ」

「知恵の輪で能力を確認していたのですが

ここに来るまでに3回能力が消えました」

「霊夢」

「つまりルナクが3回死んでは復活したと」

「魔理沙」

「なあ、なんか村が騒がしいぜ？」

—人間の里—

「慧音」

「お前達！これは一体」

「スカートと髪を引きずりながら慧音が走って来た

「うつつ」

「話すと長くなりますので対策方法をお教えします

日光に当たると万物が大きくなり

月光に当たると万物が小さくなります」

「魔理沙」

「つまりはいい感じになったら

昼サイドと夜サイドを反復横跳びすればいい」

「慧音」

「ありがとう！」

「里の皆さん!!夜側に！」

里の人達が混乱しながらも移動を始めた瞬間
竹林の上空に巨大な火球が2つ

爆音を轟かせながら発生し衝突した

これにより民衆が更に混乱してしまった

幸い、夜サイドと逆方向だったため

皆一斉に夜サイドへの移動が完了した

「うつつ」

「今の人で最後です」

「霊夢」

「私達も行くわよ！」

—人間の里／夜サイド—

「魔理沙」

「寒!!!」

丸一日日光が当たっていない夜サイドは
気温が氷点を下回っている

「うつつ」

「—10℃ですね」

気温差はおよそ55℃といった所でしょいか」

「霊夢」

「下手したらショック死するわね…。」

「慧音」

「たしかに服とか髪とか色々戻ってるな」

「うつつ」

「所でレミリアさん達大丈夫でしょいかね」

「魔理沙」

「なんとかしてるでしょ」

—迷いの竹林—

—少し前—

「ルナク」

ラストワードスペル

九頭龍「八岐大火龍」
ヤマタノオロチ

九つの炎の龍がヒカリ目掛けて突進してゆく

「光」

「熱線反射」

龍が持つ熱量全てを統合し撃ち返す

ルナクのからだはいとも容易く蒸発した

「ルナク」

スペル

精神鎮静「ppp」
ヒアニッシンモ

終焉歌「ラストファイナーレ」

相手の感情、行動力を大幅に下げ

聞くものを殺す呪いの曲を聞かせる

ヒカリは距離を詰め

高速の打撃を浴びせ肉片へと変えてゆく

「光」

「光は音より早いぞ」

「ルナク」

スペル

神弓「ミステイルテイン」

射出する物を硬くする弓を作り

影を凝固させて放つ

「光」

「なんの意味があつて

そう無駄な事をする」

「ルナク」

スペル

捕縛「キャプチャーテンタクル」

影の矢が枝分かかれし無数の触手になった

「ルナク」

ラストワードスペル

「ボイドレクイエム」

触手が光を包み込み込み虚空へと潜ってゆく

「光」

スキル

「闇祓い」

触手が浄化され跡形もなく消え去った

「光」

管理技法

「電位差拡大」

周りのモノとの電圧の差を広げる事で

全てのモノから雷がルナク目掛けて飛んでいった

「光」

「諦めな

たかが幻想郷だ無くても構わん」

「ルナク」

ラストワードスペル

「魔導焼却―Burst―」

全ての力を魔力に変換し体に溜め込んでゆく

数秒で肉体はその魔力量に耐えきれなくなり崩壊を始める

限界を迎えると肉体は壮大な爆発を発生させた

「光」

スキル

「熱エネルギー生成」

爆発的な熱量が火球を形成し

ルナクの爆発とぶつかり合った

第16話 異空

―迷いの竹林―

「光」

「諦めな

いい加減に」

「ルナク」

「諦めたらどうなる」

「光」

「さあな、飽きるまでやりたい放題するぐらいかな？」

「ルナク」

「魔理沙が居れば・・・」

「光」

「アイツらは来れないぞ？」

「無い物ねだりしても無駄だ」

「??」

「無い物ねだり？」

「馬鹿言え、今ここにあるだろ」

「振り返ると霊夢達がいた

「光」

「なぜ無事だ？」

「霊夢」

「知らないの？」

「私にこんなの効くわけないじゃない」

「ルナク」

「あ、察し」

「魔理沙」

「私は日焼け対策の日除け傘魔法」

「うつつ」

「日焼け止め（八意印）」

「光」

「もういい、星ごと死ね」

予備動作なしで口から超極太なレーザーを放った
しかしいきなり方向を変え
光を飲み込んだ

「正邪」

「ざまあwwww」

「紫」

「本当にいい気味ね」

スキマから2人が突如現れた

「光」

「何人来ようが無意味だ!!」

空を埋め尽くす量の光の矢を生成し発射する

「正邪」

反則アイテム

「四尺マジックボム」

大きな爆弾により矢が全てかき消された

「正邪」

「え？何この火力…」

「ルナク」

「威力100倍」

「正邪」

「お前のせいかな」

「光」

「うぜー!!」

全員が少し上に飛ばされた

「魔理沙」

「何事!？」

「うつつ」

「衝撃波で飛ばされた様ですね」

「ルナク」

「…っ!？」

「霊夢」

「どうしたの?」

「ルナク」

「魔理沙!!」

アイツを中心に東西南北上下

6方向の空間を割れ!!」

「魔理沙」

「あの色が反転した世界に行くやつか?」

「ルナク」

「それだ!」

「急げ!!」

魔理沙は一目散に飛んでいった

「正邪」

「何があつたんだよ」

「ルナク」

「地球の内側の圧力が異常なほど高まつてる」

「光」

「つまりはあと数分で地球が死ぬ」

「ルーミア」

「まるでポン菓子の様に弾けてね

… ポップコーンの方がわかりやすいかな…」

「ルナク」

「ルーミア、

魔理沙には球体になる様に

それぞれを結ぶ線上に追加で割れって頼んどいてくれ」

ルナクも飛んでいった

「ルーミア」

「割る?」

「魔理沙」

「ただいま… 聞いてたから行ってくる」

「紫」

「大変ね…」

「ところでルナクは何をする気？」

「正邪&うつつ」

「知らない」

「ルーミア」

「…あれは虚数空間と実数空間の壁を割ってる訳でしょ？」

「つまり虚数空間に飲み込もうって事？」

「割られた場所が徐々に増え

「どんどん包まれてゆく

「光」

「そんな事より先に地球が死ぬ筈だ」

「今度は地面が裂け隙間から溶岩が吹き出し始めた

「ルナク」

「さあ、下克上といこうか」

「2人が帰ってきた

「魔理沙」

「幻想郷を救うのは霧雨魔理沙様だ

「覚えてろー!!」

「並んだ間の空間を一緒に割った

「2人の力でヒビを通り越し大きな穴が空く

「ルナク」

「ここから先は虚空

「この世界と釣り合う天秤の反対側

「全ての次元の軸は負に向かい

「あらゆるが反転する世界

「第一象限の住人よ

「ようこそ、第三象限の世界に」

「全てのヒビが繋がり

「穴を中心に崩れてゆく

第17話 異空2

—「??」—

気がつくとも辺りの色が反転していた
何故か長く寝ていた様に感じる

「魔理沙」

「起きたかー？」

「霊夢ー？」

「霊夢」

「…ここが虚数空間」

「うつつ」

「…ふあ!!」

「霊夢」

「こつちも起きた見たいよ

というか立って、しかも浮いたまま寝てたのかしら？」

「魔理沙」

「霊夢もな」

3人は地に足をつけた

「うつつ」

「ルナクは… 居た

なんか私の格好してますね」

「霊夢」

「光の前に居る人でしょ？」

どう見ても私の格好してるじゃない」

「魔理沙」

「いやいや私でしょ

って言うか何故2人とも地面に立ってるのか」

「ルーミア」

「いやいや私には私に見える

つまりは、

なんだろ…。」

「魔理沙」

「分からののかい」

「ルナク」

「どうした？」

「光」

「何をした」

「ルナク」

「慢心してるうちに空間割って虚数空間に引き込んだ」

不意打ちでルナクの首を飛ばした

「ルナク」

「…」

首が滲んだインクのように空気に滲み

元あった場所で元に戻った

「光」

「虚数空間だから俺のテリトリーだと言いたいのか？」

「ルナク」

「そう言うこと」

有の場所に存在する無の場所

全ての裏側に密着している釣り合わす為の世界

普通の世界を第一象限とするとここは第三象限

次元が逆だ」

「光」

「説明ご苦労、じゃあ…」

「ルナク」

権限行使「全行動停止」

ルナク以外の全員が動けなくなる

「ルナク」

権限行使「会話許可」

「光」

「なんじゃそれ！」

俺らはそんな事できないぞ!!」

「ルーミア」

「こんな機能、つけた覚えがないのに…。」

「ルナク」

「俺を作った時、有の場所と無の場所に対して作るように命令したんだろ？」

「神に対する「神性操作」の様に」

「光」

「だからなんだ」

「ルナク」

「俺はその時アンタら管理者2人の対になる様に
均衡と調和を保つために」

また、抑止力になる様に作られたってことだ」

「ルーミア」

「スペックが自分の方が上だと」

「ルナク」

「条件付きでな」

でもまだリミッターがかかっている

どうやら今まで得てきた血統が邪魔らしい」

ルナクは注射器を取り出し血を抜いた

「ルナク」

「バックアップ完了」

「ルーミア」

「待って、それをやった事あるの!？」

「ルナク」

「ない、ここに来たのも2回目だし」

血統無しでの無の場所以外での現界すらした事ない」

「魔理沙」

「じゃあなんで分かるんだよ！」

「この事とか色々」

「ルナク」

「… 自分の怪我って場所見なくても分かるだろ？
そんな感じ」

「霊夢」

「つまりは「感」ってことね」

「ルナク」

「そーなのか… な…？」
首を傾げながら答えた

第18話 回帰

「ルナク」

「じゃあ今度こそ、逃がさんぞ」

ラストワードスペル

「消^{ゼロ}縁^{ヴォヤーシュ}回帰」

紅い煙がルナクから吹き出す

「ルナク」

「縁^{えにし}全てを無^え下に

向かうは航海の始点」

煙が光へと流れ、消滅してゆく

「ルナク」

「名も姿も形も

与えられたモノを捨て

無の存在へと回帰する」

姿が崩れ霧のようになってゆく

「影精霊」

「ぐへえ!!」

ルナクから吹き飛ばされるように飛ばされ

魔理沙にぶつかった

「魔理沙」

「動けないってのに… いたた」

「影精霊」

「ほんとだ… もう少しで魔理沙の下着が見え…」

上向きで倒れている影精霊と動けない魔理沙

「魔理沙」

「残念、ドロワだ」

魔理沙達からも紅い煙が出た

「魔理沙」

「… もう終わりか」

結晶が全て地面に落ちた

「霊夢」

「… 私も能力消えたっばい」

「うつつ」

「カー！！」

「霊夢」

「式神も」

「光」

「で、体もないのにどうする気だ」

「ルナク」

「…」

「光」

「口も無いか」

「ルナク」

「いや、準備してただけ」

権限行使「管理者：行動許可」

小さい時のルーミアの姿に変身する

「ルナク」

「神器(?) 解放」

姿がない形だけの短い何かを作った

「光」

「輪郭だけ見える短剣？」

「見ずらいだけだろ」

ルナクが短剣を上投げると一直線にヒカリへとんでゆく

「ルナク」

「短剣って投げたら飛ぶ？」

「光」

「クッ」

弓を取り出し矢で相殺を狙う

短剣が矢にぶつかるとそれをかき消してそのまま飛んでゆく

「光」

「は!？」

短剣はヒカリの右腕を切り落とし
ルナクの元へと帰っていった

「ルナク」

「名前どうしよう」

「光」

「知らん」

腕を再生させた

「ルナク」

「じゃあ…リッパ―は？」

「光」

「知らんと言ってるだろ！」

権限行使「精霊起動」

属性エネルギーを圧縮し精霊を創り出す

「光」

「クリスタル核なぞ作ればいい

いでよ、光精霊!!」

声に反応するかのようにエネルギーが精霊へと姿を変えた

「光精霊」

「はい、いか##たし#した？」

姿と声にノイズがかかっている

「ルナク」

「あらあら、光がない世界に呼び出すから…」

「光精霊」

「命令#、」

「光」

「ルナクを無力化しろ」

「光精霊」

「はい」

間合いを詰め光の剣で切り掛る

「ルナク」

権限行使「精霊：行動許可」

「シャナー！」

「影精霊」

「ほいきた!!」

影の触手で光精霊を絡めとった

「ルナク」

「大丈夫かー?」

「影精霊」

「あと2分#持ちそう」

そう微笑むと光精霊をクシャツと潰した

「ルナク」

「無理すんなよー

… ルーミア」

「ルーミア」

「はいはい」

「ルナク」

「拘束手段が無い」

「ルーミア」

「いやいや、今までのを聞くにいけそうじゃん」

「ルナク」

「しようがない、

さつきから意識奪われそうになってるから

それに身を委ねるしか…。」

「ルーミア」

「つまらない冗談はよして」

第19話 プラン変更

―「虚数空間」迷いの竹林?―

「光」

「精霊が使えないと...」

「ルナク」

「大人しく降参しろ!」

「お前は完全に包围されている!

田舎のお母さんも泣いてるぞ!」

「光」

「包围されてねーし!」

「あと管理者には親いねーよ!」

「ルナク」

「じゃあ降参して」

「光」

「じゃあつてなんだよ

日本語喋ろよ」

「ルナク」

「ところでなんで日本語話してんだ?」

「光」

「は?現地住民に合わせてるだけだ

だったらアラビア語で話したろうか?」

「ルナク」

「あ、優しさ」

「光」

「だって意思疎通出来ないとつまんないじゃん」

「ルナク」

「確かにね」

突如ヒカリが触手に囚われた

「影精霊」

「残念だっ#な!」

「ルナク」

「ナイス！」

リボン片手にヒカりに飛びつく

「ルナク」

「討ち取ったり!!」

リボンを腕に巻き付けようとした途端に爆発が起きた

「うつつ」

「カーーーー!!!」

「霊夢」

「うわっ!!」

「魔理沙」

「ぐへ!!」

ルナク達が吹き飛ばされ

霊夢と魔理沙にぶつかつた

「影精霊」

「い##... 魔#沙!##夫?」

「魔理沙」

「大丈夫だが... お前!

7 割消えてるぞ!!」

「影精霊」

「#復す#為#影エ###!が無#...」

(回復する為の影エネルギーが無い)

「霊夢」

「そういえばいつの間にか私達も動けるように... ルナク?」

「ルナク」

「...」

計画破綻を確認

プランB3に変更!」

「魔理沙」

「こんだけ話盛つといてなんだよ!!」

ルナクはスキマから血のバックアップを取り出し
注射器ごと噛み砕いた

「ルナク」

「破綻理由は…」

攻撃手段のネタ切れだ！」

ルナクにあらゆる妖怪の特徴が現れては消えてゆく

「ルナク」

「うつつ！再契約!!」

うつつがルナクの腕に掴まると

光と共に人の姿に変化した

「うつつ」

「では早速！

プランB3の説明を!!」

「ルナク」

「……………」

「うつつ」

「了解です」

ルナクは空間を割り

うつつを元の世界に戻した

「魔理沙」

「おいおい！

貴重な戦力を避難させてどうするんだ！」

「ルナク」

「まあまあ見てなつて

とりあえず影精霊はこれ抱いてなさい」

影エネルギーの結晶体を影精霊に渡した

「影精霊」

「ふう… 危な#った…」

「うつつ」

「へいおまち!!」

うつつに背負われて気絶したままの正邪が運ばれて来た

「ルナク」

「ご苦労！」

ルナクは正邪の耳元に顔を近づけ

小声で囁いた

「ルナク」

「汝、下克上を望む者よ

力を求めんとするのなら我と契約を交わせ」

「霊夢」

「正邪を式にするの!？」

「ルナク」

「天邪鬼も生き物だからいけるでしょ」

「霊夢」

「いや生き物限定じゃないし

そうじゃなくなつてよりにもよつてなんで正邪を?」

「ルナク」

「見ればわかる」

「正邪」

「… 断る」

「魔理沙」

「寢言… なのか？」

そうなら流石は天邪鬼、寢言も天邪鬼だな」

「ルナク」

「契約成立」

「霊夢」

「いやいやおかしいでしょ」

「うつつ」

「力を求めんとするのなら

つまりそのままの意味で

”力を求めないのなら”

昔っぽいとかそれっぽい意味では

”力を求めるのなら”

つまりどう答えても契約成立する詐欺

∴ じゃなくって都合よく理解しただけ

「魔理沙」

「最低だ…」

第20話 式神妖怪

―「虚数空間」迷いの竹林?―

「ルナク」

「汝に無限の妖力、夢幻の力を

対価に絶対服従と力の代償として見合う結果をもたらせ」
寝転がる正邪の肩に右手を置いた

「ルナク」

「よし、これで…!?!」

肩に置いた手の肘から先が消し飛ばされた

「ルナク」

「… パスを繋ぐ反動で… 腕が… 楽しみだ」

ルナクはスキマからハリセンを取り出し

正邪の頭をハリセンが粉々になる強さで叩いた

「正邪」

「痛った!!」

「ルナク」

「おはよう、我が下僕^{式神}よ」

「正邪」

「下僕?!」

ふざけんな!

昔は指名手配されてたけど

今はただお前の家に居候してるだけで…

なんじゃこりゃ!!!」

辺りの風景に気づいた

「ルナク」

「ここは虚数空間

敵はあいつ

今お前俺の式神

能力と身体能力上昇

OK?」

「正邪」

「他の奴らは？」

「ルナク」

「スキマ組はまだのびてる

他は幻想郷全域で地割れや

そこからの溶岩の噴出とかでどうなっているやら

原因はあいつ」

「正邪」

「倒せなさそうだから逃げてても…」

「ルナク」

「命令、殺れ」

「正邪」

「クツ… 逃げれない

わかった、行くから能力だけどうなってるか教えろ」

「ルナク」

「能力は

境界を引き、ひっくり返す程度の能力… だと思っ

身体能力は全て10倍」

「うつつ」

「身体能力倍率は私と同じなんですわね」

「ルナク」

「契約前と比較してな」

「正邪」

「サンキュ！

行くぞ！」

「ルナク」

「ハイハイ」

「2人はヒカリに近ずいた

「光」

「…なんか久々な気がする」

「ルナク」

「とりあえず待っててくれてありがとう」

「光」

「こういうのは待つのが常識らしいから」

「ルナク」

「戦隊モノとかの敵役かな？」

「正邪」

「スキあり!!」

ヒカリの背中に妖力弾を打ち込んだ

「光」

「不意打ちも出来んのか」

光の矢が正邪の全方向に現れ

発射された

「正邪」

「無駄無駄アア!!!」

光と闇、標的の境界線を引き、ひっくり返す

光の矢は黒く染まり、光に向かって飛んでゆく

「光」

「闇など効かんわ!」

正邪は更に幾つかの境界線を引いてひっくり返した

矢は全てヒカりに当たった

「光」

「言ったら、効かなブへ!!」

ヒカ리가血を吐いた

「ルナク」

「光では無く影

実数ではなく虚数

虚数の影でできた矢か

なかなかやるな」

「正邪」

「指示したのルナクじゃん」

「ルナク」

「まあな」

「光」

「はあ、はあ、まずいな…。」

ヒカリは腕を上げ、勢いよく振り下ろした

「ルナク」

「あ」

ヒカリの近くの空間にヒビがはいつた

「ルーミア」

「逃げられる!」

「正邪」

「させるか!!」

開閉の境界線でひっくり返し、ヒビを消した

逃げれない事を知ったヒカリは正邪に光速で近ずいた

「正邪」

「幾ら近づいても

正邪様には傷一つつかないぜ?」

舌を出し、決めポーズをした

「光」

「舐めやがって!!」

第5章 夢中崩壊異変
第1話 異変

—「??」??—

気付くと見慣れた天井が見える

布団をしまい、服を着替え

朝食の準備をする

昨日の残りの味噌汁を温め

ご飯をよそう

「あうん」

「おはようございまーす」

「霊夢」

「おはよ

萃香とクラッピーは？」

「あうん」

「見てないですね」

朝食を終え、縁側でお茶を啜る

木々の葉は生い茂りはじめ

すぐ夏が来そうな雰囲気を出している

「あうん」

「そう言えば今朝神社が壊れる夢を見たんですよ」

「霊夢」

「どんな風に？」

「あうん」

「霊夢さんが敵に吹き飛ばされて

神社を薙ぎ倒したんですよ」

「霊夢」

「…ん？」

私は殴り飛ばされた夢を…あれ？

空間割って異空間に…？」

「あうん」

「こう、平和な日が続いてると

そろそろ異変が起きそうな気がしますね」

「霊夢」

「出来れば起きずに永遠にこんな日ならいいのに」

「魔理沙」

「おーい！」

「霊夢」

「来た」

魔理沙が箒に乗ってやって来た

「魔理沙」

「という訳で異変だ」

「霊夢」

「いきなり何を言い出したと思えば異変ですって？

何をふざけた事を、

見たところ何も起きてないじゃない」

「魔理沙」

「いや、今回は特殊で

幻想郷の住民全員が同じシチュエーションの夢を見たんだ」

「霊夢」

「異変なのそれ？」

「魔理沙」

「夢の異変ならドレミーのところでも行ったら？」

「魔理沙」

「もうひとつあってな

全員が昨日の出来事を

痕跡があるだけで覚えてないんだ」

「霊夢」

「…そう言えば確かに今朝の味噌汁を作った記憶が無い…」

「魔理沙」

「という訳だ、行くぞ！」

「霊夢」

「めんどくさいわね…」

「あんたも行く？」

「あうん」

「お留守番してまーす」

—霧の湖—

「チルノ」

「きまったかー？」

「大妖精」

「やっぱり本人が決めた方がいいと思うんだけど」

「ルーミア」

「犬の名前を決めるわけじゃあるまいし」

「リグル」

「確かにね」

「ミスティア」

「あ、霊夢さんと魔理沙さんだ」

「この前のツケ覚えてますか？」

「魔理沙」

「…忘れてた、いくらだっけか」

「支払い中の魔理沙を横目にチルノ達に目をやると」

「見慣れないシヨタっ子が居た」

「霊夢」

「…この子だれ？」

「チルノ」

「今朝湖の近くで倒れてた」

「何も覚えてないらしいから名前をつけようと思って」

「ね、ポチ」

「ポチ？」

「えーつと… その名前だけは辞めてくれます？」

「大妖精」

「ルーミアちゃんとお揃いのリボンだから
やっぱり姉弟じゃない？」

髪色も同じ金髪だし

目の色も同じ赤だし

あと姉弟って同じ能力か

対象的な能力っていうイメージある」

シヨタっ子の髪に

ルーミアと同じ模様のリボンが結ばれている

「チルノ」

「という事はEXポチになれるってこと!？」

チルノがリボンを解こうと触れると

バチンという音が鳴り、火傷を負った

「ルーミア」

「私に兄弟居ないからね？」

(このリボン物凄い強力な封印解放対策がされてる

一体誰がなんの為に…)

「ミスティア」

「はい毎度！」

「魔理沙」

「どんだけ飲んだんだよ私… ん？」

誰だこのちびっ子」

「チルノ」

「ポチ」

「ポチ？」

「だからそれだけは…」

「魔理沙」

「能力持ってるか？」

「ルーミア」

「私と真逆の能力」

「魔理沙」

「じゃあ…」

イルミネーションからとって

ルーミネは？」

「ルーミア」

「いやいや、被ってるから」

「魔理沙」

「ならレミアアに決めてもらったらどうだ？」（確信犯）

「ミスティア」

「それは無しって事になったの」

「魔理沙」

「…ちえ」

第2話 夢の事は夢に

―「夢の世界」―

「ドレミー」

「あらあら、誰かと思いきや

幻想郷の巫女と魔法使いじゃないの

今日はどんな悪夢を見て…

って、生身!?

また生身!?!」

「霊夢」

「今回は自信がある」

「魔理沙」

「完全に生身確定だぜ」

「ドレミー」

「なんでそんなにはつきり言えるの?」

「魔理沙」

「紺珠伝の時と同じ道を進んでたら

山の湖あたりに

入ってくださいと言わんばかりの

夢の世界への穴が空いてて」

「ドレミー」

「それで今日はどんな用事?」

「霊夢」

「なんか幻想郷住民が

全員同じ夢をみる異変がおきてるらしくて

私は偶然だと思っけどね」

「魔理沙」

「いや、絶対異変

夢と言ったらドレミーって事で

お前が異変の元凶だ

大人しくゲロって貰うぜ」

「ドレミー」

「いやいや、私じゃない」

「同じ夢を見せた記憶無いし」

「そもそも昨晩はいつも通り全員別の夢を見てたわよ」

「霊夢」

「…いつも通り？」

「ドレミー」

「そう言えば珍しい事に夜行性の妖怪も含め」

「住民全員が寝ていたわね」

「魔理沙」

「じゃあ起きる寸前に記憶を改竄したって事か？」

「ドレミー」

「とりあえず夢には問題なかったわよ」

「霊夢」

「記憶ねえ…」

—「幻想郷」霧の湖—

「魔理沙」

「えーつと…居た」

「ルーミア！ちよつと」

「紅魔館の囲いの壁にチョコクで名前候補を並べていた」

「5人の中からルーミアを呼び出した」

「ルーミア」

「なにー？」

「霊夢」

「昨日の記憶知らない？」

「ルーミア」

「…知ってる、言わない」

「魔理沙」

「なんでだ？」

「ルーミア」

「口止めされてる

言ったら冷蔵庫全部回収されて

リボンの封印も解かない

って言われた」

「霊夢&魔理沙」

(あ、これ絶対ルナクが元凶だ)

「ルーミア」

「じゃあ助言

夢の内容が全て正しいとは限らない

うる覚えの記憶は目覚めた時夢と記憶が混ざる事がある

じゃー!」

「霊夢」

「夢が全て正しいとは限らない

寝起きの記憶は夢と勘違いしやすい

…もしかして!」

「魔理沙」

「じゃあ宇宙人が攻めてきて

幻想郷が崩壊しかけて

ルーミアとルナクが鎮静した」

「霊夢」

「それと少し違う異変が起きていたという事ね」

「チルノ」

「じゃあルミエールでいいな?」

「大妖精」

「ルミエールじゃなくてルミエルは?」

「リグル」

「天使みたいだね」

「ミステイア」

「採用!」

「ルーミア」

「ルナクによるとコイツ光属性らしいから
名前も光属性っぽくて良いんじゃない」

「ルミエル」

「なんか女の子っぽい名前だけど… まあいいや」

「霊夢」

「次は人里辺りにでも行ってみましようか」

「魔理沙」

「なぜ人里？」

「霊夢」

「なんとなく」

第3話 偽物

—人間の里／団子屋—

「鈴瑚」

「お持ち帰り用おまち！」

「魔理沙」

「なんだおやつか…」

「霊夢」

「行くわよ」

「魔理沙」

「え？3本頼んだんだが」

「霊夢」

「歩きながらって言ったじゃない」

「団子屋を出て里をまわり始める」

「魔理沙」

「…探す気ある？」

「霊夢」

「現在進行形で探してるじゃない」

「魔理沙」

「まさか買物中のうつつを探してるのか？」

「霊夢」

「今の間かれてたらどうするの」

「魔理沙」

「いや、アイツら本気で隠れるなら」

「千里眼で心見てくるぐらいはするでしょ」

「霊夢」

「…それは対策しようがないから出来ることを…ね」

「目の前にうつつが歩いている」

「魔理沙」

「…」

魔理沙のお団子に視線を向けて近づいてきた

「霊夢」

「確保！」

— 香霖堂前 —

「うつつ」

「?…:…
???

香霖堂の壁に

ロープでぐるぐる巻きにされたうつつがもたれかかっている

「魔理沙」

「さて、今回の異変について話して貰おうか」

「うつつ」

「イヘン？」

「霊夢」

「とぼけないの」

「うつつ」

「… キリサメ？」

「魔理沙」

「どうした？いきなり苗字で呼ぶなんて」

「うつつ」

「#####!#####!」

訳（やばい！見つかった！）

いきなり暴れだした

「霊夢」

「… 黄緑」

「魔理沙」

「どうした？」

「霊夢」

「コイツ、うつつじゃない」

「うつつ？」

テレポート

霊夢達の後ろに移動した

「うつつ?」

「見タ… コロス… 言われた」

スペル?

???

腰にぶら下げた鞘から小さなナイフを取り出し
魔力を貯め、マスパのようなものを打ち出した

「魔理沙」

スペル

恋符「マスタースパーク」

光線同士が相殺した

「うつつ?」

「うう…」

スペル?

身体強化?

スペル?

「インビジュアルアサシン」

ダガーを持った手を後ろに回した

「霊夢」

「後ろ!」

魔理沙が後ろを向くと

ナイフが飛んで来た

「うつつ?」

「… ヨブ」

ポケットから石を取り出し砕いた

「魔理沙」

「その手のマジックアイテムは

ルナクのだな… やっぱり何か知ってるだろ!」

「??」

スペルカード

突符「ストライクバード」

「頭上から魔理沙目掛けて鴉が飛び込んできた

「うつつ」

「######!」

訳（あれほど言ったじゃないですか！）

「うつつ?」

「#####」

訳（ゴメンネ……）

うつつは筒状の物を取り出すと

ピンを抜いて霊夢達の足元に投げた

「魔理沙」

「爆弾!」

筒状の物が煙を吹き出した

「魔理沙」

「スモークグレネードか」

視界が真っ白になった

「うつつ」

「それではまた」

「霊夢」

「ちよっと!」

止めようとした時

閃光が発生し、2人は気絶した

「うつつ」

「どうですか?」

「お手製スモークスタングレネードのお味は?」

「うつつ?」

「######!」

訳（目が!目がああああ!）

両手を掴み合い

偽物のうつつをぶら下げて何処かへと飛んで行った

第4話 歴史の穴

―「反転郷」紅魔館／居間―

「ルナク」

「…#####?」

訳（…何か言うことは？）

「うつつ?」

「#####:」

訳（美味しそうだったから…）

「うつつ」

「やはり写真を見せるべきだったのでは？」

それと日本語も」

「ルナク」

「言い訳用の言葉の学習も必要だな…」

「うつつ」

「そう言えばなぜミラさんを外に？」

「ルナク」

「気分転換が名目の

うつつから離れても安定するかのテスト

一応設定全てが狙いどおりにいってる」

「うつつ」

「で、見つかったと」

ミラと呼ばれたうつつそっくりな女性は

しよんぼりと俯いた

「ルナク」

「じゃあ何らかの方法で意思疎通出来るまで

外出禁止ね」

「#####」

訳（上とおなじ）

―「幻想郷」香霖堂／霖之助の部屋―

「霊夢」

「はっ！」

気づくと

そこは香霖堂だった

「霖之助」

「起きたかい？」

店の方から霖之助がやって来た

「霊夢」

「逃がしちゃったか…」

「魔理沙」

「ううん… 霖之助の家か」

「霖之助」

「外が騒がしかったり眩しかったりで

気になって出たら君たちが倒れてた」

「魔理沙」

「サンキュー」

介抱してくれて」

「霊夢」

「ところで

今回の異変について」

「霖之助」

「何も知らないよ

そういうのは賢者に聞けば良いんじゃないのかい？」

「霊夢」

「紫ねえ…」

「紫」

「はい」

スキマから上半身だけのりだした

「紫」

「異変の事でしょ？」

元凶は管理者の1人、全ての光

ルーミア、ルナク、正邪によって解決したわ

〔魔理沙〕

「宇宙人じゃ無いのかよ」

〔紫〕

「私も同じ夢を見たわ

でも境界をいじったらあら不思議

夢は改ざんされた現実だったって事」

〔魔理沙〕

「ねじ曲げられた記憶…

じゃあ慧音のどこ行けば

失われた歴史として明らかになるんじゃない」

〔紫〕

「なるほどねー」

—人間の里／寺子屋—

〔慧音〕

「うーむ…

確かに歴史が改ざんされていた

正しいのは妖怪賢者の言う通りの歴史だ

だがおかしな事に

戦いの決着が歴史に存在しないんだ」

〔霊夢〕

「歴史が存在しない？」

〔慧音〕

「普通戦闘中に逃げたとしても歴史に残るのだが

彼らは一時的に歴史から消え

決着が着いてから戻ってきてるんだ」

〔紫〕

「おそらくその時に異空間に行ったわね」

〔慧音〕

「私の能力は今居る空間の歴史のみを操作できるのだな

なるほど」

「魔理沙」

「ところでどうやって異空間に行ったんだ？」

「それはこの空間でやった事だろ？」

「慧音」

「それは… 空間を割って一定範囲を空間の穴にしたらしい」

「霊夢」

「ありがとう、この事は記さないでね」

「ルナクに気づかれると厄介だから」

「慧音」

「わかった」

第5話 ルーミアの家

―「反転郷」紅魔館／パーティーホール―

「正邪」

「よいしょー！」

フライパンに乗っている

片面が焼けたのホットケーキが

フライパンと位置を交代した

「うつつ」

「だいぶ戻ってきたんじゃない？」

「正邪」

「能力でホットケーキを

ひっくり返そうとしたのにこれだぞ？」

「うつつ」

「能力死んでたんだし

それと比べればマシよ」

「正邪」

「ルナクに頼んでお前みたいに戻せんのか？」

「うつつ」

「能力の強化を味わったら最後

もう今までの能力では満足できなくなる

だからゼロから努力して能力を戻すことで

元々の能力のありがたみを知りなさい

だってさ」

「正邪」

「能力強化の反動&使いすぎで

元の能力が使えないし

確かに不便だな」

―「幻想郷」ルーミアの家―

「魔理沙」

「鏡の世界に行くなら鏡

でも塞がれてて紫の能力でも無理だと思っ
たら常に開いてるルーミア亭の鏡なら」

「霊夢」

「鏡の世界に強行できる」

「ルーミア」

「そうと決まれば」

「チルノ」

「行くしかない！」

「大妖精&ルミエル」

「辞めといた方が……」

いつの間にか囲まれていた

「魔理沙」

「ルミエルは保護者枠か……って!？」

「紫」

「あら……亭主登場？」

「霊夢」

「ルーミアは止めないのね」

「ルーミア」

「止めないわ

ルミエルはダメだけどね」

「チルノ」

「弟イジメはよせ」

「ルーミア」

「イジメてないわよー！」

「魔理沙」

「じゃあ行かせてもらおうぜ」

玄関から入り

ルーミアの部屋へ向かった

「霊夢」

「やな予感」

「魔理沙」

「なにがだ？」

「霊夢」

「用心深く行動するなら

相手が知る入口を閉ざすのが定石よね？」

「紫」

「つまり…罨」

「魔理沙」

「じゃあ、チルノ大隊長！

突入準備!!」

「チルノ」

「!？」

お、おう!!

何だかわかんないけど

アタイの力が必要ってわけね！」

「魔理沙」

「ではまずこの毛糸を腰に巻いてくれ」

「チルノ」

「ラジャー」

渡された毛糸を腰に巻きしつかりと結ぶ

「魔理沙」

「なんかあつたらこれを引っ張れ

そしたら私達が突入し加勢する」

「チルノ」

「ラジャー！」

チルノ、行きマース!!」

鏡の中に飛び込んだ

「霊夢」

「囃？」

「魔理沙」

「糸が浮いてるうちは生きてて

糸が地面に着いたら死んだことがわかる

妖精は死ぬと消えるからな」

糸は鏡の真ん中から伸びていて

しばらくすると

激しく引っ張ってきた

「紫」

「釣りのようね」

「ルーミア」

「いやこれ緊急事態だろ!!」

糸を引っ張りチルノを救出した

「チルノ」

「あわわわ…」

「大妖精」

「チルノちゃん!!!」

チルノに駆け寄り抱きしめた

「魔理沙」

「大隊長、様子は」

「チルノ」

「アタイじゃなかったら

入った瞬間レーザーで真っ二つ

1歩目に踏むとドカンってなる丸いヤツ

右に避けたら本に攻撃されて

出口開けたらカラスのねーちゃんに切腹させられてたわね」

「ルーミア」

「説明どうも

消費した残機は？」

「チルノ」

「9」

「霊夢」

「なんでそんなに持つてるのよ!？」

「ルミエル」

「僕とルーミアで結界を5枚全員に張ってあるんです」

「ルーミア」

「光と闇の防弾チョッキってどこ」

「霊夢が封魔針をルーミアに投げつけた」

「針はルーミアに当たる寸前に」

「昔のテレビの砂嵐」の様なコーティングが現れ

ルーミアを守ると同時に碎け散った

「紫」

「擬似残機として良いわね」

「最大何枚?」

「ルーミア」

「実用できるのは5まで」

「それ以上だと薄くなつて防ぎきれない」

「因みにレーザーとかはそもそも無理」

「無敵時間無いから」

「ルミエル」

「逆に言えば1枚に凝縮するならウイルス弾とかの」

「弱いのを無効化出来ます」

「結界自体が服や露出している肌に張られるので」

「グレイズしても消費されない代わりに」

「スカートとかフリフリなのを着てたりすると」

「そこに持つてかれるんで弱くなります」

「紫」

「じゃあ服に張らずに肌に貼るようにしたら?」

「ルミエル」

「当たった所服焦げますよ?」

「例えば1枚圧縮張ってウイルス弾の海に飛び込もうものなら」

「ルーミア」

「一瞬で真っ裸

肉体ダメーz無くても二度と外を出歩けなくなるわ
で、何枚?」

「霊夢」

「じゃあ、私と魔理沙それぞれ5枚ずつお願い」

「チルノ」

「まいど!!」

代金合わせて…」

「大妖精」

「1000円が2人だよ」(小声)

「チルノ」

「そうだった!」

2000円!!」

「魔理沙」

「金取るんかい!」

第6話 特攻

―「反転郷」ルーミアの家―

「うつつ」

「今のが氷の妖精チルノです」

「ミラ」

「あのムジヤキな少女が氷精霊ですか

まあ精霊時代に会ったことないですけどね」

「うつつ」

「にしても「切腹せい！」はさすがにないですね」

「ミラ」

「ニホンでは他人に殺されるのがハジと」

「うつつ」

「いつの時代よ」

ふと鏡を見るとお団子がこちら側に置かれ

鏡の向こうで魔理沙がじつところこちらを見ている

その姿を見たミラは少し動揺している

「うつつ」

「あっちからはこちらが見えてないから安心してください

あと団子は罨です」

「ミラ」

「じゃあどうします?」

「うつつ」

「待機です

侵略者は排除です」

「ミラ」

「ところであれは覚えてます?」

「うつつ」

「覚えてますが…」

ほんとにやるんですか?」

「ミラ」

「登場はかっこいい方がいいじゃないですか」
「うつつ」

「流石はルナク様の師匠ですね
あの方も同じことを言いそうです」

一方鏡の向こう側では

―「幻想郷」ルーミアの家―

「霊夢」

「相手も人よ？」

「こんな魚釣りみたいな事しても無駄だと思っただけ」

「魔理沙」

「じゃあどうする」

「このまま集団で突っ込むか？」

「紫」

「じゃあ魔理沙はラストワード

私と霊夢は左右に背中合わせに乗っかって結界でガード」

「霊夢」

「了解」

「魔理沙」

「え？採用ですか？」

「霊夢」

「準備OK」

「紫」

「いつでもどうぞ」

「魔理沙」

「じゃあ皆下がってくれ！」

「ついでにこの部屋散らかるから掃除よろしく」

「ルーミア」

「みすちー」

「ミステイア」

「つけときますねー」

クリーニング代その他色々」

「魔理沙」

「…」

ラストワードスペル

彗星「ブレイジングスター」

—「反転郷」ルーミアの家—

「ミラ」

身体強化—EX

魔導障壁

身体能力を跳ね上げ、足元の地面を保護する

「うつつ」

「大丈夫なの？」

「ミラ」

「新技なら1人やれます

いちばん厄介なのは誰ですか？」

「うつつ」

「紫さんですね

あの赤くも黒くもない人」

「ミラ」

「了解

鏡から窓まで4メートル

外に飛んで行くしかないみたい…

着地お願いします」

数秒後に鏡から魔理沙達が飛び出してきた

「魔理沙」

「掛かってこいやー！！！！」

本の使い魔達の群れを貫通し窓を蹴破って行った

「ミラ」

テレポート

魔理沙達の進路と速度を計算し前にテレポートした

「紫」

「!？」

スペル

境符「四重結界」

目の前に現れたナイフを持つ人物に対して

結界を追加で張った

「ミラ」

転移式貫通斬撃^ス

箒の体制が崩れた

「霊夢」

「ちよつと紫！」

暴れない…で」

後ろを振り向くと

背中から血に染ったナイフが飛び出た紫の姿があった

「紫」

「結界を…貫通する…なんて」

箒から落ちた

「魔理沙」

「どうした!!」

「霊夢」

「紫がピチュった」

「魔理沙」

「いつの間に6回食らったんだ？」

ルーミア達のバリアってこんなに脆くないはず」

「霊夢」

「一旦止まって紫と合流しましょ」

スペルを解除し

近くの木の下に降りた

第7話 冷氣

―「反転郷」魔理沙の家―

「魔理沙」

「降りたところが私の家だとは」

「霊夢」

「そろそろ紫が来ると思うんだけど…」

「紫」

「悪いわね、わざわざ止まって貰って」

紫がスキマから出てきた

「霊夢」

「誰にやられたの？」

「紫」

「うつつによく似た別人

飛べない見たいよ」

「霊夢」

「じゃああの偽うつつね」

「魔理沙」

「飛べないのにあの高さ、あの速度に追いつくなんて

まるで瞬間移動でもしたみたいだな」

「紫」

「多分瞬間移動だと思うわ

一瞬の内に現れたもの

で、四重結界とルーミア達のバリアを

すり抜けて攻撃して来たわ」

「霊夢」

「貫通攻撃ね」

「紫」

「違う、「すり抜けて」よ

刃だけ体内に送り込まれて内側からやられたの」

「魔理沙」

「となると転移系の能力か…：なんか寒くない？」

気がつくのと辺りに霜が降り始め

魔理沙の家は後ろ半分が凍りついていた

「霊夢」

「…この方向は」

「紫」

「霧の湖ね」

「魔理沙」

「氷って事は、チルノか」

「霊夢」

「でもチルノはルーミアの家にいるはずじゃ」

「紫」

「攫われた？」

「霊夢」

「とりあえず行けば解るわね」

3人は霧の湖へと向かった

— 「反転郷」 霧の湖 —

「チルノ」

「あ、霊夢に魔理沙！」

「魔理沙」

「なんでお前がここにいるんだ？」

ルーミア達はどうした？」

「チルノ」

「あの後遊んでたら足元がピカーって光って
気づいたらここにいた」

「紫」

「精霊の召喚かしら？」

「霊夢」

「ただの妖精攫いでしょ」

「チルノ」

「なんでもいいや

とりあえず暇だから、あそぼ？」

スペルカード

凍符「パーフェクトフリーズ」

大量の弾幕が放たれ、それらが凍りついた

「魔理沙」

「なんか密度濃くないか？」

「霊夢」

「確かに濃いわね」

凍りついた弾幕が移動を始めた

「魔理沙」

「まあ避けれ無くはないな」

「チルノ」

「流石は魔理沙達

アタイの弾幕を避けるとはやるな！」

パキパキと音を立てて

背中の水の羽が成長してゆく

「チルノ」

「喰らえ！アタイの新必殺！」

凍符「超絶対零度」

チルノを中心に空気が凍りついてゆく

「紫」

結界「熱と寒の境界」

チルノの温度を上げ

冷気を止めた

「チルノ」

「ずるいぞ!!」

〔紫〕

「しようがないじゃない
今急いでるんだから」

羽をパキパキ鳴らしながら再びスペルを発動させる

〔チルノ〕

スペルカード

凍球「スノーボールアース」

霊夢達の頭上に巨大な雪玉を大量に作り出し落とした

〔霊夢〕

「お空を思い出すわね」

〔魔理沙〕

「確か… メガフレアだっけか

うん、似てる」

既視感からか、軽々と避けてゆく

〔チルノ〕

「…寒い」

雪玉の雨が止み、チルノが呟いた

〔魔理沙〕

「え!?!」

〔チルノ〕

「ま… 魔理沙… 寒い…」

地に足をつけ

体をふるふる震わせているそれを心配し

魔理沙はチルノのもとへ降り立った

〔魔理沙〕

「… なんかいつもより冷たいな」

〔チルノ〕

「… あ… 助け… て…」

チルノの羽は既に1つ1つが自分の身長を超えていた

〔魔理沙〕

「大丈夫か？」

「霊夢」

「魔理沙！逃げて！！」

心配そうにする魔理沙に向けて霊夢が危険を知らせた

「魔理沙」

「!?」

「チルノ」

「…っ！」

突然羽が砕け散った

「チルノ」

「!?…」

チルノの目は輝きを失い

その場に倒れた

「紫」

「妖精が… 自然死した？」

ありえないわ…」

「霊夢」

「一体何が…」

第8話 凍結

―「反転郷」霧の湖―

「魔理沙」

「…？」

魔理沙が何かに気がついた

「魔理沙」

「お…おい」

霊夢達は魔理沙の手を見ると

目を見開いた

「霊夢」

「凍ってる…」

「紫」

「一旦離れましょう」

立ち上がろうとするが

足に力が入らない

「魔理沙」

「足もか… どうすれば」

チルノのそばの水が凍ってゆく

「霊夢」

「やな予感がする」

チルノを中心に魔理沙を巻き込んで

巨大な氷塊が一瞬で形成された

「霊夢」

「…まさかここで残機を減らされるなんて」

「魔理沙」

「で、どうなったんだ？」

氷塊の中に水色の結晶が見える

「魔理沙」

「…精霊か」

「紫」

「しかも今回は純粹な精霊よ

今までの紛い物なんかと違う

妖精が信仰心を得て元に戻った本物の精霊」

「魔理沙」

「前見たくどうにかなるだろ」

「霊夢」

「ほんとにそう思う?」

「紫」

「多分今回は本気で勝ちに

いや、殺しにかかって来てるわね」

「魔理沙」

「… なんだよその言い方

私達が負けるのか?」

幻想郷のツートップである

博麗の巫女と妖怪賢者さんよお!」

「紫」

「相手はカラスと天邪鬼、小人

それらは良いとして問題は

全ての世界の管理者と正体不明のカラスと

精霊は自然の猛威そのもの

偽うつつは結界無効

ルナクは他メンバー強化

そして1人でも世界を滅ぼせる力を持つ

勝てるかと言われれば… 何も言えないわ」

「???

「なら諦めればいいじゃない?」

氷塊から声がする

「???

「我名は氷精霊

地球の自然14属性の1つ、氷の自然を司りし者」

「魔理沙」

「やっぱりお前か」

スペルカード

恋符「マスタースパーク」

氷塊を溶かし、蒸発させた

「氷精霊」

「無駄なことを…」

私は自然だ…私を殺したければ

この星から氷を消すことだな」

凍った池の氷から氷精霊が出てきた

「霊夢」

スペルカード

霊符「夢想封印」

輝く弾幕が氷精霊へと飛んでゆく

「氷精霊」

権限行使

超常天災「フリーズベクトル」

氷精霊が放った冷氣によって力とその方向が凍りついた

「霊夢」

「弾幕が凍ったのではなく

動きが凍ったとでもいうの!?!」

「氷精霊」

「そうだ

ここで面白い物を見せてやろう」

権限行使

超常天災「フリーズタイム」

一瞬にして紫が氷精霊に胸ぐらを掴まれていた

「氷精霊」

「時を凍らせればこんな事もできるのだぞ?」

紫の服が凍ってゆく

「紫」

スペル

結界「凍結と融解の境界」

氷精霊の腕を溶かし逃げた

「氷精霊」

「…厄介だな」

スペルカード

凍符「パーフェクトフリーズ」

弾幕がとてつもない濃さで放たれた

「魔理沙」

ラストワードスペル

彗星「ブレイジングスター」

魔理沙が弾幕をかき消しながら氷精霊へと突っ込んだ

「氷精霊」

「自ら最低温度の場所へ来るとはな」

魔理沙は氷精霊に触れると同時に凍りついてしまった

「氷精霊」

「私の体温は絶対零度を遥に下回ってるんだぞ？」

第9話 加勢

―「反転郷」霧の湖―

「氷精霊」

「私の体温は絶対零度を遥に下回ってるんだぞ？」

「??？」

「へえ…： すごいわね、絶対零度以下なんて

ただひとつ言うなら

時が動いてなければそれは無意味って事よ」

何者かが指をパチンと鳴らすと

氷精霊を中心に大量のナイフが現れた

「霊夢」

「咲夜!？」

あんななんでここに!？」

紅魔館の方から咲夜がやって来た

「咲夜」

「なんでって、あなた達と同じ目的よ

パチュリー様の魔法でこちらに来てみれば

あなた達が戦ってたから来たわけ」

「紫」

「作者の技量が無いせいで口調で誰かが判断出来ないわね」

「魔理沙」

「… 台本形式にした理由ってこれか」

「霊夢」

「おかえり

残機いくつ?」

「魔理沙」

「8」

「咲夜」

「時間停止が間に合わなければ

今頃冷凍されて7になってたわよ」

「魔理沙」

「サンキューな」

「咲夜」

「パチュリー様から贈り物として残機――が来てますが」

「魔理沙」

「受け取り拒否で」

「氷精霊」

「もういい？」

「咲夜」

「ダメ」

スぺル

時符「フリーズクロック」

氷精霊の時間が止まった

「咲夜」

「次行きましょ」

「紫」

「倒せる敵じゃないなら倒さずパスする
なるほどねえ」

――「反転郷」紅魔館／バルコニー――

「魔理沙」

「で、なんでここに？」

「咲夜」

「あれ見て」

指さした方向にはお城が浮いていた

「霊夢」

「輝針城がどうかしたの？」

「咲夜」

「望遠鏡で見れば解るわ」

望遠鏡を覗き込むと

お城のそばで巨人と戦う緑の2人組が見えた

〔紫〕

「・・・お腕を被った巨人ねえ」

〔魔理沙〕

「なんでうなじを狙ってたんだ？」

〔霊夢〕

「とりあえず加勢しましよ」

― 奇跡の剣士チーム ―

― 輝針城 ―

〔妖夢〕

「とった！」

巨人の首筋を削ぎ落とした

〔早苗〕

「もつと上です！」

縦1メートル横10センチ・・・じゃない

縦10センチ横1ミリのところですよ!!」

〔妖夢〕

「無理ですって!？」

巨人の首筋が再生してゆく

〔巨人〕

「だからなんで弱点知ってるの!？」

〔早苗〕

「自傷行為で巨大化とかどう考えても
進撃する巨人じゃないですか」

〔妖夢&巨人〕

「だからそれ何!!」

妖夢がもう一度斬りかかった

「妖夢」

「みよん!？」

それを見越して巨人は妖夢を叩き落とした

それと同時に妖夢が巨人のうなじをもう一度削ぎ落とす

「妖夢（半霊）」

「私（半人）をお取りに倒す

肉を切らせて骨を断つとはこの事だみよん!!」

巨人はその場に倒れ

切り落としたところから針妙丸が出てきた

「針妙丸」

「少名の巨人でも勝てないなんて…」

「妖夢」

「いてて… もういいわよ」

半霊は元の白いふわふわに戻った

「早苗」

「そう言えばそんな事出来ましたね」

「妖夢」

「奇跡的に思い出せました」

第10話 輝針城

―「反転郷」輝針城―

「魔理沙」

「遅かったな―」

「早苗」

「あれ？皆さんどうしました？」

「霊夢」

「異変解決よ」

「紫」

「なんであなた達がここに？」

「妖夢」

「幽々子様に夢が気になると言われ

さを迷っているうちに」

「早苗」

「奇跡的に出会い奇跡的にこちらに来て」

「針妙丸」

「怪しいからってやられた

まあ今回はルナク側なんだから当たり前だけど」

「咲夜」

「大きくて怪しいなんて

来てくれと言ってるもんだし

それが門番ならぜったいに隠す気ないわね」

「針妙丸」

「なぜ門番って知ってるの!？」

「咲夜」

「え？門番だったの？」

「適当に言っただけなのに」

「針妙丸」

「あ」

「霊夢」

「まあ人間5人… 4. 5人全員集まった訳だし
行きましよ、輝針城内部に」

「妖夢」

「私を0. 5人と数えなくても、1人でいいですよ」

—輝針城／内部—

ゆつくりと扉を少し開け

中を覗き込む

「正邪」

「チビがやられたのに

なかなか来ない…」

「うつつ」

「もうすぐ来るはず… なんだけど… 確かに遅いわね」

「早苗」

「あのお空に似た烏天狗は誰ですか？」

「霊夢」

「夜羽うつつ」

紫の所の藍的なやつでお空の従姉妹らしく
あらゆるモノを使いこなす能力を持つてる
ちなみに烏天狗じゃなくて

地獄鴉と地上の鴉のハーフの式神ね」

「妖夢」

「地底出身ですか… なるほど」

「咲夜」

「私と妖夢の従者仲間よ」

「正邪」

「さっさとこいや!!」

扉を蹴破って正邪が来た

「正邪」

「声丸聞こえ!」

「魔理沙」

「… 敵か味方か」

「正邪」

「敵、あんたら見かけたら逃げて報告、じゃ」

「反則アイテムで壁をぬけて逃げていった」

「妖夢」

「逃がさない！」

「半霊が後を追いかけた」

「正邪」

「おい！ちよ！反則！！」

「壁の向こうで声がした」

「妖夢」

「捕獲完了」

「斬ってきます」

「紫」

「斬らずに回収方面で」

「妖夢」

「了解です」

— 数分後 —

「正邪」

「… 自機組勢揃い」

「正邪はロープでぐるぐる巻きにされて囲まれている」

「霊夢」

「… ルナクは何処？」

「正邪」

「知らねーよばーか！」

「妖夢が刀を抜いた」

「正邪」

「ごめんなさい、下です…。」

「魔理沙」

「途中の罫は？」

「正邪」

「それは…。」

妖夢は針妙丸を掴み取り刀を向けた

「正邪」

「うつつさん達があが道中待ち構えてまます!!」

「紫」

「目的は？」

「正邪」

「… それだけは」

「紫」

「妖夢」

「妖夢」

「仕方ないですね

恨むならこの天邪鬼を みよん!!!」

妖夢がピチュった

「うつつ」

「やけに静かなので来てみたら

貴女方ほんとに正義ですか？」

投げナイフを片手に持ったうつつが隣の部屋から出てきた

「妖夢」

「不意打ちとは卑怯な」

全員が戦闘態勢に入った

「うつつ」

「分が悪いですね

絶対勝てないじゃないですか」

第11話 ひっくり返って

―「反転郷」輝針城―

「妖夢」

「不意打ちとは卑怯な」

全員が戦闘態勢に入った

「うつつ」

「分が悪いですね

絶対勝てないじゃないですか」

「正邪」

「人数多いのも卑怯じゃ」

「妖夢」

「…」

「うつつ」

「あ、正邪さん伝言です

これを使ってくれ

だそうです」

正邪の縄を掠めるようにナイフを投げた

「正邪」

「…これって」

全員がそのナイフを見た時に何かを感じ取った

「魔理沙」

「エンチャント…では無いが」

「霊夢」

「なにかが付与されてるわね」

正邪は全員が警戒しているナイフを取ると

うつつの元に移動した

「正邪」

「…これがあのナイフか」

「うつつ」

「使うなら指示通りをお願いします
それでは」

うつつは来た方へと戻って行った

〔正邪〕

「…いい事教えてやろう

このナイフは呪いがかかってな」

〔妖夢〕

「止まりなさい

さもないと」

再び針妙丸に刃を向けた

〔正邪〕

「…」

忠告を無視して妖夢の元へ歩みを進める

〔妖夢〕

「仕方がない」

妖夢は針妙丸に刃を突き刺した

〔妖夢〕

(相手が動揺しているうちに！)

〔正邪〕

「で？」

〔早苗〕

「いくら天邪鬼でも…」

〔正邪〕

「それ、身代わり人形なんだが」

妖夢の刀に刺さっていたのはただの人形だった

〔正邪〕

「なんにも喋らないからバレると思ったけどな」

〔紫〕

「…どうりで一言も発しない訳ね」

正邪はナイフを振りかぶり

紫へと投げた

〔紫〕

「何をするかと思えば」

紫はナイフをスキマで受け取り

そのまま正邪に向かって射出した

〔正邪〕

「ぐっ！」

ナイフが正邪の腹に刺さると

何かの波動が発生した

〔正邪〕

「… 計画通り」

見てろよ貴様ら

これがお前達の未来だ」

所々正邪の色が反転しだした

〔紫〕

「… これが想定内？」

〔正邪〕

「これが指示通りの使い方だ」

正邪の声が裏返し始めた

〔正邪〕

「このナイフには能力を暴走させセル力がアル

自制ガ効かなくナツて

自分能力によツテ自らが侵されてゆく」

身体中が所々様々な反転を始めた

〔邪正〕

「!!だみし樂かるなうど」

その言葉を最後に正邪の存在の有無がひっくり返った

〔霊夢〕

「… 私達の未来？」

冗談じゃないわよ」

〔早苗〕

「一体どういう事です!？」

「紫」

「正邪は正邪自身の能力に殺されたという事よ
しかもその呪いの解析は不能
対処法なしよ」

「妖夢」

「魂すら残ってませんね」

「ところで針妙丸はどこへ」

「咲夜」

「知らないわ」

「とりあえず先に進みましょう」

「――「反転郷」輝針城／最上部――」

「魔理沙」

「最上部がお城と地面の接点だった所だなんて」

「最上部なのか最下部なのか分かんなくなってくる」

「うつつ1」

「私もさっぱり」

「うつつ2」

「空が上なので最上部ですよ…多分」

「最上部へたどり着くと」

「そこには2人の妖怪が立っていた」

第12話 飛べない元魔女

―「反転郷」輝針城／最上部―

「うつつ2」

「改めまして

私は夜羽うつつ

ルナク・トワイダウン様の式神でございます

そしてこちらはルナク様の師匠の」

「うつつ1」

「ミラ・レゾナ

うつつちゃんの魂から分離して

分身に移った前世の意識です

ちよつとばかり輪廻から外れてるんで

そこんどこよろしく」

「紫」

「前世の意識?!」

「ミラ」

「正確には1から3世代前ではつきりとしなないんだけどね」

「妖夢」

「ありえない…」

死んだら普通意識はリセットされるはずなのに

分離?…絶対にあるえない!」

「ミラ」

「確か…稗田阿求さんだっけ?

あんな感じ」

「妖夢」

「…まさか同じ例外があるなんて」

「霊夢」

「で、能力は?」

「ミラ」

「魔理沙と同じ無能力で魔法使い

ちなみにこの意識の時は人間だったから
職業としての魔法使いね」

「魔理沙」

「あんたも魔法に引かれた人間って訳か」

「ミラ」

「私の場合

育ての親が魔法使いだったからってのもあるんだけど
夢があったからね

とりあえず話はまた今度」

ミラはナイフを取り出した

「ミラ」

「約500年前の魔法… 試させてね

ちなみにこのナイフは普通のだから安心して」

スペル

スパークキャノン

魔法陣を展開しナイフに魔力を込める

「魔理沙」

「受けて立つ」

スペルカード

恋符「マスタースパーク」

出遅れた魔理沙だったが発射は同時だった

「ミラ」

「さすがは最先端

魔力効率も瞬発力も威力もすごいわ」

「魔理沙」

「弾幕はパワーが大事だ！」

ミラが押され始めた

「ミラ」

「さすがにやばい」

スペル

身体強化—EX

体の能力全てを大幅に上昇させた事で

魔力のアウトプットが増え、状況を逆転させた

「魔理沙」

「聖か!!」

魔理沙はマスパを止めて横に転がり

レーザー避けた

「魔理沙」

「地上戦だと避けづらくてしょうがない…」

魔理沙は放棄に股がって飛行機を開始した

「ミラ」

「あ!ずるい!!」

「うつつ」

「あの… 飛べないんですか?」

「ミラ」

「飛行魔法覚える前に死んじゃったから」

「魔理沙」

「ラッキー!」

「じゃあこのまま空からやらせてもらうぜ」

「うつつ」

「ところで、私達はどうします?」

「魔理沙以外」

「…」

「紫」

「敵?味方?」

「霊夢」

「いや、どう考えても敵でしょ」

「妖夢」

「今晚は鴉の唐揚げで決まりですね」

「紫」

「厄介なのは退場して貰おうかしら？」

うつつをスキマで飲み込もうとしたが

何故かスキマに入らない

「咲夜」

「なら時間を」

うつつの時間を止める事が出来ない

「うつつ」

「ルナクによってそこから辺対策されています」

第13話 飛べない元魔女2

―「反転郷」輝針城／最上部―

「ミラ」

「ちよつと、ほんとにずるい!」

空から浴びせられる弾幕を躲し続ける

「魔理沙」

「そりゃ飛べた方が強い… ってあぶね!!」

ミラがジャンプして斬りかかってきた

「ミラ」

「昔もこんな感じでよくやってたな―

鶏肉目当てに」

「魔理沙」

「飛ぶ鳥を落とす勢い

というより飛ぶ鳥を貫く勢いじゃねーか」

「ミラ」

「血抜きです」

「魔理沙」

「血抜き…」

魔理沙はミラが届かない高さまで上昇した

「ミラ」

「…せいいな―」

ミラは小さな魔法陣を無数に展開し

それらから魔力弾を発射した

「魔理沙」

「非効率且つ低威力

そんなんじや勝てないぜ?」

ミラは魔法陣を変えて再び攻撃を仕掛けた

「魔理沙」

「爆発する魔力弾か

魔法陣バレバレ」

魔力弾を大きめに避けた

「ミラ」

「私の開発した魔法なら」

ミラはこっそり手を後ろに回した

「魔理沙」

「何もしないなら」

スペルカード

恋符「マスタースパーク」

ミニ八卦炉に魔力をチャージする数秒隙をつくように
後ろからナイフを持った手が現れた

「ミラ」

スペル

「インビシブルアサシン」

「魔理沙」

「くっ」

体を倒し、ナイフを避け

上下逆さまになりながらマスパを放った

「ミラ」

スペル

「リバーストランジョン」

マスパの先端が魔法陣にぶつかると

魔理沙の後ろから現れた魔法陣からマスパが放たれた

魔理沙：残機7

「魔理沙」

「転移魔法

厄介だな」

「ミラ」

「相手の体内に毒を埋め込めるしね」

お互いの攻撃の手が止まった

「魔理沙」

「降参しろ」

転移魔法なんて魔力の消費が激しいし

しかも効率最悪なんだからもうすぐ魔力切れだろ？」

「ミラ」

「確かに魔力切れ寸前

なら次に死んだ方が負けって事で」

「魔理沙」

「ピチュったら

って言え・・・物騒すぎる」

魔理沙はミニ八卦炉を構え

ミラは手を後ろに組んだ

「ミラ」

「夜のような黒さを持つ漆黒の翼

私には扱う事ができない」

「魔理沙」

「どうした？いきなり」

「ミラ」

「運命さだめに敗れた飛べない鳥は

ただ影のように地に這い蹲る運命にある」

「魔理沙」

「詠唱か・・・でも違うな」

「ミラ」

「闇に願いを月に祈りを

自分を嘲笑いし空の民への復習を」

気づいた時にはもう遅かった

ミラは羽の後ろに魔法陣を隠し

それに魔力を注ぎ続けていた

「ミラ」

「闇と月は

烏を屠りし者へ宵闇の魔槍を、
復讐の裁きを与えた」

スペル

「プリエール デ ヴエンジェンス」

「魔理沙」

ラストワードスペルカード

彗星「ブレイジングスター」

1歩遅れた魔理沙の元に

強化された肉体から音速を超えた魔力製の槍が放たれた
槍は胴体を突き抜け

魔理沙は彗星となってミラへと衝突した

魔理沙：残機6

ミラ：残機不明

第14話 自機経験者

―「反転郷」輝針城／最上部―

「うつつ」

「5対1とか卑怯すぎませんか？」

「紫」

「しようがないじゃない

幻想郷が1度滅んだんだもの

もう二度と起きないようにしておかないと」

「霊夢」

「という訳で

本気で行くわよ」

全員がうつつを囲い込み

戦闘態勢に入った

「うつつ」

「流星は自機経験者」

咲夜と妖夢が不意打ちをした

「うつつ」

「残念」

しゃがんで避けたうつつはポーチから

ナイフを2本取り出した

「霊夢」

「あのナイフ何本あるの!?!」

咲夜と妖夢は呪いがかかったナイフを警戒し

大きく距離をとった

「うつつ」

「4本です

つまり未使用はあと3本ですね

ちなみにこの呪いが発動した場合

残機が無効化されるらしいのでご注意を」

全員が警戒する中

うつつは1本を紫に投げ
もう一方を霊夢に投げた

「霊夢」

「…」

ナイフが霊夢に当たると

霊夢の表面に白と黒の砂嵐が発生した

「うつつ」

「!？」

「紫」

「よそ見禁止」

正邪にやったようにスキマで回収し射出した

「うつつ」

「予想通りです」

飛んでくるナイフの柄をつかみ

勢いを殺すことなく咲夜に投げつける

「妖夢」

「覚悟」

武器を持たないうつつに一瞬で間合いを詰た

「早苗」

「危ない！」

うつつはポーチから最後のナイフを取り出す

それに反応し少し間をとった

「妖夢&うつつ」

「…」

「霊夢」

「5対1」

ナイフも2対1

勝ち目はない、降伏しなさい

今なら殺さず正邪と同じ刑にしてあげるから」

霊夢と咲夜は呪いのかかったナイフを構えた

「咲夜」

「動くのなら」

「このナイフで貴女を切るわよ？」

妖夢は刀を収め

数歩下がった

「魔理沙」

「ただいまー」

「これどういう状況」

「霊夢」

「おかえり、いま・・・」

霊夢が魔理沙に説明している途中で

うつつが何かを語り出した

「うつつ」

「・・・能力を暴走させ自壊に追い込む呪い

それは分かっているとありますが

その呪いは私の能力にどのような影響を

及ぼすと思いますか？」

「紫」

「全て自分を殺すように道具を使ってしまう

もしくは暴走と使いこなすで中和といった所かしら？

・・・まさか!？」

「うつつ」

「さあ、どうなるでしょうね」

手に持ったナイフを自分の腕に突き刺すと

全員が不安と期待が入り混じった様な複雑な感情で

うつつに視線を向け始めた

「うつつ」

「矛盾の先に待つのとは調和、混沌、消滅のどれか

貴女たちの運はどの結果を呼ぶ？」

見た目だけでは何が起きているか分からない

何があっても良いように準備をする

「紫」

「この様子だと消滅ね」

「うつつ」

「…」

妖夢に投げるため普通のナイフを取り出す

ナイフに触れた瞬間にその無限の使い方が

頭の中になだれ込んでくる

それらを出るだけ無視し、投げた

「妖夢」

「…降伏しないというわけですね」

第15話 自機経験者2

―「反転郷」輝針城／最上部―

「妖夢」

「…降伏しないというわけですね」

刀でナイフを弾き間合いをつめる

「うつつ」

「うう… あああああああああ!!!」

うつつの叫びと同時に口から火炎が放たれた

「妖夢」

「くっ…」

再び距離をとった

「紫」

「これは、地獄鴉の種族的な能力ね」

生まれて初めて出した炎の吐き方

その調整の仕方、防御、攻撃、様々な使い方が

脳内に押しかけてくる

「妖夢」

「炎ですか、刀で振り払えない分厄介ですね」

情報量が多すぎて脳が追いつかない

使い方のイメージで目の前が度々染る

激しい頭痛で常に飛びそうな意識を

どうにかつなぎ止める

出来るだけ不要な情報を抑えようとする

そのやり方が流れ込む

「うつつ」

「はあ… はあ…」

「紫」

「目が虚ろになってるじゃない

もう意識を保つのがやつとなんじゃないかしら？」

妖夢が飛び込み斬りかかった

それをナイフで受け流し

咲夜に妖夢ごとぶつける

「霊夢」

スペルカード

霊符「無双封印」

輝く無数の霊力弾を躲す

「魔理沙」

スペルカード

恋符「マスタースパーク」

夢想封印で狭められている行動範囲を

綺麗に覆う様に光線が放たれた

「うつつ」

スペル

模倣「マスタースパーク」

マスパに関する情報をつむぎ合わせ模倣し相殺する

「妖夢」

ラストスペルカード

人鬼「未来永劫斬」

「うつつ」

スペル

見合「未来永劫斬」

妖夢の筋肉の動きから行動を予測させられ

それに合わせてナイフを振るう

「妖夢」

「え… 攻撃を見て対処するなんて…」

「うつつ」

「うう…」

更に頭痛が激しくなり意識が朦朧とし始めた

半身が麻痺を起こしたせいで

手からナイフがずり落ちる

更には鼻血が大量に吹き出し始めた

「霊夢」

「… ほっとけば勝手に倒れてくれるわ

とりあえずミラっていう子を回収してから次に行くわよ」

霊夢の言葉で全員の戦闘態勢が解かれた

「うつつ」

「ま… まてえ…」

(脈が異常に早い… 血圧も上がりすぎてる

しかも半身麻痺… 脳の血管でも破れたのか？

だとしたら確実に助からない…

死ぬなら、最期にせめて1人だけでも

残機のひとつでも巻き添えに…)

余計な情報が冷静さを失わせ

自壊させる方向に行動させ始める

「魔理沙」

「ルナクの奴どこにいますか？」

「霊夢」

「私の感が正しければ…？」

後ろの方で大きな魔力を感じた

「ミラ」

「この魔力、うつつちゃんやる気なんだ…」

うつつは大きな右手を振り上げ

魔力を込めている

「うつつ」

「せめて…」

右手は魔力の溜めすぎで赤く発光し静電気を纏っている

その場の全員が見ただけでやばい事が分かった

「霊夢」

スペルカード

夢境 「二重大結界」

「紫」

スペルカード

境符 「四重結界」

うつつは右手を振り下ろし地に拳を叩きつけた

「うつつ」

インボッシブルスベル
不可能攻撃

「対城焼却」

第16話

元凶

―「反転郷」輝針城／最上部―

うつつは右手を振り下ろし地に拳を叩きつけた

「うつつ」

インボッシュブルスベル
不可能攻撃

「対城焼却」

超高圧縮されたうつつの魔力全てが

解き放たれ、暴走し純粋な破壊力へと変換される

凄まじい熱量が城全体を飲み込み蒸発させ

円柱状の光柱を発生させた

全員：残機―1

―輝針城跡地―

城の残骸の下で7人が再び集合した

「霊夢」

「なにあれ」

「ミラ」

「ルナの最終兵器のアレンジ版ですね

魔力を体の1箇所にて全て集めて解き放つ

無差別自爆攻撃です」

「早苗」

「自分も喰らうマダ○テですね!」

「紫」

「今回はいつもとは違うわね」

「咲夜」

「と言いますと?」

〔紫〕

「今回死人が出てるわ…」

「いつもルナクと戦う時は誰も死なないのに」

〔霊夢〕

「しかも死因は両方共に自殺

降霊術でもやる気かしらね」

〔妖夢〕

「天邪鬼なら魂諸共消滅しています

なのでそれはないかと」

〔魔理沙〕

「とりあえずどっか行こ」

— 永遠亭 —

〔魔理沙〕

「鏡の国の竹林こわ！」

〔霊夢〕

「よく分からない道が更に分からなくなるわね

飛んでなかったら3年は迷うわ」

〔紫〕

「霊夢の感はここをさしているのね」

〔霊夢〕

「正確にはここら辺」

〔早苗〕

「奇跡的に見つかるようにします？」

〔霊夢〕

「結構です」

その場所は反転郷の永遠亭だった

〔早苗〕

「永遠亭に来る度に

かぐや姫を思い出しますね」

〔咲夜〕

「蓬萊山輝夜のこと？」

「早苗」

「いいえ、

今は昔、竹取の翁といふもの
つて始まるやつです」

「咲夜」

「知らないわね、それ」

「魔理沙」

「あー、寺子屋でやった気が…」

確か…もと光る竹なむ一筋ありける だっけ」
ふと近くの竹を見ると一箇所光っている

「紫」

「… 罨ね」

「早苗」

「あからさまですね」

「妖夢」

「斬れば分かります」

そう言いながら竹を真つ二つに斬った

「魔理沙」

「縦に真つ二つにしたら中の人死ぬだろ!!」

「霊夢」

「そこじゃない!!」

それより罨は!？」

辺りには特に変わった事はなく
いつも通りの空気が流れている

「紫」

「… そういえばルナクはここを
薬品系の実験室にしてるらしいわ
なんでも機材が揃ってるらしくて」

「咲夜」

「じゃあこの竹も何かの薬品のサンプル？」

「ルナク」

「あちやー…切っちゃったか」

「それ唯一の成功品だったのに」

「永遠亭から普通に出てきた白衣姿のルナクに全員が驚いた」

「霊夢」

「白衣!？」

「それより成功って!？」

「ルナク」

「タケノコにかけて埋めると」

「竹取物語に出てくる光る竹になる薬品」

「中身はないけど」

「まあ針妙丸でも入れれば雰囲気出るとおもうよ」

「魔理沙」

「そんな事より」

「今回の異変の元凶もお前だな？」

「ルナク」

「異変?どんな?」

「霊夢」

「幻想郷が崩壊し、それを夢と偽装した」

「ルナク」

「…気づいてしまったか」

「ならしょうがない」

「着ていた白衣を脱ぎ捨てた」

「ルナク」

「上からの命令だ、この件に気づいた者を始末せよ」

「一応聞くが知ってるのは誰だ？」

「咲夜」

「えーっと…」

「文々。新聞に載ってたから幻想郷住民全員ですね」

「ルナク」

「…何か爪痕が残ってた時の為に」

夢にしたのが仇になつたか

… しょうがない、記憶を消そう」

「霊夢」

「またなんかやる気ね

その前に止めさせて貰うわ」

「紫」

「妖怪賢者とあろう者が幻想郷を滅ぼすなんて
恥を知りなさい」

「ルナク」

「… 君たち戦闘狂？」

全員が1度離れ、弾幕での攻撃を始めた

第17話 対ルナク戦1

―「反転郷」永遠亭―

「霊夢」

「またなんかやる気ね

その前に止めさせて貰うわ」

「紫」

「妖怪賢者とあろう者が幻想郷を滅ぼすなんて

恥を知りなさい」

「ルナク」

「… 君たち戦闘狂？」

全員が1度離れ、弾幕での攻撃を始めた

「ミラ」

「あのー… 私はどうしたら」

「早苗」

「降伏すれば助けますよ？」

しないなら退治します

逃げても良いですが

まあ奇跡が起きない限り貴女に明日は来ないでしょうね」

「ミラ」

「降伏します！降参します!!」

「早苗」

「じゃあ隠れててくださいそうすれば

私達は攻撃しませんしルナクも貴女を攻撃しないので

貴女は安全です」

「ルナク」

スperl

「影繭」

ミラが自分の影に飲み込まれ姿を消した

「早苗」

「な!?!」

「ルナク」

「悪い、回収させてもらった

ミラは守谷教には入らない」

「早苗」

「残念ですね…。」

「妖夢」

「仲間を殺した!?!」

「霊夢」

「あんだここまで落ちぶれたのね!!」

遠巻きに見ていた人達は勘違いをしている

「ルナク」

「いい加減話を聞け!!」

スペル

式神「夜羽うつつ」

召喚用の魔法陣を展開しうつつを呼び出す

しかし一向にやってくる気配がない

召喚対象を正邪に変えるも何も出ない

「ルナク」

「応答しろ!!」

慌てて小さな石を取り出し2人に呼びかけた

「霊夢」

スペルカード

霊符「夢想封印」

「ルナク」

「一旦待ってくれ!

一大事なんだ!!」

スペル

結界「属性結界・闇」

黒い結界に攻撃を阻まれた

「ルナク」

「まさかとは思うが…」

スペル

降霊「面影」

ルナクの影が2つに別れ

横に移動し起き上がった

しかし片方は途中で崩れてしまう

「うつつ形の影」

「#####ーーーーー」
「!!!!!!!」

「ルナク」

(うつつが死んでいる!?)

正邪に関しては魂すらない… 何故だ)

「妖夢」

「降霊術ですか… 霊なら私が一太刀で葬りましょう！」

「ルナク」

「千里眼で見ても死体が見つからないか…」

スペル

结界「属性结界・霊」

うつつ形の影を结界で守った

「咲夜」

「はい、おつかれさまです」

時間を止め、呪いがかかったナイフをルナクに突き刺す

決着が着いたと思いきや全員の攻撃が止まった

「ルナク」

「何故これが!？」

「咲夜」

「貴方がうつつ達に渡したんでしょ？」

「ルナク」

「は？」

俺が渡した？」

ナイフを引き抜き

再び呪いを付与してスキマにしまった

「ルナク」

「このナイフ

能力持った幻想郷を壊そうとしてる奴用の兵器なんだが」

「紫」

「それよりなんで貴方は呪いを受けないの？」

「ルナク」

「対象範囲外だから」

ルナクは妖夢の目の前に瞬時に移動し

呪いのナイフで手の甲に小さな傷をつけた

「妖夢」

「っ!?!?!」

「…あれ？」

「何も起きない」

第18話 対ルナク戦2

―「反転郷」永遠亭―

「ルナク」

「見ての通り効くのは

異能系能力者のみ

つまり種族的能力や

努力で手に入れた技術的能力には効かない

この中だと魔理沙と妖夢は効果対象外」

「妖夢」

「なら何故あなたは」

「ルナク」

「話すと長くなるが…いいだろう

まずこの呪いをかけた術者は俺だ

つまり解き方を知ってる

だがそれ以前に俺には通じない」

「紫」

「つまりあなたの能力は技術か種族的能力って事？」

「ルナク」

「半分正解

俺はワーキメラだから沢山の種族的能力を持つてる

技術的能力も一応は

でも異能系能力も持っている

そこは他能力でカバーだな」

スペル

死映「トレースライフエンド」

「うつつ形の影」

インボッシュブルスベル
不可能攻撃

「対城焼却」

「ルナク」

「え？」

「咲夜」

スペル

月符「ルナクロック」

時間を止めて全員を攻撃範囲外に移動させた

「魔理沙」

「ナイスさくy」

魔理沙の声が凄まじい爆発と熱でかき消された

ルナク：残機0

「ルナク」

「…」

自爆か… つまり俺に倒せと
なるほど」

遠くから自機組帰ってきた

「紫」

「なんで残機が減ったの」

「ルナク」

「… 管理者権限が次に世界が生まれ変わるまで剥奪された
つまり今の俺は全ての対としての権能を持っていない
ただの半人半妖という訳だ」

ナイフを取り出し紫に投げた

「紫」

「何故みんなこぞって私を狙うのかしら」
スキマで跳ね返した

「ルナク」

「お前が1番厄介だからだ」
スペル

「ミラーボール」

魔法で作られた内側が鏡張りの球体に
ナイフと一緒に紫が飲み込まれた

「紫」

「こんなの簡単に…!?!」

球体内を縦横無尽に駆け回るナイフから逃げるため
スキマで球体の外に出ようとするが
何故か開かない

「ルナク」

「わるいな、

能力による通過も反射するんだ」

球体が縮みはじめ

さつきまで直径が十数メートルあったものが
2〜3メートル程になってゆく

中ではナイフの反射するペースが上がり
避けにくくなる

「ルナク」

「早く対策しないと

潰されて死ぬぞ?」

「霊夢」

「スペルカードルール上

避けられない攻撃は禁止事項よ!

あんたも知ってるでしょ!!」

「ルナク」

「スペルカードルールねえ…」

球体を解除する

「霊夢」

「紫!!」

そこにはナイフが胸に刺さった紫の姿があった

「ルナク」

「いつもなら守るがさつきも言った通り

今回は事情があつてね

上から痕跡を消せと言われてるんだ

その邪魔をするのならスペルカードルールを無視して
実力主義でやらせてもらおうぞ」

〔紫〕

「あ…：が…：」

紫のところに大量のスキマが発生し

彼女を細かく引きちぎるように吸い込み消滅した

〔霊夢〕

「あんたそれでも妖怪賢者!？」

〔ルナク〕

「これでも頑張ったんだよ？

本当は幻想郷諸共

太陽系を消滅させる予定だったんだからね

一応妖怪賢者としての仕事もした訳だ」

第19話 対ルナク戦3

―「反転郷」永遠亭―

「ルナク」

「という訳で、そろそろ実行させて貰おう」

権限行使

「歴史改竄」

ルナクが掲げた手に巨大なエネルギーの球が現れた

「魔理沙」

「権限あるじゃねーか!!」

「ルナク」

「この発動1回のみ許可されてる

チャージには権限が使えないから時間かかる

止めるなら今のうちだぞ?」

「咲夜」

スペル

月符「ルナクロック」

掲げた腕か肩から切断された

「咲夜」

「ルールを守らない相手と戦うならば

それに従う必要は無い」

「ルナク」

「… そりゃそうだな」

エネルギーチャージは止まる気配をみせない

「早苗」

「倒さないと止まらないみたいですね」

「魔理沙」

ラストワードスペル

彗星「ブレイジングスター」

「ルナク」

スペル

「慣性相殺」

箒の先とルナクの蹴りがぶつかり

それぞれの動きが一瞬にして完全に止まった

投げ出された魔理沙を掴み

首筋に噛み付いた

「魔理沙」

「お……お前……」

一瞬で身体中の血を吸い尽くした

魔理沙：残機4

「ルナク」

「次は誰だ？」

「霊夢」

「なんで魔理沙ばかり狙うの？」

「うつつ」

「もとより残機が少ないからな

脱落させ易いわけ」

「咲夜」

「確かに私もそうしますね」

月符 「ルナクロック」

「妖夢」

「敵は少ない方が楽ですし」

今度は残った左腕と下半身を奪われた

「ルナク」

「暗殺にピッタリ有能力だな

ヴァンパイアハンターさん」

下半身を再生させる

「妖夢」

「私の刀では再生されてしまいますね」

「咲夜」

「銀のナイフ使う？」

「ルナク」

血霧「ブラッドミスト」

ルナクから紅い霧が発生し始め

たちまち当たり一帯を紅く染めた

「靈夢」

「紅霧異変みたいね」

「ルナク」

「この霧、実は触れている吸血鬼の回復力と疲労、魔力を回復する効果があるんだ

だから銀のナイフで切られた腕もゆっくりなら回復出来る訳」

「早苗」

「ルナクって吸血鬼なんですか!？」

「ルナク」

「吸血鬼、幽霊、人間、妖精、魔法使いをメインに

幻想郷にする全ての種族＋αの混血

血統の発現は操作可能

今は吸血鬼と人間、ほら、羽あるでしょ？」

いつの間にかコウモリの羽が背中に生えていた

「早苗」

「へー…おっと！」

何故か突然 突風がーそして太陽がーそして

(能力使用)

霧が払われ日光が当たりを照らし始めた

「ルナク」

「絶対わざとだろ!!」

まあ日光は人間の血統のおかげで

致命傷ではないんだけどね」

「靈夢」

ラストワードスペル

「無想転生」

「全員」

「え!？」

「霊夢」

「このまま時間稼ぎされると

相手の思うツボよ!!

さっさと退治するわよ!!」

「早苗」

スペル

開海「モーゼの奇跡」

弾幕の壁によって左右の移動を制限された

そこに咲夜と妖夢に挟まれて近接攻撃を受ける

「ルナク」

「待て!」

それはキツイ!!」

スペル

「スタンウェイブ」

黄色い結晶を出し、1発の衝撃波を発した

無敵状態の霊夢以外が一時的な金縛りを起こし

動けなくなった

「ルナク」

インポッシブルラストワードスペル

核熱「テラケルビン」

近くのもの無差別に蒸発させる光線を

霊夢達全員に当たるように薙ぎ払った

霊夢以外：残機――1

第20話 対ルナク戦4

―「反転郷」永遠亭跡地前―

「早苗」

「うわぁ…竹林が…」

「妖夢」

「煙に気を付けてください」

「空いすぎると死にますよ」

上空で霊夢とルナクが激闘を繰り広げている

「魔理沙」

「みんな残機いくつ残ってる？」

「私は3だが」

「早苗」

「1減って2です」

「咲夜&妖夢」

「同じく」

「魔理沙」

「… なにかないか？」

「早苗」

「確か霊夢さんあの状態だと最強ですし

ルナクの消耗を待てば勝てるかと」

「魔理沙」

「… 消耗しきるのにどんだけかかると思ってる？」

「早苗」

「… 5分でしょうか」

「魔理沙」

「多分1日耐久は余裕」

「早苗」

「ええ…」

「魔理沙」

「鬼巫女になってくれればな」

「早苗」

「ですねー」

「妖夢」

「すみません、鬼巫女とは一体」

魔理沙と早苗の顔が暗くなった

「早苗」

「… 本気の霊夢さんの事です

私は聞いただけなのですが

紫さんと戦った時（妖々夢Phステージ）に初めて
なったもので

相手の攻撃をゼロ距離で避け続け

制限時間ギリギリで蜂の巣にされるみたいです」

「魔理沙」

「ちなみに私の時（永夜抄4面）は最後のスペルで

死なないように加減されながら

四肢を引きちぎられ全身に激痛を感じながら意識を

保ち続け… 何度殺してくれと言ったことか…

あの返り血で赤く染った姿、紅く輝く蛆を見る目は

一生忘れられない…」

「妖夢」

「… 鬼だ」

「咲夜」

「二度としないように躑までするとは…」

「魔理沙」

「身に美しいで躑じやないぞ絶対」

「早苗」

「で、なんでそれにならないんでしょうね」

「魔理沙」

「まだ切れてないからだろ

多分もう1人死ねばなると思うが… それは避けたい

待てよ…もしかしたら…」

— 霊夢サイド —

「霊夢」

「そうやって逃げていられるのも今のうちよ!」

「ルナク」

「体力は残ってるぞ?」

「このまま1日耐久も簡単だ!」

「まあそんなに時間かかってたら」

「歴史消去が実行されちゃうな!」

ルナクは弓を出した

「霊夢」

「今の私に攻撃は通らないわよ?」

「ルナク」

「この弓は特殊でな」

吸血鬼が代々継承している神器の1つなんだ」

「霊夢」

「レミリアにグングニルとかのこと?」

「ルナク」

「そゆこと」

吸った血を消費するから予め準備が必要だが

「どれもこれも強力な品だ」

矢を何も持たずに引き絞る

狙いをつけ手を離すと何かが射出される

しかし霊夢をすり抜けてどこかに行ってしまった

「霊夢」

(透明な矢?)

何も持っていないところからすると衝撃波?)

「ルナク」

「実演はここまで」

次は本番だ」

右手に木の枝が現れそれを矢に番えた
スペル

神弓「ミステイルティン」

放たれた枝は途中で矢へと形を変え
霊夢へと向かっていった

第21話 分岐

―「反転郷」永遠亭跡地前／空中―

スペル

神弓「ミステイルテイン」

放たれた枝は途中で矢へと形を変え

霊夢へと向かっていった

その矢は霊夢の右肩に命中した

「霊夢」

「!？」

「ルナク」

「この矢は攻撃を与える事が出来ない相手に攻撃を通す

そういう力を持つ神器だ

これで無想転生は無敵じゃ無くなったぞ?」

「霊夢」

スペル

夢符「二重結界」

「ルナク」

「… 対策されちゃった

なんで障壁は無効化出来ないってしってるの」

「霊夢」

「感」

「ルナク」

「あー…」

まあいいや」

距離を詰め霊夢に掴みかかった

「ルナク」

スペル

結界「属性結界・樹」

霊夢の攻撃が近づくルナクに集中し

ルナク結界から凄まじい音が響き始めた

「ルナク」

スペル

「貫^ビ通^ア撃^ス」

霊夢の結界を割り肩に刺さった矢を掴んだ

「ルナク」

「霊夢！よく聞け!!」

お前がしてる事は」

——永遠亭跡地前／地上——（少し前）

「早苗」

「どうしたんですか？」

「魔理沙」

「あのエネルギーの塊なんだが

見た感じ逃げてくエネルギーが莫大なんだよな

「咲夜」

「と言うと?」

「魔理沙」

「例えばルナクが1000のエネルギーを

毎秒注いでるとしよう

でもあの塊は毎秒99のエネルギーを放出しちゃってるんだ

つまり実際のチャージ速度は毎秒1

実際は桁が違うと思うがな

そして次に、あいつは今死ぬ事が出来る

もう分かるな」

「妖夢」

「でもルナクは妖精の血統を持っていますよね

だったら殺せないのでは？」

「魔理沙」

「1回休みがある

あいつの場合数秒で戻るだろうが

10秒で1000エネルギーをロスする

つまり1000秒間戻せる訳だ

さらに言うとチャージにアウトプットの

ほとんどを使ってるみたいで

大技を出すのは避けたいはずだ」

「早苗」

「最後の特異点の魔人を攻略するみたいですね」

「魔理沙」

「… ゲームとやらは分かんないが、

目標はリスキル祭りだ

方法は任せる」

「咲夜」

「作戦… なのかしら…」

— 永遠亭跡地前／空中 —

「霊夢&ルナク」

「…」

「魔理沙」

「霊夢!!」

霊夢に刺さった矢をルナクが掴んでいた

「ルナク」

「霊夢！よく聞け!!」

お前がやっている事は

幻想郷を破滅させる行為だ！」

「魔理沙」

「は？」

「ルナク」

「言っただろ！」

「これが失敗したら太陽系は無かったことにされる
即ち幻想郷を殺す事になるんだぞ!!」

「霊夢の攻撃が止み、無想転生が解除された」

「魔理沙」

「騙されるな!!」

「コイツは紫を殺したんだぞ!!」

「ルナク」

「アイツは記憶を消さなくても」

「太陽系を消そうとする奴を倒せばいいと引かなかったんだ」

「他の妖怪賢者全員もだ、」

「そんな事できるわけが無い、なのに!!」

「魔理沙」

「幻想郷全員でやれば..」

「ルナク」

「無理だ!!」

「俺を見るだけで殺す事が出来たとしても」

「瞬殺されるぞ！」

「霊夢」

「...」

第22話 飛べぬ鳥に落とされる

―「反転郷」永遠亭跡地前／空中―

「妖夢」

「黙って下さい」

「ルナク」

スペル

結界「属性結界・炎」

妖夢の太刀筋が炎の結界で止められた

「妖夢」

「嘘の可能性があるので

あなたが言った言葉を信じる事は出来ません

あと、妖怪が鍛えしこの刀に

斬れぬモノなどあんまり無い!!」

結界を破り首を刎ねた

ルナク：残機0

落ちていった死体とは別の場所に

炎の渦が発生しルナクが現れた

「ルナク」

能力発動

巨大に成長したエネルギーの塊が大きく縮んだ

「ルナク」

「無に帰し妖怪よ

その存在を有へと転換せよ」

近くの空間が歪み黒い球体が現れた

妖夢は球体を斬ろうとするが透けてしまつて

斬ることが出来ない

更にルナクは複数の結晶を使つて

新たなエネルギーの塊を作り出した

「魔理沙」

「エネルギー体を狙つて!!」

あれは人をゼロから蘇生する時の
肉体を作る工程、急がないとうつつが復活するぞ!!
全員がエネルギー体に攻撃を始めた

「??」

「まあ待て」

攻撃が全て反転し

それぞれの元に帰ってきた

「妖夢」

「その声、天邪鬼ですね」

「正邪」

「そうさ」

黒い球体が人の形になり、色が徐々に着いてゆく

「ルナク」

「正邪様のお出ました!!」

正邪に気を取られているうちに

エネルギー体の中からうつつの体が現れた

「ルナク」

「その肉体に無き命、有へと転換せよ」

能力発動

再び巨大なエネルギーの塊が大きく縮んだ

「うつつ」

「・・・作戦通りには行きませんでしたか」

「妖夢」

「丁度いい、今晚は鳥料理にしようかと思ってました」

妖夢の太刀筋をポーチから出した日本刀で防いだ

「魔理沙」

「妖夢どうしたんだ?」

「咲夜」

「戦闘モードに入ると辻斬りになるんですよ」

「妖夢」

「聞くところによれば

貴女単体ではそこまで強くないらしいじゃないですか」
罅迫り合いでうつつが押されてゆく

「うつつ」

「ええ、橙さんと同等、もしくはそれ以下ですね

ですが何かしらの援護が得られれば」

うつつの刃が断ち切られ

咄嗟に避けるも右の翼を切り落とされる

「妖夢」

「飛べない鳥はただの鶏肉

食べられるのを待っただけ」

うつつは残った翼でどうにか着地した

「魔理沙」

「逃げろ妖夢!!!」

「うつつ」

「我を撃ち落とし天にて嘲笑う者よ

我が復讐の槍が汝を貫かん」

スペル

「プリエール デ ヴェンジェンス」

魔力で作られた槍が音速を遥に超えて妖夢を貫いた

妖夢：残機1

「うつつ」

「魔理沙は知ってますよね？」

「この技の特徴は」

「魔理沙」

「ああ、

自分が地に足を付けていること

相手が地に足を付けていないこと

相手を恨んでいる事

これら条件に当てはまるほど威力を増す

だろ?」

「うつつ」

「さすがは魔理沙

ついでに言おうと

自分を落とした相手には更に威力が上がります」

「妖夢」

「なんですかあの速さ!!

音を遥に超えてましたよ!!!」

「魔理沙」

「こいつを地に落としたのがダメだったな」

第23話 目からウロコ

―「反転郷」永遠亭跡地前／空中―

「うつつ」

「これで最後です!!」

スペル

「プリエール デ ヴエンジェンス」

魔力の槍が放たれる直前に

何かが割れる音が響いた

「妖夢」

「!？」

飛んでくる槍が輝く矢に姿を変えた

槍よりも軽い矢は簡単に弾くことが出来た

「魔理沙」

「… どういう状態だ？」

目の前に広がる光景がガラリと変わっていた

正邪とうつつでは無くルーミアとルミエルに

小さいはずのエネルギーの塊が元の大きさに戻り

ルナクが影精霊と共に

レミア、フランドール、パチュリーと戦っている

「パチュリー」

「フラン、ナイス！」

「ルナク」

「幻のアトリビュートクリスタルを壊されたか…」

「レミア」

「これで幻影から霊夢達を引き戻せたわね！」

「ルミエル」

「… 姉ちゃん」

「ルーミア」

「戦闘続行!!」

ルーミアは闇で剣を作り構え
ルミエルは光の弓に光を番えた

「ルナク」

「フィールド展開」

スペル

「属性領域」

鏡の幻想郷全域を覆う大きさの結界を展開した

「ルナク」

「ちなみにこれ七曜にも対応してるから安心して
というわけで

レミリア、闇風

フランドール、闇炎

パチュリー、魔然

魔理沙、魔光

咲夜、鋼氷

妖夢、鋼霊

早苗、神風

霊夢、今は光霊に染色

「以上が敵の属性、相性考えて攻撃しろよー」

「魔理沙」

「染色!?!」

「ルーミア」

「よそ見していると食べちゃうよっ..」

斬撃と噛みつきを辛うじて避けた

「ルナク」

「霊夢は能力の影響で元々属性は「皆無」だったんだ

それを紫が今の属性に染め上げたってわけ」

「パチュリー」

「あら、あなたもよそ見してるじゃない？」

スペルカード

日符「ロイヤルフレア」

「ルナク」

「忠告どうも」

スペル

炎光符「ロイヤルフレア」

同じスペルで相殺する

「パチュリー」

「レミイとフランは咲夜のヘルプに行つて！」

「レミリア」

「分かったわ」

「フラン」

「OK!!」

「ルナク」

「シヤナ！」

あれを頼んだ！」

「影精霊」

「確認してくる」

ルナクの服の隙間の影に潜り込んだ

「ルナク」

「行くぞお前ら!!」

スペル

「月光閃光弾」

ルナクが信号弾の様な物を打ち上げた

それと同時にルーミア、ルナク、ルミエルがそれぞれリボンを解いた

それぞれのリボンは頭の上で円を描きながら回転し出し同時に空が割れた

「霊夢」

「博麗大結界が!!」

「ルナク」

「反転郷の結界だ」

「現実世界にはなんの影響もない」

「小学生低学年 程度の背のルーミア、ルミエルは」

「霊夢たちと同じ位の中学生並の背になった」

「ルミエル」

「ごめんなさい!」

スキル

「日光弾」

「向かってくるレミアとフランに日光を浴びせた」

「レミア」

「パチエ!!」

「パチュリー」

スキル

「日光保護呪文」

「フランドール」

「え!?!」

「ルミエルの目が見えない!?!」

「フランが能力を使うための目がルミエルには無かった」

「ルーミア」

「どいて!!」

スペル

「闇剣「無銘」」

「フランドール」

スペル

「禁忌「レーヴァテイン」」

「お互いの刀身がぶつかった」

「レミア」

スペル

神槍「スピア・ザ・グングニル」

「ルミエル」

スペル

光弓「無銘」

投げた槍と光の矢ぶつかる

「ルナク」

スペル

影槍「無銘」

影を固めた槍を構えた

「ルナク」

「いやー… 絶好の満月ですねえ」

月光の影響で幻想郷中の妖怪の特徴が現れた

「パチュリー」

「ワーウルフと同じ様に

満月の光で変化するなんてね

人間辞めたの？」

「ルナク」

「元から生き物じゃねえよ」

第24話 対ルーミア・ルミエル

―「反転郷」永遠亭跡地前／空中―

―自機組&スカーレット姉妹サイド―

「レミリア」

「へえ… 止めるんだ

為す術なく死ぬと思ったのに」

「フランドール」

「ルーミアも本当は強いよね」

「ルーミア」

「くっ…」

「ルミエル」

「後ろ!!」

攻撃を受け流し、霊夢達の弾幕を躲した

「妖夢」

スペル

人鬼「未来永劫斬」

「咲夜」

スペル

メイド秘技「殺人ドール」

躲した隙を狙ったの急襲

「ルミエル」

スペル

光輪「ハロ」

ルミエル自身が激しく発光し

妖夢の目を眩ませると同時に

光の波動がナイフ弾をかき消した

「妖夢」

「くっ…」

「咲夜」

「へえ」

レミリアとフランが瞬時に目の前に現れる

「レミリア」

スペル

「紅色の幻想郷」

「フランドール」

スペル

秘弾「そして誰もいなくなるか？」

「ルーミア」

スペル

「ブラックホール」

「ルミエル」

スペル

「ホワイトホール」

ブラックホールに弾幕が吸い込まれ

ホワイトホールからそれを上回る量が放出される

「フランドール」

能力行使

「きゅっとしてドカーン！」

ブラックホールとホワイトホールが破壊された

「ルーミア」

「… やばいわね」

「ルミエル」

「防戦一方… このままじゃ」

「霊夢」

スペル

霊符「夢想封印」

乱れた呼吸を整える暇すら与えずに攻撃を続ける

「ルミエル」

スペル

「障壁展開」

夢想封印をどうにか防いだ

「ルーミア」

「やるしかない

ルミエル!!」

「ルミエル」

「くそおおおおお!!!」

それぞれの拳に闇と光を纏わせ
激しくぶつけた

「ルーミア&ルミエル」

ラストワードスペル

「対消滅」——OVERDRIVE——

幻想郷中全ての地面が蒸発する程の
強大な爆発が発生した

全員：残基——1

「ルーミア」

「ルミエル、ちよつと肩貸して」

「ルミエル」

「無理、立てない」

「霊夢」

「しょうがないわね」

おでこに御札が貼られた

「早苗」

「封魔の御札ですか…効くんですか?」

「霊夢」

「じゃあおまけに」

霊夢と早苗がペタペタと御札を貼ってゆく

「ルーミア&ルミエル」

「…」

「霊夢」

「これでよし」

「レミリア」

「… 何この紙の山」

「早苗」

「ルーミア達です」

御札で封印してます

それより妖夢さんは？」

「魔理沙」

「あれ？さっきまでここに」

「ルーミア」

「イテ！」

妖夢が魔理沙の横を掠め、紙の山にぶつかった

直後に何者かが同じ道を通ってダガーで妖夢斬りかかった

「魔理沙」

「ミラ!？」

妖夢は横に転がると

そこにダガーでは有り得ない程の深さの切れ込みが入った

「妖夢」

スペル

断命剣「冥想斬」

妖夢の一撃が当たる直前にテレポートし

後ろから蹴り飛ばした

「霊夢」

スペル

霊符「夢想封印」

「ミラ」

スペル

魔砲「スパークキャノン」

ダガーから放ったマスパで弾幕をかき消した

「妖夢」

ラストワードスペル

「待宵反射衛星斬」

刀を振りかぶるがそれにあるべき重みがなかった

「ミラ」

「良い切れ味ですね」

ミラの手には楼観剣の刃だけが握られていた

「魔理沙」

ラストワードスペル

彗星「ブレイジングスター」

「ミラ」

スペル

「ループホール」

魔理沙の目の前とすぐ後ろにポータルが開き

その間を無限にループし始めた

「ミラ」

スペル

「体内転移」

持っていた刀が消え

妖夢の体内に転送された

「妖夢」

「カハッ……」

肩から生えた刃を抜きポータルの中に差し出すと

止まれずにいた魔理沙を高速で繰り返し切り刻んだ

妖夢：死亡

魔理沙：残機1

妖夢の手から刀の持ち手を取ると刃を元の位置に

転送し戻した

「魔理沙」

「お前、そんなに強かったのかよ」

「ミラ」

「いいえ、元々はこんなに強くないけど

ルナ…クのアシストがあるからね

無限の魔力供給と常時回復があれば

反動と魔力を気にせず身体強化が使える

さして、まだ戦うなら相手になるわよ？」

第25話 カウンtdown

―「反転郷」永遠亭跡地前／空中―

「ルーミア&ルミエル」

ラストワードスペル

「対消滅」―OVERDRIVE―

幻想郷中全ての地面が蒸発する程の

強大な爆発が発生した

全員：残機―1

「ルナク」

「今だ!!」

何かに指示を送った

「パチュリー」

ラストワードスペル

火水木金土符「賢者の石」

「ルナク」

スペル

炎水樹鋼地符「賢者の石」

「パチュリー」

スペル

金&水符「マーキュリポイズン」

「ルナク」

スペル

鋼毒符「マーキュリポイズン」

「パチュリー」

スペル

日&月符「ロイヤルダイヤモンドリング」

「ルナク」

光闇符「ロイヤルダイヤモンドリング」

パチュリーへの攻撃を相殺し続ける

「パチュリー」

「だいたい魔力を使ったんじゃない？」

「ルナク」

「それでも無い」

さっきのピチュリで解除された

幻想郷全ての種族の特徴を再発現させた

「ルナク」

「あと1分、あと1分だけ耐えれば勝てる」

ラストワードスペル

」

「パチュリー」

スペル

火水木金土符「ファイブシーズン」――OVERDRIVE――

パチュリーの結界は数秒の間 熱線を受け止めたが

貫通してしまった

パチュリー：死亡

「ルナク」

「あと5分……時間稼ぎされたか」

――自機組サイド――

「レミリア」

スペル

神槍「スピア・ザ・グングニル」

投げた槍はミラの左腕を吹き飛ばした

「ミラ」

「利き手――」

再生した左手でナイフを拾いながら

魔理沙へとレポートする

「魔理沙」

「なんで私ばかり!!」

スperl

恋符「マスタースパーク」

再びテレポートし横から首を切りつける

魔理沙はお下げを切られながらも回避し

再びマスパを撃った

「咲夜」

スperl

メイド秘技「殺人ドール」

ミラに当たるナイフは

全てどこかに転送された

「ミラ」

スperl

「グラビティアクセル」

上下に開かれたポータルの間を

無数のナイフが落ちながら加速している

「ミラ」

スperl

「ソニックナイフ」

無数のポータルが開き

高速のナイフが全方位にばらまかれた

「ルナク」

「ミラ、ご苦労さん

あと数分だ」

ミラの隣に突然ルナクが現れた

それと同時にレミリアとフランから黒煙が発生し

輪郭が歪み出した

「レミリア」

「パチエー！」

「咲夜」

「日光避けと鏡面結合魔法が…」

「フランドール」

「お姉様……」

「ルナク」

「なんで鏡に映れない吸血鬼が

ここに來れるかと思えばそういう事か」

「レミリア」

「咲夜、あとは頼んだわよ」

レミリア：退場

フランドール：退場

「ルナク」

「さて、あと3分」

「靈夢」

スペル

靈符「夢想封印」

「魔理沙」

スペル

魔符「ミルキーウェイ」

「咲夜」

スペル

幻象「ルナクロック」

スペルカードのラッシュを

全て最低限の動きで交わし続ける

「ルナク」

「あと2分」

「靈夢」

ラストワードスペル

「無想転生」

「魔理沙」

ラストワードスペル

彗星「ブレイジングスター」

「咲夜」

ラストワードスペル

「デフレーションワールド」

ルナクは自分の首を飛ばしたり

反射、反転させながら体を動かさずに避け始めた

「ルナク」

「あと・・・ 10秒」

「霊夢&魔理沙&咲夜」

ラストワードスペル

—OVERDRIVE—

後のことを考えずに

ただひたすらに全力をぶつける

「ルナク」

「はい、タイムアップ」

エネルギーの塊に手を向けた

「ルナク」

「能力行使開始

対象物、地球

対存在として投影し有と無の場所の均衡を維持

投影開始」

能力行使

全ての対である程度の能力

第26話

精霊時代の魔素

―「反転郷」地上／元地底の旧都―

エネルギーの塊から殆どの魔力を吸収し

地球そのものを写し取る

ダイナマイトにも耐える耐久力

優れた魔法使いをも遙かに上回る魔力量

表面で起きた事象の記憶

内部に秘める熱量

それらを地球と釣り合う様に

ルナク・トワイダウン
天秤の分銅を変化させる

「ルナク」

「投影完了」

青く流れる水のような髪

生い茂る葉のような緑色のワンピース

胸元で煌めく7色の結晶のブローチ

そして、右肩から頬にかけて伸びる赤い亀裂

「魔理沙」

「なんで地球をコピーしてその姿になるんだよ」

「ルナク」

「擬人化、いいだろ？」

ブローチから謎の粒子が吹き出した

「ルナク」

「身構えなくていいぞ

毒じゃない、むしろ体にめちやくちやいい」

「魔理沙」

「この感じ、魔素か」

「ルナク」

「正解」

「咲夜」

「魔素？」

「魔理沙」

「魔力の粒子の事だ

ご飯で言う所の米粒みたいなもんだな

因みに疲労回復、魔力増強、美容にも良しの

超有益粒子だ」

「ルナク」

「まあ、最近では地球上の魔素濃度が

めっちゃくちゃ低いかな」

「霊夢」

「で、なんでそんな物を出したの？」

「ルナク」

「そりゃ、精霊の全盛期と同じ環境にするためだ」

自然系全ての結晶を出し、魔力を流し込むと

いつも通り光を放ち始めた

が、今回は少し違った

結晶がそれぞれを象徴するモノを纏い始めたのだった

「ルナク」

「自然自体であり、天変地異も起こせた精霊たち

しかしある事件が原因で地球上の魔素濃度が減少

力を失いつつあったが更に弱り

イタズラ好きな妖精へと退化していった

という訳でその力を味わって貰おうか」

黒く闇を纏った結晶からレーザーが魔理沙めがけて放たれた

「魔理沙」

スperl

恋符「マスタースパーク」

レーザー同士がぶつかるど

途端にマスパが黒く侵食され始めた

「ルナク」

「侵食反応」

そのままミニ八卦炉、右腕まで侵食が進んだところで
それらがボロボロと崩れ始めた

「魔理沙」

「は？… 冗談だろ？」

「霊夢」

「!？」

「咲夜」

「侵食… 反応…？」

「ルナク」

「光は闇に侵食される」

今度は紅い炎を纏った結晶からレーザーを

咲夜が受けてしまう

「ルナク」

「溶融反応

氷と鋼は炎によって溶融する」

咲夜の体が熱された氷のように溶けてしまった

咲夜：残機0

続けて早苗に氷を纏う水色の結晶に撃ち抜かれた

「ルナク」

「気体やその流動を象徴する風属性は

冷却や氷を象徴する氷属性を受け凝縮する」

体が収縮し、液体になり始めた

「早苗」

「これ以上は無理ですか…」

霊夢さん！魔理沙さん！

長時間詠唱と私の命を対価とした

奇跡を受け取ってください!!!」

早苗：死亡

「咲夜」

「表にあまり出てこないと思ったら
ずっと詠唱してたんですか…」

「ルナク」

スペル

光水闇符 「存在漂白」

霊夢の周りに白、青、黒3つの結晶が回り出し

エネルギーを注ぎ始めた

「ルナク」

「普通なら存在自体が漂白されるが

奇跡はどう働くかな？」

最終話 異常歴史の焼却

―「反転郷」地上／元地底の旧都―
ルナク

スペル

光水闇符「存在漂白」

霊夢の周りに白、青、黒3つの結晶が回り出し

エネルギーを注ぎ始めた

「ルナク」

「普通なら存在自体が漂白されるが

奇跡はどう働くかな？」

「魔理沙」

スペル

妖器「ダークスパーク」

ミニ八卦炉から闇のレーザーが放たれた

「ルナク」

「魔素を吸って妖器になったのか」

今度は光を纏った結晶からレーザーを放つ

ダークスパークを浄化しながら魔理沙へとレーザーが伸びてゆく

「ルナク」

「光と闇はお互いに弱いんだよ」

魔理沙：残機0

「霊夢」

（魔理沙の残機ももう無いわね…:

くそう…この結界さえどうにか）

スペル

霊符「夢想封印」

しかし弾幕は1つたりとも出ない

それどころか体が透け始めている

「ルナク」

「お！ 始まったか、

今から君は何でもない存在に戻る
世界との干渉を全て絶たれて
ただ傍観するだけになる訳だ」

「魔理沙」

「戻る？」

「どういう事だ」

「ルナク」

「霊夢の能力は常時発動型で

生まれてすぐに働き始め

全ての世界、有の場所、無の場所関係なく

ただ漂うだけの存在になってしまった

そこに紫がやって来て、その能力で

霊夢をこの世界に繋ぎ止めた

そういう過去があるんだよ」

「魔理沙」

「じゃあその繋ぎ止めるモノを消したってことか！」

「ルナク」

「ついでに属性付与やら色々も消えたわけだ

つまり今の霊夢は残機0どころか戦力にすらならない」

「魔理沙」

「あの結晶を何とかすれば!!」

スペル

妖器「ダークスパーク」

「ルナク」

スペル

「ディメンショナルアンカー」

微妙に発光する透明な鎖で縛り付けた

「ルナク」

「この技はその繋ぎ止めるモノを模した物なんだが…

まあ今は関係ない」

「咲夜」

「私の事忘れてない？」

突如ルナクの後ろに現れ、うなじに斬りかかった

「ルナク」

スペル

「ディメンショナルアンカー」

腕を掴まれた

「咲夜」

「巻いただけの鎖なんて私には…!?」

「ルナク」

「第5次元軸移動は鎖で縛られてるぞ？」

抵抗できないように魔理沙と一緒に縛り上げた

「ルナク」

「…必要なエネルギーが貯まったみたいだな」

大きく膨れ上がったエネルギーの玉へと近づいた

「ルナク」

「世界分岐の逆行申請開始

条件…

管理者による歴史干渉、確認

他の解決方法不可、確認

実行権限、確認

行程開始」

エネルギーの塊から衝撃波が発せられた

「霊夢」

「空間が…」

「咲夜」

「時間も歪み始めてます!!」

「ルナク」

「今から全ての光である者がこの世界に現れる少し前まで

過去を全て焼却させて貰う

人理は消えないから安心しろ」

エネルギーの塊から触手のようなものが溢れ出し
空間を割りながらどこかに繋がりはじめた

「ルナク」

「本当はこんな事はしたくなかった…」

この世界自体を無かったことにするのは

この世界の全てを殺すことと同じだからな

でも、やらなきゃ過去が全て消える、全てが無くなる

あの御方がこれを許してくれて良かった…」

管理者を管理するあの御方に感謝を…」

全てが光り輝きながら崩壊してゆく

「ルナク」

「霊夢、また過去で会おう」

第1章 月への侵略計画と喧嘩仲裁 第2ル

ト

第8話 3日目

―「月の裏」都と豊かの海の間―

ルナクが消えたあと、溶岩湖は冷え固まり

朧は消えた場所で治した剣を持ち奴を待った

「ルナク」

「誰待ってるの？」

空間が割れ、そこからルナクが出てきた

「朧」

「誰だろうね」

「ルナク」

「今回はそこまで急ぎの用事じゃないが

いい加減決着を付けようか」

ルナクは朧に変身しながら

リボンを完全に解いた

殺気と覇気が消え、影が薄くなる

そして陽炎のような大きな翼が生えた

「ルナク」

「最終形態とやらになってやったぞ」

「朧」

「能力も変わるのか？」

「と言うか今回は？」

「ルナク」

「全ての対になる能力

相手と同じ力量にもなれるし

反対になることも出来る

あと今回はと言うのは気にしないでくれ」

「朧」

「…」

ルナクに向かって剣とルナティックガンを構える

「ルナク」

「貴様に勝利はない」

「朧」

奥義

「真空斬」

剣を振ると真空の斬撃がルナクへと飛んでゆく

「ルナク」

「よいしょ」

ルナクは斬撃をつまんで退かした

「朧」

「は!?!」

「ルナク」

「スペルカードを知ってるなら使ってみろよ」

「朧」

「スペルカード…を…」

朧は少し考え、スペルカードを発動させた

「朧」

「紙は無いが…」

スペルカード

「模擬スペル」

朧はルナクへと散弾銃を連射する様に

不安定な形の弾を発射する

「ルナク」

「弾幕は初めてだったな」

スペルカード

「超高压圧縮神力式炸裂弾幕」

神力を圧縮した弾を朧に向けて放つ

「朧」

「こんなもの真つ二つに!」

隴は飛んでくる弾を切ろうとした

しかし刃が当たる瞬間、大爆発が巻き起こる

「隴」

「ぐ…」

隴は爆風で地面に叩きつけられた

「ルナク」

「じゃあな、4日目と3日目を

合併するって言つといて」

ルナクは隴の右肩と太ももをレーザーで貫いた

「隴」

「うっ… 待て… まだ…」

ルナクが無視して都に向かって飛んでゆくのを横目に
本部へと無線で報告した

―月の都／門前―

「門番A」

「誰だ貴様!!」

「ルナク」

「ルナク・トワイダウンだ」

「門番B」

「何しに来た!!」

「ルナク」

「月の王に挨拶しに」

門番達の質問に即答したルナクは

2人の頭を掴み、シンバルの様にぶつけた

「ルナク」

「門番達が伸びてるうちに…」

門を蹴飛ばした

「指揮官」

「撃てー!!」

2台の戦車が至近距離でルナクに高圧レーザーを発射した
「ルナク」

スペルカード

鏡面「リバーズリフレクト」

レーザーはそのまま砲身に戻ってゆき

戦車が爆発を起こす

騒ぎになっている内に真上に高く飛び上がる

「ルナク」

スペルカード

式神「夜羽うつつ」

魔法陣からうつつが飛び出し

一際高い建物の上の方のガラスをバズーカ砲で爆破した

「うつつ」

「あそ」

「ルナク」

「よし行くぞ」

「うつつ」

「…来たこと有るんですか？」

2人は混乱した門を後にし、砕けた窓へと飛んでゆく

―月の都／玉座の間―

「大臣A」

「侵略者は都の入口まで来てるようです」

「大臣B」

「ここは門から離れている、すぐ来ることは無いだろう」

突如窓が爆発し、2人の人物が飛び込んで来た

「大臣A」

「侵入者だ！護衛!!」

王の護衛達はルナクを捉えようとする

しかし反撃を喰らい、全滅する

そして王と数名の大臣のみが残った

「うつつ」

「密室化します」

うつつは部屋に結界を張り

部屋から人が出入り出来ないようにした

「ルナク」

「さて、」

ルナクは玉座に座る王の前に立ち

うつつはルナクの斜め後ろに立った

「ルナク」

「はじめまして、月の王

私の名前はルナク・トワイダウン

そして従者で式神の」

「うつつ」

「夜羽うつつと申します」

王は椅子から立ち上がり、豪華な銃を手にする

「月の王」

「出てゆけ、二度と来るな」

ルナクは眉間に銃を突き付けられたが

そのまま話を続ける

「ルナク」

「今回は、幻想郷の新たな賢者として挨拶に参りました」

王は引き金を引いた

眉間に風穴が開き、紅い飛沫が舞う

しかしルナクは倒れない

「大臣C」

「なぜ死なない・・・あの銃は戦車を貫通する威力だぞ!？」

「ルナク」

「お土産としてこちらを」

ルナクは何事も無いように小さな綺麗な石を渡した

「月の王」

「貴様・・・何がしたいんだ」

「ルナク」

「挨拶をしに来ただけです」

因みに、その石を砕けば今日負傷した者と
物品が元通り全快しますそれでは」

結界と共にルナク達が消えた

「兵士」

「王様！(´▽`)無事ですか!？」

兵士達が玉座の間へと流れ込んでくる

「月の王」

「ああ、無事だ」

「依姫」

「申し訳ありません」

兵からの通達があつたのですが
結界の影響で・・・」

「月の王」

「あいつが侵略者か？」

「依姫」

「恐らく」

「大臣A」

「今すぐに幻想郷に兵を送るべきだ!!」

「大臣B」

「いや、あいつへの有効的な攻撃方法が分からん限り

出兵は控えるべきだ!!」

大臣達が騒ぎ出した

「月の王」

「まあ良い、あちらも危害を加える気は無いようだ
本当に何がしたかったのだろうか・・・」

王は石を粉々に握り潰した

――「幻想郷」永遠亭――

翌日

「永琳」

「あんた何がしたいのよ…」

「ルナク」

「暇だったから… だったかな」

「うつつ」

「展開グダグダ過ぎませんか？」

「と言うかりセマラしてる様な反応でしたね」

「ルナク」

「気にするな」

「永琳」

「はー…」

「永琳は大きなため息をついた」

「永琳」

「もうこんな事しないでね」

「こつちも色々めんどくさかったんだから」

「月の王から通信が来たりしたし」

「ルナク」

「善処する」

第2章 陰陽と厚み無き境界線 第2ルート
第1話 闇夜の閃光―Quartet Side

―博麗神社周辺の森―

―夜―

博麗神社周辺の森にひっそりと建つ
さほど大きくないログハウス

そこには小さな人喰い妖怪が住んでいた

「ルーミア」

「そろそろ寝ようかな？」

たしか明日はチルノ達と遊ぶ約束があつたはずだし
やっぱ寝る時は体が小さい方が

広々寝れていいわよねー

前も同じこと言ったけど」

屋根裏の寝室に置いてあるベッドに飛び込んだ

「ルーミア」

「昼の10時に紅魔館の門に集合だから

明日は7:30頃に出よ...来たわね」

空が明るくなり始めたのを確認し

サングラスを装着する

「ルーミア」

「ハイー」

ベッドの脇の窓から空を見た

太陽が出てる訳では無いのに

明け方の様に空が薄暗くなっている

「ルーミア」

「...あれ？」

閃光が発生しない？」

空に小さな光の玉が発生した

しかし光はあまり強くなかった

サングラスを外し、首を傾げていると

光の玉が鋭い閃光を発した

「ルーミア」

「きゃー！！イッタイ目がー！！！！」

ガッツリと閃光を見てしまったルーミアは

目を押さえながら床を転がり回った

「ルーミア」

「あー… フェイントオ…」

—翌日—

—「幻想郷」紅魔館／門の前—

「チルノ」

「遅いぞー！！ルーミア！！」

「ルーミア」

「ごめんごめん！」

昨日の夜、空が光ってから寝付けなくて…」

「大妖精」

「空？」

「チルノ」

「何時頃？」

「リグル」

「どこら辺？」

3人は首を傾げた

「ルーミア」

「だいたい11時頃かな？」

場所は分かんない」

「大妖精」

「子供なんだから早く寝ないとダメだよ…」

「チルノ」

「アタイなんて今日は5時に起きたんだぞ!!」

「リグル」

「それは早すぎるよ」

「ミステイア」

「ごめんねー」

2人が遅れてやって来た

「チルノ」

「おそーい!!」

「ミステイア」

「昨日の夜屋台をやってたら空が光って

そのせいで中々寝付けなくて」

「ルーミア」

「ミスチーも被害者ね」

「チルノ」

「みんな揃ったし鬼ごっこしない？

いつもと違ってなんでも有りのやつ」

「大妖精」

「飛んでも弾幕で邪魔してもいいって事？」

「チルノ」

「そゆこと」

「リグル」

「虫も？」

「ミステイア」

「鳥目攻撃も？」

「ルーミア」

「闇も？」

「大妖精」

「瞬間移動も？」

「チルノ」

「ドンと来い！美鈴のどこ開始ね

ルールは

湖周辺で

鬼と逃げる側のチーム戦

1人でも5分間逃げ切れれば逃げる側の勝利

捕まった人は紅魔館の門で待機！

復活なし!!

更に今回は特別ルールで鬼はメイリンに頼んで

1回だけ指定した人の方向にレーザを撃って貰えるよ!!」

「ルーミア」

「つまり相手の位置が分かると…

美鈴にアポ取ったか？」

「チルノ」

「アタイは最強だからもう取ってある！

じゃあ大ちゃん鬼ね!!」

「リグル」

「最初っから強敵だな…」

大妖精以外が蜘蛛の子を散らすように散ってゆく

「大妖精」

「それでは美鈴さん

リグルに向かってお願い出来ますか？」

「美鈴」

「了解です！」

美鈴は気を能力で探り、その方向へとかめ〇め波
の様な光線を放った

「美鈴」

「あ…」

「大妖精」

「当たったんですか？」

「美鈴」

「はい… クリーンヒットしました…」

リグルさんに」

美鈴は冷静に答えた

「大妖精」

「じ、じゃありグルを捕まえて来ます・・・」

第1話 闇夜の閃光―Mirror Side―

―「反転郷」紅魔館／次元ディメンショナルの書庫―

―夜―

「ルナク」

「これでよしー!」

大きな針妙丸の姿をした

ルナクは本を閉じ、その本を書庫に登録した

「うつつ」

「ルナク様、お風呂が湧きました…」

つかぬ事をお伺いしますが何をなさっていたのですか?」

「ルナク」

「月からこっさり奪った技術を記録してたのさ」

ルナクの手から本が飛んでゆき

奥の方へと飛んでゆく

「ルナク」

「ところで、一体誰に変身すれば分かりやすいと思う?」

「うつつ」

「大きい針妙丸なら大きさで分かりやすいと…」

まあそれでいいんじゃないですか?」

「ルナク」

「なら今日はこのままで居て見るよ

風呂入ってくる」

うつつはルナクが書庫を出たことを確認し

通信機を取り出すと

いつもと違う周波数で通信を開始した

「うつつ」

「作戦開始!!」

―「反転郷」紅魔館／正邪の部屋―

「正邪」

「了解!!」

チビもいいか？」

「針妙丸」

「いいよー」

―脱衣所―

「ルナク」

「正直言うとう風呂も必要無いんだけど

娯楽とイメージの為・・・しようがない・・・」

ルナクがブツブツ言いながら脱衣所に入った

―次元の書庫―

「うつつ」

「これより

ルナクは男か女か目視確認作戦

を開始する」

うつつは正邪の部屋に向け、移動を始めた

「正邪」

「機材に問題なし

ターゲットの入室を確認

目視で確認出来ません」

正邪達は風呂に仕掛けてある

うつつ お手製の隠しカメラの映像をテレビで見ている

「うつつ／通信機」

「なら別のポイントだ」

―脱衣所―

ルナクは風呂場の扉を開けた

「ルナク」

「・・・そろそろか」

―正邪の部屋―

「うつつ」

「どうだった？」

うつつは部屋に入ると同時に聞いた

「正邪」

「いまさつき対象をロストしました…」

「うつつ」

「そう…え？」

「正邪」

「カメラから突然消えまして…」

「うつつ」

「まさか、スパイが情報を…」

「針妙丸」

「ところで今は誰に変身してるの？」

「2人が残念そうにしている中、針妙丸は質問した」

「うつつ」

「貴女のはずです」

「針妙丸」

「え!？」

針妙丸の顔が赤くなった

—「幻想郷」上空—

「ルナク」

「大浴場の鏡を越すようにレポートしたとは思うまい

… 負荷きついな」

少しすると目の前に空間の穴が空き

光が大量に漏れ出し始めた

「ルナク」

「15、14、13、12… 3、2…」

穴から強烈な閃光と共にルミエルが出てきた

「ルミエル」

「どうやら成功し」

ルナクはラリアットしながら急降下

地面へと叩きつけた

「ルミエル」

「ちよ」

有無を言わさず髪に御札を縛り付けると
ルミエルは小さな少年へと縮んでしまった
「ルナク」

「お前のせいで大変だったんだから
協力して貰うぞ」

「ルミエル」

「…ひゃい」

第1話 闇夜の閃光―Phantasm Sid

e―

―博麗神社／寢室―

〔霊夢〕

「そろそろ寝るか…」

布団を押し入れから引っ張り出し敷いた

〔霊夢〕

「冬は紅魔館とかお屋敷の方が暖かいけど

夏は神社の方が涼しいのよねー」

布団に入り、目を瞑ろうとした瞬間

空がしらみ始める

〔霊夢〕

「げ!?もう朝?」

早苗から借りたボサツトモンスターやり過ぎたか?」

襖を開け空を見ると光の玉が浮いている

〔霊夢〕

「キ〇ラ?…いや、アレはゲームの…でも幻想郷なら…」

光の玉が閃光を放ち、夜の闇がかき消される

〔霊夢〕

「光線は出さないのね… って目がー!!!」

目を抑え転がり回った

〔霊夢〕

「あー… バルスバルス…」

再び空を見上げるが既に光の玉は無くなっていた

〔霊夢〕

「… まあいいや、ルナクが処理してくれるでしょ」

再び布団に入り、そのまま寝た

―翌日―

「魔理沙」

「おーい！霊夢ー！朝だぞー！起きろー！」

朝から魔理沙が博麗神社に来て

寝室の襖を開けてゆく

「霊夢」

「ううん……あと5分……」

「魔理沙」

「まさか昨日の夜にボサモンやり過ぎたのか？」

魔理沙は上布団をひっぺがし、押し入れに押し込んだ

「霊夢」

「違うわよ……」

昨日の夜、空が光ったでしょ？

その後直ぐに寝たわよ……」

ムクっと起き上がり、下布団を押し入れにしまった

「霊夢」

「今何時？」

「魔理沙」

「8時

そういえば確かに光ったな、異変か？」

霊夢はスタスタと台所に向かい朝食の準備をした

「霊夢」

「確か昨日の残りが」

夕ご飯の残りを取り出して食べ始める

「魔理沙」

「なあ霊夢」

「霊夢」

「なに？」（モグモグ）

「魔理沙」

「なんか気づかないか？」

「霊夢」

「なんかイタズラでもしたの？」（モグモグ）

食後のお茶を啜りながら体に起きている異変を探った

〔霊夢〕

「…確かに」

〔魔理沙〕

「味噌汁にタクアン入れた」

〔霊夢〕

「…そっちなね」

「と言うか大根の味噌汁だから気づかないわよ」

「…タクアンだ」

「霊夢は茶碗を洗い、籠に干した」

〔紫〕

「あら、2人ともお揃いで」

「スキマが開き」

「紫が窓から身を乗り出すかのように顔を出した」

〔魔理沙〕

「紫が来たってことは異変か?」

「霊夢と魔理沙が居間に移動するのに」

「紫はスキマを平行移動させてついて行く」

〔紫〕

「大したことは無いんだけどね」

〔霊夢〕

「昨夜の閃光の事?」

〔紫〕

「そう、藍に調べさせたのよ」

「でもなんの痕跡も残ってなかった」

「主犯が誰かも、なんの為かも分からない」

〔魔理沙〕

「こりゃ難題だな」

〔紫〕

「被害者は夜行性の人達ぐらい」

〔魔理沙〕

「そういえば鏡の連中は？」

魔理沙が鏡に指を指す

「紫」

「連絡が取れていないわ」

「霊夢」

「またアイツらの仕業？」

霊夢は熱いお茶を啜った

「魔理沙」

「もう8月だぞ？」

よく熱いお茶飲めるよな…。」

「紫」

「暑い日こそ熱いお茶って言うじゃない？」

「魔理沙」

「いやいや、チルノに冷やして貰った麦茶が1番だ」

第2話 談話

―紅魔館／エントランス―

「大妖精」

「すみませーん！」

「咲夜」

「はい！」

いきなり目の前に咲夜が現れた

「大妖精」

「なんか元気いっぱいですね」

「咲夜」

「なんか朝から元気が満ち満ちて」

「チルノ」

「怪我の手当を頼む!!」

膝を擦りむいたチルノと

特に怪我をしていないルーミアに

運ばれてきたのは

レーザをもろに食らったリグルと

チルノの弾幕を大量に食らったミスティアだった

「咲夜」

「では医務室へ！」

6人は医務室へと向かった

「ルーミア」

「ごめん大ちゃん！」

みすちーを預かってて」

「大妖精」

「え!?!ちよ」

ルーミアは大妖精にミスティアを渡すと

廊下を逆方向に走って行った

―紅魔館／空き大部屋―

広い紅魔館にも空き部屋はある様で

そのうちの1つの部屋にルーミアは入っていった

「ルーミア」

「さてと… あったあった」

部屋の片隅にある鏡を起こし鏡面に手を当てる
すると魔法陣が浮き出て鏡全体が一瞬輝く

―「反転郷」紅魔館／居間―

置いてある鏡が輝き、ルーミアが出てきた

「ルナク」

「どしたー？」

問題発生？」

「ルーミア」

「あの時と同じ

怪我の治療」

ルーミアはそれだけ言うと鏡に触れて

幻想郷の紅魔館へと戻って行った

「ルナク」

「そういえばそうだったな

うつつ！ 救急箱持って行くぞー」

「うつつ」

「了解です！

レベルは…

一応全部持っていきますね」

「ルナク」

「いや、弾幕傷と刺突傷のレベル1で」

「うつつ」

「だいぶ軽傷ですね」

―「幻想郷」紅魔館／医務室―

「ルーミア」

「おまたせー」

「大妖精」

「遅いよー…どこ行つてたの？」

「ルーミア」

「ちよつと花を摘みに…」

「チルノ」

「トイレか…」

「ルナク」

「そこは伏せてやれよ…」

鏡からルナクとうつつが出てきた

「咲夜」

「よかつた…援軍が来た…」

—少女達治療中—

「ルナク」

「よし、簡単な怪我だったな」

やったのは湿布貼つたり包帯巻いた程度だった

「咲夜」

「やったこと無かつたから…」

「ルナク」

「怪我の度合いを見てからにしろよ…」

「ルーミア」

「まあいいじゃないの大したことなくて

あと私から」

「ルナク」

「なんか用か？」

「ルーミア」

「オナ^ルテイ^ミス^エウイ^ルシア^はカ^回フレ^取イ^しム^たルの^{の?}」

「チルノ」

「え?なんて?」

チルノが首を傾げた

「ルナク」

「…ア^今デイロオ^所テイエトイオロコトナ^りミ^だ」

「大妖精」

「はい？」

「ルーミア」

「アツ^わタカ^かウ^た」

「ルナク」

「それじゃあ帰ります」

「咲夜」

「あつたカウ^牛?… あ!ありがとうございます!」

2人は鏡の中へと帰って行った

— 「反転郷」 紅魔館／医务室 —

「うつつ」

「暗号…ですか」

「ルナク」

「うつつなら何を言ったかわかるだろ？」

「うつつ」

「ええ、ルミエルさんとやらの事ですね

作戦は聞かされてますし」

「ルナク」

「正邪達には言うなよ」

ルナクは真剣な眼差しをうつつへ送った

「うつつ」

「それを条件に地下のおしおき部屋回避ですから」

第3話 元凶命名会

―「反転郷」紅魔館／地下牢―

「正邪&針妙丸」

「おかえりー」

「出してー」

「ルナク」

「あと3日な」

「正邪&針妙丸」

「えー」

「正邪」

「ところで昨晚の閃光はなんだったんだ??」

「ルナク」

「あれか？」

「あれはちよつとした異変だ」

「正邪」

「もしかして永琳がまた?」

「針妙丸」

「それとも空?」

「ルナク」

「いや、俺の身内」

「正邪」

「闇と影と来たら、次にくるのは」

「針妙丸」

「光!?!」

「ルナク」

「おつとそこまでだ」

「それ以上深追いするな?」

「正邪&針妙丸」

(凶星だな)

「正邪」

「で、どうすんだ？」

「ルナク」

「霊夢達にシバいてもらう」

「正邪」

「私らは？」

「ルナク」

「あと3日な」

「それよりうつつ」

「不意打ちで手の甲を爪で引つ掻いた」

「うつつ」

「いてっ！」

「正邪」

「どうしたいきなり!？」

「ルナク」

「うわあ… やっぱカラスの血は苦手だな」

「爪に着いた血をペロリと舐めた」

「うつつ」

「気に触りますね… ところでどうしていきなり」

「私の血を?… おおおおおお… 鳥肌が」

「ルナク」

「今晚は私がスープを作るね」

「うつつ」

「やめて… あれ?… でも… ん？」

「うつつがひとりでに混乱し始めた」

「正邪」

「お前何をした!!」

「ルナク」

「大丈夫だ、味方が増えるだけだ」

「2人目のな」

「正邪」

「は？」

ルナクはスキマから蠢くずた袋を取り出し投げ捨てた
「??？」

「ん!!」

「ルナク」

「紹介しよう！」

玉兎のオボロくんだ!!」

袋の紐を解くと

白いうさ耳が生え、縄で縛られた男が出てきた

「オボロ」

「んんんんー!!!」

「ルナク」

「うるさい」

「うつつ」

「玉兎… 鈴仙さんと同じ月のウサギですよね？」

「ルナク」

「そう」

オボロの口に唾えさせていた布を外した

「オボロ」

「おい!!」

痛いじゃないか!!

「ってここは… 地球か!!」

「ルナク」

「あたり

「さして、就職祝いに漢字の名前をあげよう」

「オボロ」

「就職祝い? 誰のだよ」

「ルナク」

「君の執事就職祝い

「先輩はこの地獄鴉の娘な」

「オボロ」

「地獄の!? け…穢れの塊じゃないか!!」

芋虫のようにクネクネと逃げ始めた

「ルナク」

「オボロ君、君には朧月の「朧」の字をあげよう

まあ、前から俺や月のお偉いさんには

そう呼ばれていたかもしれないが

これで正式に君の名前は漢字になった訳だ

では改めて、よろしく「夜月 朧」

「朧」

「残念だな

直ぐに月から救出部隊が来る

お前らはそこで終わりだ」

「ルナク」

「いや、来ないよ」

「朧」

「…は？」

「ルナク」

「だって月の王に二度とこちらから侵略しない代わりに

君を貰ったんだから

逆にお迎えが来たら月の都は消滅することになるぞ」

「朧」

「…」

朧は全ての行動を止め、放心状態になった

第4話 再び2度目の誕生

―「反転郷」紅魔館／地下牢―

「ルナク」

「次はうつつだ」

「うつつ」

「はい？」

ルナクはスキマから培養カプセル一機を取り出した

「うつつ」

「…私のクローンですか」

「ルナク」

「本当はうつつが致命傷を負ったときとか

移植が必要な時の為に作ったドナークローンだけど

お役御免となったから利用させてもらおうと思ってな」

「うつつ」

「確か回復系の術が効かず

自然回復しか見込めない体質対策でしたっけ？」

「ルナク」

「そゆこと

このクローンにうつつの魂を一部切り取って植え付ければ

その体質も改善し、味方も増える訳だ

前回は時間の関係上分身を使ったせいで

色々不都合があつたけど

この方法なら不都合なくできるはずだ」

「正邪」

「前回？」

「前も同じような事したのかよ」

「ルナク」

「まあな

で、うつつにして欲しいのは

今から色々するけど決して抵抗するな

特に精神が乗っ取られそうになってもだ」

「うつつ」

「精神が乗っ取られるような事するんですか!？」

「ルナク」

「大丈夫大丈夫、多分絶対上手くいくと信じてるから」

「うつつ」

「えええ…（…）」

「ルナク」

「じゃあ行くぞー」

霊属性のアトリビュートクリスタルを取り出し

魔力を送り始め

カラスアゲハの様な影精霊の羽を生やした

「ルナク」

「カラスアゲハの様に青色が入った美しい黒い羽

残念ながら風をとらえることは無い

運命さだめに敗れただ影のように地に這い蹲る運命にある

闇に願いを月に祈りを

自分を嘲笑いし空の民への復習を

「うつつ」

「!？」

無意識に転移魔法のポータルを開いた

「ルナク」

「闇と月は

烏を屠りし者へ宵闇の魔槍を、

復讐の裁きを与えた」

魔力で形成された槍を振りかぶった

「うつつ」

「来る!」

「ルナク」

スペル

「プリエール デ ヴェンジェンス」

投げられた槍はポータルを通り

ルナクの後ろの壁に突き刺さった

「ルナク」

「まだ行くぞー」

スキマから1本のダガーを取り出すと魔力を込め始めた

それに対してうつつは針妙丸の縫い針を拝借し

同じく魔力を込め始めた

「ルナク&うつつ」

スperl

「スパークキャノン」

ルナクの炎のような赤紫色の模様が浮き出たダガーから

マスタースパークの様な光線が放たれた

「うつつ」

「これじゃ無理ね」

針を捨て

自身に身体強化野魔法をかけて光線を交わした

「正邪」

「… 何だこの魔法、一昔前の手法ばかりだ」

「うつつ」

「それでも最先端の技術なんだk!!」

突然うつつが倒れた

「ルナク」

「タイミングは完璧だな」

スperl

「魂の剥離」

倒れたうつつの口から妖夢の半霊の様な物が出てきた

「ルナク」

「よし、魂の侵食状態も良い」

うつつの魂の一部分を慎重にちぎり取り

クローンに埋め込んだ

「ルナク」

「完了、あとはこれを戻せば」

魂をうつつの口に押し込んだ

「うつつ」

「は！」

「……あれ?……終わりました?」

「ルナク」

「うつつの方は終わったぞ」

あとはクローンの方が動けば完璧なんだが」

カプセルの培養液に浮かぶうつつのクローンは

ピクリとも動かない

「ルナク」

「……バイタルは正常、脳波は……予定通りだな」

しばらくするとクローンの目がゆっくりと開いた

「正邪」

「ところでこれはうつつなのか?」

なんか魂を切って移植してたけど」

「うつつ」

「え!?!……魂を?」

「ルナク」

「いや、うつつじゃないぞ」

詳しく話すと長いから簡単に言うと

俺の師匠だ」

「針妙丸」

「師匠って七夕の短冊に書いてあったミラっていう」

「正邪」

「ばか!!言っちゃダメだって!!」

「ルナク」

「ほう、見るなって言ったのを見たのか……」

まあ見るなって言う方が無理か、まあいいや

針妙丸が言った通り、彼女の名前はミラ・レゾナ

種族は人間、職業魔法使い

主に転移に関する魔法を使う程度の能力
とでも言っておこうか」

カプセル内のクローンは状況が掴めてないらしく
キヨロキヨロと辺りを見回している

「ルナク」

「さて、タオルとか服とかを持ってきてくれ

彼女にとって2度目の誕生だ」

第5話 超高速の妖怪拐いと月兔

—博麗神社／縁側—

「霊夢」

「さて、そろそろ行きましようか」

「紫&魔理沙」

「どこに？」

「霊夢」

「昨晚のお返しに」

—「反転郷」紅魔館—

「ルナク」

「さて、そろそろ行ってくる」

「うつつ」

「どこへです？」

自身のクローンに服を着せながら尋ねた

「ルナク」

「いや、ちよつとミスしたかもしれないからその確認

何かあつたら呼ぶ」

そう言うとき窓から何処かに飛んで行った

「ミラ」

「どしとー」

「うつつ」

「いえ、気にすることはありません」

「ミラ」

「それよりすごいね

このジダイのマホウって

翻訳魔法がこうも簡単に馴染みやすいなんて」

かけたばかりの翻訳魔法に驚いているようだった

—「幻想郷」輝針城—

「ルナク」

(あの時、魔理沙と昨夜は時空固定をしたからいいだろう

問題は霊夢だ

能力で全てから浮いた状態でリセットを受けた

紫もリセット範囲は全ての空間だから問題無いだろう

もしかしたら記憶があるかも知れない… そうだと厄介だな)

—迷いの竹林／上空—

「霊夢」

(とても思っているはず

じゃないと行くだけ無駄)

「魔理沙」

「で、どこに行くんだよ」

「霊夢」

「輝針城よ」

「そこで今までのカ리를返させて貰うわ」

—輝針城—

「ルナク」

「… やっぱりか」

ポケットの通信用の石でそれを伝えようと

出せる最高の速度で紫へと突っ込んだ

—迷いの竹林—

「紫」

「…」

まるでスナイパーライフルに撃ち抜かれる様に

ルナクに捕まれ、空間を割って出来た

無の場所への割れ目に叩き込まれた

「霊夢&魔理沙」

「!?」

「ルナク」

「… 輝針城にて待つ」

一言言い残すと自分も割れ目に入り
それを塞いでしまった

「魔理沙」

「紫!!」

「霊夢」

「… 行くわよー!」

— 「無の場所」 —

「紫」

「ルナク」

「これはどういう事かしら?」

「ルナク」

「すまないね」

「今回は特に余裕が無くて」

「しばらく封印させてくれ」

「スペル」

「デイメンシヨナルアンカー」

「グリッドアンカー」

「紫を時空と空間座標に縛り付けると」

「早々に無の場所を後にした」

— 「幻想郷」／輝針城 —

輝針城の頂上、城で言う石垣の底面に着くと

見慣れた顔と首輪を着けた見慣れない顔の2人が立っていた

「霊夢」

「そのウサギは？」

「うつつ」

「私の部下です」

「今日が初仕事ですので上手く出来なくても許して下さいね」

「朧」

「おい、アイツら殺せば月に帰してくれるんだろうな？」

「うつつ」

「ええ、2人倒せばね」

「朧」

「軍人を無礼^{なめ}るなよ」

腰の刀とうさ耳の付いたメガホンの様な銃を構えた

「うつつ」

「御二方、こいつは残基1ですので

完全に殺さないで下さいね？」

「魔理沙」

「めちやくちやこつちを舐めておきながらそれを言うか？」

「うつつ」

「早く月に帰りたくてうずうずしてまして・・・」

「あ、私は手を出さないのご安心を」

「朧」

「話が長い!!」

「霊夢に斬りかかった」

「魔理沙」

「スペルカード」

「恋符「マスタースパーク」」

「朧にクリティカルヒットした」

「魔理沙：残機4」

「魔理沙」

「は!？」

「朧」

「騙すような真似をしてすまないな」

でも、手段を選んでいる暇は無いでね」

「霊夢」

「確かにマスパを受けていた
でも後ろにいる……」

魔理沙！相手は幻影系の能力持ちみたいよ！」

「魔理沙」

ラストワードスペルカード

彗星「ブレイジングスター」

彗星の如く朧に突進する

「朧」

スペル

「朧影―幻朧月睨（ルナティックレッドアイズ）」

撃った弾幕が消えたり現れたりを繰り返しながら
広範囲にばらまかれた

しかしそれをかき消しながら魔理沙は突き進む

「朧」

スペル

「三重弾斬―三層一重」
さんそうひとかさね

3人に増えた朧が飛び上がってトンネルを作り
通過する魔理沙にほぼ同時に放った

斬撃と弾幕を3つずつ計18の攻撃を浴びせた

魔理沙：残機3

朧は1人に重なる様に着地すると

今度は霊夢に斬りかかった

「霊夢」

スペルカード

霊符「夢想封印」

「朧」

スペル

「四重斬撃―十層一重」

今度は10人に増え、9つの弾幕を相殺

残りの1人に4回の斬撃を一瞬にして与えた

「霊夢」

「それは人形よ?」

斬られた人形は大量の御札に戻り

地に朧を括りつけた

その直後に

どこからともなく9つの輝く弾幕が朧を襲った

「魔理沙」

「夢想封印!?!」

「うつつ」

「だからあれほど慣れない能力を使うなど言ったのに」

「霊夢」

「能力?」

やっぱりね

それでどんな能力かしら?」

「朧」

「絶対言わねえ」

今にも死にそうなぼろぼろの体で

拘束から逃げようともがいた

「うつつ」

「世界はちよつとした事で未来が分岐します

朧の能力は分岐する未来を分岐させずに重ね

更に境界を曖昧にします

本来は同時に複数の事象を重ねる

ようはシュレディングアの猫の状態を作り出す能力です

そして今は自爆で弾幕を防いだ9つ世界線を切り離したが故に

「この世界での9発は避けられた」

というように世界からの矛盾に対する修正が入り

夢想封印が再開された訳です」

ゆっくり朧に近づくと

その首をナイフで突き刺した

臙：残機0

「うつつ」

「さて、お帰り頂いたところで」

ポケットから1本の注射器を取り出した

「うつつ」

「次は私です」

第6話 地獄鴉

―「幻想郷」／輝針城―

「霊夢」

「その注射は何？」

「うつつ」

「何って、ただの抗うつ剤ですよ

まあ、危険な濃度ですけどね

実は私、生まれつき感情が殆ど無いんですよ

何にも興味なく、怪我しても恐怖を感じない

空腹でも食事を摂らない

そんな超重症な鬱患者にはこれぐらいじゃないとね？」

注射器を首筋に刺し、薬液を注入してゆく

「うつつ」

「まあ、ルナクと出会ってから今ぐらいには回復というか感情が芽生えたんですけどね」

空の注射器を投げ捨て、深呼吸をした

「うつつ」

「…きたきた、この感覚…ははは…」

髪色が徐々に紅く発色し

陽炎が身体から立ち始めた

「魔理沙」

「属性変化か!？」

「うつつ」

「地獄鴉は本来、極限状態になると

体温が急上昇して赤くなるんですよ

だから変化ではないです

極限状態になっただけです」

紅く輝く瞳で魔理沙を睨み返した

「魔理沙」

「クッ！」

スペル

魔砲「ファイナルマスターパーク」

「うつつ」

スペル

「ガードストライク」

マスパの中を突っ切り魔理沙の右手を蹴飛ばした

「魔理沙」

「っ!？」

あつつつつつ「!!!!!!」

ミニ八卦炉は弾き飛ばされ

右手は直接触れた部分が炭化し、大火傷を負った

「霊夢」

「魔理沙!」

「うつつ」

「うるさい」

高速ホーミング弾を数十発霊夢に撃った

「魔理沙」

ラストワードスペル

彗星「ブレイジングスター」

間近でのスペル避け

箒を掴みよじ登ると魔理沙に抱きついた

「魔理沙」

「ああああああああ!!!!!!」

「うつつ」

「熱いですか?」

熱いですよねえ?

でもほらもう熱くない

だって感じる肉も皮も、もう炭になっちゃった

さあどうしよう?

箒のコントロールももう出来ない

さあどうしよう?

早くしないと地面にぶつかっちゃう」

「魔理沙」

「なら… お前も!!」

スペル

魔法の鎖

ポケットから細い鎖が伸び

うつつに巻き溶けてゆく

「うつつ」

「あらら

鉄なんて簡単に溶けちゃうよ？

5000度だっけ？

まあいいや、そろそろ行くね？」

うつつが離脱した数秒後に魔理沙は地面に追突した

魔理沙：残機2

「霊夢」

ラストワードスペル

「夢想転生」

この世界自体から浮き

世界との関係を絶った

「うつつ」

「逃げるの?」

逃げちゃうの？

友達がこんな苦しんでるのを見て逃げちゃうんだ？

まあしかたないよね？

生存本能ってやつ？

けどいいや、触れるおもちゃと遊んでよつと」

魔理沙が復活した瞬間にサマーソルトを繰り出し

天高く打ち上げた

「霊夢」

神技「封印の儀式」

大量の御札がうつつに向かって放たれた

「うつつ」

「封印するの？」

「その方が長持ちするね」

打ち上げられた魔理沙を御札の大群へと蹴飛ばした

「霊夢」

「!？」

魔理沙に大量の御札が張り付き

その姿を小さな石へと変えてしまった

「うつつ」

「あらら」

「こんなになっちゃった」

落ちた小石を拾い上げると

ドロドロと溶け落ちてしまった

魔理沙：消滅

「霊夢」

「…」

「うつつ」

「どうしたの？」

「そんな顔して

そんな怨みのこもった目をして

そんな唇を噛み締めて

そんなプルプル震えて

怒ったの？」

「怖いの？」

「悲しいの？」

「哀れに思ったの？」

「霊夢」

「スペル

「封魔針」

投げた針は瞬く間に溶け落ちてゆく
スペル

霊符「夢想封印」

放った光弾は口から放つ炎でかき消されてしまう

「うつつ」

「もう終わり？」

もつと遊ぼ？

もつともつと！

ねえねえ？

早く早く！」

純粹無垢な眼光

その瞳は狂気とは無縁の煌めきを放つ

残酷な純粹さ

その笑みは虫を潰して遊ぶ子供のよう

たかが注射1つ

たかが下級妖怪

その先にあったのは

今までこちらが1枚上手だった妖怪では無く

ただの絶望だった

「霊夢」

ラストワードインポッシブルスペルカード

「夢想転生」――OVER DRIVE――

御札を全速で全力で

逃げ場な無いほど大量に高密度で放ち続ける

「うつつ」

ラストワードスペルカード

「完全なる夜の羽」

漆黒の羽を大量に、高速で投げつけてゆく

赤と黒の壁がぶつかり

その勢力は拮抗し始める

「うつつ」

スペル

「ガードストライク」

漆黒の羽を放ちながら御札の壁に飛び込んでゆく

「霊夢」

「…」

(なんで… なんて来れるの…)

「うつつ」

道具使用

「超次元ワイヤーフック」

霊夢にフックを引っ掛けると

強制的に夢想転生が解除され

この世界に括りつけられた

「うつつ」

「さすがルナク」

スペルカード

深淵流星「アビス ボライド」

超高温の炎を纏いながら突進し

霊夢もろとも天高く上昇してゆく

「霊夢」

(やばい…)

天高く登ると

地面まで突進し始めた

「うつつ」

「3… 2…」

途中で輝針城を貫通し、地面が近づいてくる

「うつつ」

「1…」

霊夢：残機 8

最終話 絶望／回帰

―輝針城下の森―

葉が赤く燃え

木々が紅葉しているかの様な光景が

着地点に広がっていた

勝てっこない

夢想転生も攻略された

ダメージは通るが残機を削るのに一体何度やられるのか

「うつつ」

「あ、いたいた」

生い茂る森がうつつ1人通るだけで

その熱気に当てられ焼け落ちてゆく

「うつつ」

「ルナクがいなかったらとつくに消耗仕切って死んでるよ

あとでお礼言わなきゃ」

スperl

「回復魔法」

せつかくのダメージが消えてゆく

「うつつ」

「便利だよねー回復魔法って

こんな早く治っちゃうんだもん」

「霊夢」

「いや…来ないで…」

小石を投げつけると

腐ったトマトのように

うつつに張り付くと溶けながら落ちてゆく

「うつつ」

「そろそろかな?」

うつつが空を見上げた

しばらくすると

広範囲に渡ってはられていた結界が解除され
空に巨大なエネルギーの塊が現れた

「霊夢」

(あれは…あの時の…巻き戻すやつ…)

「うつつ」

「始まる見たいだね

ルナクは今度こそ成功させるって言ってたよ
何が起こるか知らないけど

従者なら主を全力でサポートしなきゃ

これが私ができる恩返しだからね」

「霊夢」

「あれは時間を巻き戻して無かったことにする技よ
どこまで戻るかは知らないけど

少なくとも今の私達は消えてしまう」

スperl

霊符「夢想封印」

スperlを構えると同時に

両手を捕まれ

地面に組み敷かれた

「霊夢」

「あああああああああ!!!!!!」

「うつつ」

!!!!!!

「熱いけど我慢ね？」

すぐ痛くなくなるよ

だって消えるんですよ

このキズも無かった事になる

だから我慢ね？」

「霊夢」

「あんたは…正気なの!？」

「うつつ」

「ええ、正気よ

感情に慣れてないだけ
能力のおかげで使いこなせているけど
楽しいという思いに負けて色んな事を投げ捨ててるだけ
つまりは感情に左右されているって事
今までは哀れに思っていたけど
案外やるのは楽しいわ」

―輝針城／上空―

「ルナク」

「数十年間表に出なかつたうつつの本性…か
凄く子供っぽい仕草だな
まあお空の性格と方向性は同じだから違和感は…
いや、違和感しかないな…
まあいい

今度こそ、今度こそ無かつたことに
完全に消されるリスクが無いように
ここだけは…幻想郷だけは…」

時空の隔たりを割り

平行世界に足を伸ばしたエネルギーの塊に手をかざした

「ルナク」

「頼むぞ…」

この時以降の未来は切断、焼却され
無限に分岐した世界達は
火のついた線香のように原初に向かって巻き戻ってゆく
分岐は収束し数を減らしてゆく
巻き戻し終えた世界は再び終焉へと分岐し

時間は再び動き出した

終章 宵闇の閃光は虚影に隠された
平和な春の日

―幻想郷／博麗神社―

「霊夢」

スぺルカード

霊符「夢想封印」

「ミラ」

「負けてたまるかあああ!!!」

平和な春の陽気が眠気を誘う頃

博麗神社で飛行禁止の模擬戦が行われていた

「魔理沙」

「… 後が無くなってから被弾してもピチュらない

… 無敵の能力か？」

「ルナク」

「ハズレ」

「臍」

「… もしや俺と同じ」

「ルナク」

「違う」

ズタボロになり肉が見えている右脚

皮だけで繋がってる左腕

その状態でも

右腕で弾幕をかき消しながら

左脚で地面を蹴り距離を詰める

「魔理沙」

「飛べないって事は能力でも飛べないから…」

「ルナク」

「お？」

「ちよっと近づいた」

「隴」

「… バーサーカー？」

「ルナク」

「あらら、遠ざかった」

残った左脚に弾幕を受け

顔から地面に倒れた

「ミラ」

「くそお… こんな… こと…」

ミラ：リタイア

「魔理沙」

「終わっちゃまったか…」

「霊夢」

「… 限界の超越」

「隴」

「…？」

「魔理沙」

「…!？」

「ルナク」

「正解

まさか転生してから能力を知るなんてな」

「ミラ」

「ルナー… ダメだった」

「ルナク」

「大分能力を使える様になってきたんじゃない？」

「ミラ」

「なんというか… 薄皮を伸ばせるけど

破れない感じがするんだよねー」

「魔理沙」

「わかった!!」

ミラの能力は

「限界を超越する能力」だ!!」

「ルナク」

「惜しい… けどほぼあたりだな

正しくは」

「ミラ」

「限界を引き伸ばす程度の能力

ほら、限界という名の壁ってよく言うでしょ？

それをラップフィルム見たく押し込んで

その先に足を踏み入れる、みたいな感じかな？

あと少してそれを破れそうなんだけどね」

「魔理沙」

「さっきの即死級の被弾も耐えてたのもそういう事か！」

「朧」

「攻撃にも転じれる応用性高い能力だな…」

おい、こいつ、危険すぎないか？」

「ルナク」

「まあ実際限界は己の限界に過ぎないから

引き伸ばした先が他人には簡単に踏み入れる領域だった

って事も十分有り得る

まあ、能力が覚醒して

限界を破る程度の能力になろうものなら

霊夢や紫レベルの能力になるだろうね」

「うつつ」

「私の能力は覚醒せずとも成長するだけで

その域に達せますけどね」

「ルナク」

「まあ確かに

うつつの能力はこのまま成長し続ければ

全能の存在になるからな

俺ら管理者とほぼ同格にね」

「魔理沙」

「こわあ…」

まあお前らは今まで1度も問題は起こしてないから
安心っちゃ安心か」

「霊夢」

「あーあ、さてと」

貰うものは貰わなきゃね」

「ルナク」

「…はいはい」

ありがとうございますごいましたーつと」

小さな巾着袋を霊夢に手渡した

「魔理沙」

「おい！」

私にも渡すものがあるんじゃないのか？」

「ルナク」

「いや、当てたの霊夢だから」

もうひとつの巾着袋を霊夢に手渡した

「魔理沙」

「… 霊夢!!」

それをかけて勝負だ!!」

「うつつ」

「なら私が相手になりましょう」

私に勝ったらその袋の10倍をお2人にお渡しします」

「魔理沙」

「… うつつ!!」

勝負だ!!」

「霊夢」

「売られた喧嘩は買う主義なのよねー、私」

「うつつ」

「ちようどこの前使った感情を強める薬の改良版ができて」

「魔理沙」

「ちよつと今日腰痛いからやめとくわ」

「霊夢」

「売られた喧嘩は買わないに越したことないわ」

「うつつ」

「あら残念」

「朧」

「ところでその巾着って何が入ってるんだ？」

霊夢が持つ角張った巾着袋を指さした

「霊夢」

「…これなにが入ってるのかしら？」

「ルナク」

「これか？」

最近幻想郷で出回ってる

「アビリティカード」

という代物だ」